
セルフ・ディストラクション

白鳥準

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セルフ・ディストラクション

【NZコード】

N1562C

【作者名】

白鳥準

【あらすじ】

私の前に突然現れた人たち。飄々とした灰色の存在に、ノリノリの因果の鎖、正義を振りかざす悪意。理論と持論と一般論がぶつかり合い、少しずつ真実へ近づいていく。壊れているのは世界か自分か。壊れていくのは世界か自分か。

0・血溜まつ狂氣（前書き）

結構グロテスクな表現を扱っております。苦手な方は「遠慮ください。

ホラーっぽいですが、そういう内容は含まれません。あくまでそういう作品ですので。

理論や持論、一般論などあまりライトではない文章構成となつてありますので、そのところに注意ください。とは言え、何故か掛け合いも入れる。それが蜻蛉クオリティ。

0・ 血溜まりの狂氣

「おまえの口が嘘のうに違ひない。」

時々私はそんなことを思つゝことがある。辞書で調べてみれば、「狂氣」とは氣が狂つてゐること。また、異常をきたした精神状態のことと言つたりしへ、「狂喜」とは異常なまでに喜ぶことだと言つ。でも、狂喜とは狂うと言つ言葉が使われてゐるようだに、やはりどこか普遍的でない部分が存在するのだろうと思つ。そしてそれは狂気ではないのだろうかと。

田の前の光景を私は狂氣と呼ぶのか、狂喜と呼ぶのか判断に困る。目を眼球が飛び出すんじゃないかという勢いで見開きながら、嗚咽交じりの悲鳴と咆哮を撒き散らす女の子。悲鳴、ヒューッには少し相違が発生するかもしれない。

彼女の表情は狂喜に歪み、それを見ている私の目には狂氣に写る。三原色のマゼンタなんて比にならないほど赤く、ブラックなんて知れた名前で表現するには勿体無いほどのだす黒さが視界を支配し、それでも尚血なまぐさい臭いは私の嗅覚では感知できない。あれを血だと言い切るには幾分証拠が無いが、今まで生きてきた人生経験の中で判断するには十分な光景だった。

女の子は『何か』を引き裂き、捻り潰し、原型すら留めぬほどに真つ赤に染め上げる。臓器は剥き出しにならないし、肉という肉がちぎれる音もしないし、喰われる何かの悲鳴が聞こえる訳でもない。けれども女の子はそれを殺し、殺し、コロス。

鮮血の空間に響き渡る甲高い笑い声。耳奥にだけ反響して、私の意識がもがれそうになる。体中を引っ搔き回されるような感覚が襲

い、音のツメが私の肌に突き立てられたことに気が付く。

……痛い。……痛い。……痛い。

イタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイ！……

引っ張り出されたのは『何か』のものではなく、私の臓器、肉、悲鳴。体内で逃れることなく木霊する女の子の声は、私を殺していく。

激しい耳鳴りと、胃が大波のようにうねりを上げる感覚。眼球の奥が酷く乾き、頭蓋骨の中身が振動する。その怒涛の殺意に耐え切れるわけも無く、私は膝を付いて流したくも無い涙を地に落とす。波紋が残り、自分が座っていた場所が水たまりだと知る。

これは一体どういうことだろうか。

人殺しの現場を目撃した不幸な人間？

仲が良かつた友人が死んだ瞬間に居合わせた人間？

この世のものは思えない化け物との遭遇？

そんなファンタジックな言葉で片付けられるのならそうして欲しい。

これは『狂氣を喰らつた可愛い子の本性』か。ギャップが激しいからこそ恐怖。女の子の長い髪はきっと血のせいでもボロボロになってしまふことだろう。けれども気にしている様子は皆無に等しく、その血を天の恵みとも言つよう満遍なく浴びているようにも見えた。

ふと、女の子の声がピタッと止まった。

苦痛から解放された私は、汗だくになりながらも女の子を見る。女の子も私を見た。潰れた眼窩をぐるりと向けて、不敵な笑みを漏らしながら。

「あなたはこんなに殺して、どうしたいの？」

恐れを隠すために並べた言葉はこれだつた。女の子は先ほどの凶行とは打って変わつて、落ち着いた声で答えた。

「ねえ、私はこんなに殺して、どうしたいの？」

泣いていた。こぼれた涙も限りなく紅い。場違いじゃないのかと、私は咄嗟に怒りたくなつたが、そのあどけない表情に言葉を飲み込んだ。

それは答えじゃなかつた。それは私に対する問い。

どうしようもなく分からぬ自分への問い合わせ。答えるのは私。問うたのは私。

寂寥とした相手の気持ちに私は戸惑う。どうしてそんな無機質で、悲しそうな瞳をするのかと。あんなに殺しておいての慟哭は、卑怯じゃないのかと。

まるで子供のようだつた。血の水たまりに身を浸しているのは物心つかない子供。

だから迷い人に尋ねるよう、「私は聞いた。

「あなたはだあれ？」

すると、彼女は泣き止んで、笑つて答えた。

不気味に口元を吊り上げて、まるで狂つた口裂け女のよう。

「知らない」

突き刺さつたのは、言葉だつただろうか。ツンツとした痛みが胸の辺りに走つたかと思えば、そこには彼女の白い手が。きめ細かい肌を持つた綺麗な腕は、私の中に食い込んで中身を引きずり出そうとしていた。

脊髄を持つていかれた。

五臓六腑を持つていかれた。

体内を這うように蠢く彼女の手は、そのうち私の脳を持つていった。

不思議と痛みは無かつた。あるいは血が駆け巡る熱だろうか。
どくん、どくんと脈打つ私の全てはグロテスクで、見ていて吐き
氣を催すものだつたが、もう吐くための器官すら存在せず、かと言
つて息が漏れるための肺もなく、血を流すための心臓すらない。
けれども血溜まりは一つ増えて、彼女の身体を汚していく。また
一人、彼女はその手で殺したのだ。血塗れの掌には私のモノが。
朦朧とする意識の中、私は彼女の顔を見た。整つた顔立ちで、き
つと男子生徒にもてはやされたに違ひない。傷ついた黒髪は、きっ
と愛しい人に撫でられるためにあつたに違ひない。

笑う彼女を目の前にして、急激に眠気が襲ってきた。
崩れ落ちる身体の感覚と、崩れ落ちた意識のタイミングは一緒だ
った。

私は殺された。

1・サンドイッチ

春の日差しが暖かい昼下がりとは一変、朝は肌寒い風が吹いていた。

散る花弁はピンク色だというのに、風は青く冷たい。とんでもない場違い野郎が遊びに来たものだと人々は思つただろう。朝方の支度には若干時間がかかったことだろう。タンスから一ヶ月前にはしまつたはずの上着を出す時間の分のロースタイムだ。

かく言う私もその一人だった。遅刻する気などさらさらなかつたというのに、時計は校門の閉まる時間ギリギリを指している。これが時の神の悪戯だというのならば、一分だけでも猶予をくれるとありがたいのだが、現実そう上手くいかない。

走るのははたしないから、出来る限り最大速度で早歩きする。体力には自信のあるほうだったが、無駄に疲れる移動方法を取つているために吐息が乱れてきた。吐いた息の色は白いはずも無く、無情にも額が汗ばんできたのが分かつた。これでは上着を取つてきた意味が無い。

校門が見えてきた。時計の針は既に予定の時間よりも三分以上は過ぎており、案の定鉄格子式の門は閉まっていた。

私の学校は規則やこういつた細かい決まりにつるさく、遅刻などは厳しく取り締まるほうだった。

「……はあ、仕方ないかな」

遅刻した場合は門についているインター ホンを鳴らして先生を呼び決まりになつていい。自分の通う学校ながら、とんでもなく面倒な決まりだ。

しかし、大半の生徒は近くにある柵を飛び越えていくか何なりして、先生を搔い潜つている。私もそうしたい欲求に駆られたが、そ

れを殺してあえて優等生でいようとする。

ピンポーン。

シンプルな軽い音が鳴り、機械の向こうから先生の声が聞こえて、私は事情を嘘偽り無く伝えて門を開けてもらつた。

(これでいい。私のイメージは他の人と違つて正直者になるんだもの)

一時限目の授業はほとんど出られなかつた。これは失策だつた。教室に入った途端、遅刻してきた私を先生が睨む。敵意や邪魔者扱いのような軽蔑の目では無かつたが、私にとつてはそれが酷く気分を損ねる要因となつていた。

私は学校ではあまり類を見ない優等生だつた。成績優秀、運動神経抜群、容姿端麗…かは自分のことなので分からぬが、そこまで酷い外見ではないことは自負している。それなりの御洒落はするし、友人付き合いも悪くないはずだ。

かと言つて、これは神童のような天才的なものとは違う。私は自ら努力によつて得た地位であり、能力である。

そうすることにより、私は悦を手に入れることが出来る。両親に褒められて、友人に尊敬され、先生から好評を貰う。誰しもが望むことを私は実践しているだけの話だが、これを完遂できている人物は、少なくとも私のクラスにはいない。

何故なら、私はそれを遂行するために様々な努力をするからだ。

毎朝のランニングは欠かさない。早寝早起きは勿論のこと、自主学習など毎日の日課であり、予習復習は至極是当然の行い。親孝行のためにも、余つた時間はバイトに費やす。非常に充実した生活と

言えるだろう。不満は無い。

……キーンゴーンカーンゴーン。

四時限目の終わりを告げるチャイムが鳴った。一斉に教科書類を鞄に入れる布擦れの音が聞こえる。何かがぶつんつ、と途切れたようすに生徒たちの話し声が立ちこめ、先ほどの静寂はどこへ行つたのかと万人が問いそうだ。

私の周りにも数人の友人が集まってきた。

「お弁当食べよー」

「机寄せて。ほらほら」

「私購買行つてくるから、先食べてて！ごめんねっ」

一人の生徒が教室から駆け出して行つたのを見送った。

途端に私の頬の筋肉が緩む。これは自発的なものであり、意図的なものではなかつた。笑顔は人間関係を滑稽にするための最低材料なのだ。嫌う人間もいるそうだが、それならばそれで状況を考えて表情を作る。目の前にいる友人たちは、前者で満足してくれる人たちだ。

私も茶色の皮製の鞄から弁当箱を……手に取つた感覚がいつになつても来ない。

がさごそといつまでたつても探しを入れている私に不信感を覚えたのか、一人の友人が心配そうな顔をして聞いてきた。

「どうしたの？お弁当、忘れて来ちゃつたの？」

否定したい所だったが、どうやら図星だ。私は苦笑いしてそうみたい、と頷いた。

「ちょっと私も購買部に行つてくる。」「めんね」

そう言つてから私はスカートを押さえて席を立つ。皆口を開けていいよ、と言つてくれた。が、きっと何かしら不満を感じているに違いないと私は思った。

足を出来るだけ早めて購買部に向かつ。ここからは一番遠い場所に設置されており、階段を上り下りするのが非常に面倒くさい。

ふと、横を一人の生徒が横切つた。

「先輩こんにちは」

「ええ、こんにちは」

この急いでいるときに呼び止める憎たらしい生徒だつたが、そんな内を微塵も感じさせない笑みを浮かべて挨拶を返した。向こうからわざわざ挨拶してきてくれたのだ、それをぞんざいに扱うことなど無礼にもほどがあるだろう。

だが、不思議なことに今日はかなりの生徒に挨拶をかけられた。

「こんにちわ先輩」

「お弁当忘れたんですか？」

「どうしたんです？こんなところで」

「先輩が購買部なんて珍しいですね？」

その内焦燥が私を満たしてきた。このままでは確実に購買部の食品が売り切れる。行つた事はあまり無いが、生徒に人気があることは私も知つてゐるのだ。

それなのに……。何故こういう時に限つて……。

先に行つた友人が廊下の向こう側から走つてやってきた。手には三つほどのパンが抱えられている。

そして私を見ると、首をかしげて声を上げた。

「あれ？ 購買に行くの？ 早く行かないと売り切れるから急いだほう

がいいよ

心配してくれるのは有り難かったが、何分時間が無い。そういう気遣いをする前に、私を引き留めないといつ選択肢を取つて欲しかった。

その後も何かの嫌がらせのではないかといつ数の生徒に声をかけられ、内心苛立ちながらも笑みは崩さず丁寧に接する。そんな地獄のような廊下をなんとか突破して私は購買部にたどり着いた。

人気があると聞いていたのにも関わらず、そこにはちらほらと男子生徒がたむろしていただけで、テレビで見るような満員電車驚愕の混み具合は存在していなかつた。

ちらりと一瞥だけでメニューを確認し、私は購買部の優しそうなおばあさんに声をかける。

「すいません。」の苺サンドとツナサンドを一つ

人気のありそうなメニューだ。しかし以外にもガラスの向こうには、売れ残り確定だろうサンドイッチが静かに佇んでいる。買う人物が少ないので他に人気商品があるのかは知らないが、最悪シヨーケースの端に追いやられた青汁ジュースよりは売れているようだつた。

「あら珍しいじゃない、あなたが購買利用するなんて。はい、三百円ね」

言われた分の小銭を彼女の皺だらけの掌に乗せた。私の手から硬貨三枚分の重量が消え去つた代わり、サンドイッチ四枚分の重量が加算された。重くはないが、幾分か持つのに苦労する。財布をポケットにしまつのに少しだけ手こずつた。

と、その時、一足遅れて女の子がこちらに走ってきた。顔は知らないが、童顔に分類される那个子が慌てる姿はなかなか微笑ましい。ショーケースに突撃しそうな勢いで急ブレーキをかけて止まり、購買のおばあさんに息を切らせて叫ぶ。

「い、苺サンドとシナサンド一つー！」

「はーはー。二枚丑ね」

随分と慣れた会話の流れのように感じる。傍から見ていると、おばあさんは先ほどの私に対する態度とは明らかに違うし、女の子のほうも何やらおばあさんと親しげに会話している。恐らく常連客なのだろうと推測できる。

そのまま傍観していると、女の子が瞬間冷凍でもされたかのように固まつた。その手には財布……でもあつたら内容が容易に想像できるのだが、何も無い手を女の子は見つめている。

「おばあさん。交渉しようじや ありませんか」

唐突にやう切り出していた。

「何だい、交渉って。値切りならお断りだよ」

「何をうーーそんな卑怯な」とはしませんよつ。これを見てください!」

そう言つて勢い良く差し出した掌。……掌。

もはやだから何だと激しいシツコヒを入れたくなるような光景。だがひとつやつおばあさんにはその意味が分かつたらしく。

「ダメ」

「何でつー?」

「ツケにおいて欲しいんだから、生憎つりの購買ではやつてないんだよねえ、そういうの」

「し、しかしですね。私の掌を見てください。この不吉な手相を…じやなくて財布忘れてきちやつたんですよおおおおーー因果ですよ因果ーー！」

若干五月蠅い少女だと第一印象は決め付けた。

その後も猛獸のごとく食つて掛かる女の子をおばあさんは新聞を広げてあしらつていた。流石に諦めてきたのか、段々と女の子の勢いが萎れしていく。

私は自分の持つているものに田をやつた。莓サンデとシナサンデ。まさに彼女の欲しいものと完全一致する。

(少しくらいなら分けてあげてもいいかな……)

これは人物関係の高感度の上昇には関わらないイベントだろうけれども、あまりに必死になつていてる女の子を見ると良心が痛む。このままでは恐らく彼女の昼飯はないだろう。

そう思つて、差し出そつと一歩を踏み出した、その私の横を誰かが通り過ぎた。

田を疑つた。

その後姿は月の女神でも光臨したような後光を放つていてもおかしくないほどの美麗。男子生徒の服装が不似合いで、その無造作に流れる灰色の髪の毛が一層ギャップを増していた。私の学校では髪の毛を染めるのは禁則事項だ。ということは、地毛なのだろうか。あまりに整にすぎた顔立ちに悪寒さえ覚えるほど。しなやかな指先と腕は、女子と見間違えても責められない。

彼はそのまま女の子の横まで行くと、おばあさんにに向かってこう言った。

「莓サンデーとシナサンデーを。三五郎だつたよね」

「あら灰田君じゃない。久しづりねえ、どうしてたの？」

「いえいえ。僕は普通に学園生活を勤しんでいただけです。まあ、

最近は仕事が多くて」

世間話を広げながら、私とこれまた全く同じものを注文していた。横にいる女の子はとてつもなく険悪な表情を彼、灰田という男性に向けていた。歯軋りの音がここまで聞こえてきそうだ。あ。

そんな彼女はついに食つて掛かる。

「あ、貴方嫌がらせですかあ！？私がそれを欲していく」とを知つて……」

「ん？ そうだったのかい？ それは悪い……と思ひながらも譲る気は無いけどね。残念、三五郎を持つて出直していくと良じよ、うん」「むきいいい！！」

涼しい顔をして、何やら非情な事を言つ人間なようだ。つい頬の筋肉を緩めてしまう。

灰田と呼ばれた彼はポンツと彼女の頭に手を置くと、そのまま私のほうに歩いてきた。傍観していたのがバレたのかと、心臓が高鳴つたが、そのまま彼は通り過ぎて行つた。

……と思えば、私の一步後ろで立ち止まる。

後ろ向きだが、彼が微笑したのを背中に感じた。それは、とても『良いもの』ではなかつたように思える。何か品定めするような舐めまわされる感覚が、場違いにも不思議と私の脳みそがそつ捉えてしまう。

小声で、彼は私の耳元に息を吹きかけるように言った。

「彼女にあげないの？ それ」

見透かされた。

悪寒が背筋を走る。まるで汗だくの汚らしいジジイに犯されそうになるような、不気味で激しい嫌悪の感覚。

何故だろうか。どこにでもありそうな日常の一場面なのに、彼が言つ言葉には確かに冷たさがあった。初対面の人間にそういう言葉をかけるものおかしな話だったが、それ以上に何かが彼にはあった。今度は認識できるほどの小さな微笑を漏らすと、灰田は靴音だけ残して去つていった。

私の中で騒擾わいじょうしていつた彼の後姿を振り返ることは私には出来なかつた。怖かつたからじゃない。ちょっとした日常の中に、彼がいたからだ。

自分で言つておいて、何を言つているのか理解が出来なかつた。理解できない、という感覚で私が現実に引き戻された。目の前で相変わらず女の子が騒いでいる。この声にすら反応できないほどの放心を私はしていたのだろうか。

一体何故……。

堂々巡りの想像が無限ループで繰り返されるような気がして、私は思考を止めた。首を振つて、搔き消すように脳内を落ち着かせる。同時に私は一步を踏み出していた。

「貴方、そんなに欲しいなら、これ」

にこりと私は最大限の笑顔を持つて彼女にサンドイッチを二つ渡した。とは言え、サンドイッチは包装の中に二つずつ入つているため、一つあげてしまつても私の昼食が無くなるわけじゃない。流石の私でも、自分の昼食全てを知らない生徒に明け渡すほど優しくはない……と思う。

それを見た彼女は瞳に星を輝かせて私の手を取つた。

「ほほほほほっ本当に良いんですか！？って聞く前に貰いますけど

半ば私から奪い取るよつとして、サンディッシュをかづぱりつた。
とんでもなく凶々しい女の子だと、第一印象で決め付けた。

氣付けば緑雨。若葉は降りしきる灰色の雲から落ちる雨に濡りりて
れて芽吹く。

開花した花は赤く、まるで花弁の中央から噴出す鮮血のよつ。
私の長い一日が幕を開けた。

曇り空は滔々（とうとう）と雨を地に流し込み、ついには洪水警報まで出る始末となつてしまつた。特別河川が近場にあるわけでもないが、洪水はやはり広域に被害が及ぶらしく、学校帰りからは外出禁止となつていた

豪雨ならまだしも、洪水となつては物理的障壁の最大級とも言うべきか、流石に危険を犯してまで出歩こうとする生徒はいない。よつて欲求が発生した際に障壁によつて欲求不満、フラストレーションの類が高まるることは無いだろう。

傘を叩きつける水玉の音は激しく、持つてゐる手に振動機付きの傘でも持つてゐるかのような錯覚を覚えさせるほど震えを作つていた。路面は鮮やかな灰色とはかけ離れた色に変色し、今や空の色よりも黒い。ザーッと排水溝に雨が流れ込む音が五月蠅かつた。

私は登下校は普段は独りですることにしてゐる。普段で、というのは、何かの誘いなどがあつた場合はそのまま付いていくこともあるということだ。

集団行動というものが私は好きではない。いや、好きではないといつよりも『そうしたい』といつ感情が芽生えないと言つた方が適切だろうか。人と助け合つて生きしていく、ということは勿論不可欠だと思っているが、私にとってはそれこそ障壁だ。一人で何でも出来ていかなくてはこれから世の中、不便が多くなるだろう。

長靴の音は一つで十分。隣に歩く音は私には必要が無い。

……なのに、何故彼は私の隣を笑つて歩いているのだろうか……

……。

ちらりと私よりも背が高い彼の顔を横目に見上げてみる。相変わらず直視出来ない顔の造りだ。非常に悔しい。

すると彼、灰田は私が見上げているのに気が付いたのか笑みを漏らして何?と聞いてくる。

「それは私が問いたいわ。一人で帰りたいんだけど…どうしてついてきたの」

わざと突き放すような冷たい口調で言つが、対する灰田は全く気にも留めていないようだつた。私から視線を外して、遠くの雲を見るように前を向いた。

「あの子に結局サンドイッチはあげたのかな？」

そんなことを聞くためにいちいちここまで付いてきたのだらうか。もしやしそうだとしたら、頬に一発お見舞いしてやつてもいいくらいだ。

「あげたわよ。全部じゃないけど」

刹那だった。

灰田の表情が一変し、瞬き一つ無い無垢な瞳がずいっとにかくされた。口元は筆で一を書いたように閉ざされており、私の言葉に驚いた様子だったが、驚きの度合いが異常だつた。ホラー映画のワンシーンのような静寂が辺りを包み込み、化け物と私だけの狂氣の空間を作り出す。

まだ、と私は思つた。

サンディッチを彼女に渡さないのか、と聞かれたときと同じ悪寒。彼が私の日常に介在していることへの疑問と違和感が背筋に電撃となつて駆け抜ける感覚。

私はその瞳まるで杭で打たれたように目が離せなかつた。自發的ではなく、相手が杭を打ち込んだという意の強迫観念に良く似た硬盘。

「僕は」

化け物とは思えない澄んだ声が彼の口から発せられた。瞬間、私は映画のフィルムの中から解放された。

「僕はてっきり全部あげちゃったのかと思つたよ。そつかそつか、今日じゃなかつたんだね」

安心したように見えない。むしろまるで明日ゲームソフトを買って貰えることを楽しみにしている子供のよつたな笑顔でそう言つ。今日じゃなかつた、というのはどうこいつ意味だらうか。予定表を頭の中に想像して調べてみるが、今日の欄には何も書かれていない。それがあつたとしても、サンドイッチと関係のあるような予定はどんなものかすら思い当たる節が無い。

するとそんな悩んでいる私を見て、何を思ったのか手を私の手の前で振つて否定の意を示して言つ。

「ああ。気にする」とはなによ。すぐに分かる」とや

軽快な笑い声を上げて、私の一步先を歩いていった。私はしかめつ面を浮かべつつも、彼の後ろに付いてく。別段彼に用があるわけではなく、私の行く道に彼がいるから、というなんともベタな理由だが、実際そうなのだからどうじろと言われてもどうしようもない。雨脚が強くなってきた。傘から伝わる振動がより一層強くなり、少しだけ傘を持つ手に疲れが溜まってきたようと思える。雨音も格段に五月蠅くなり、車のフロントに突き刺さるようにして直滑降に落ちているのが肉眼でも見えた。

そうして、視線を逸らしたのが失敗だった。

「……え?」

気付ければ私は自分のものとは思えないほど間抜けな声を漏らしていた。目の前に広がっていたのは真っ直ぐで先の見えないコンクリートの一本道。自分の瞳が合わせる遠近感がおかしくなってしまったのかと錯覚させるほどの一真線。端にある建造物など気配すら感じられないほどの永久道路の上には黒猫一匹すら見当たらない。

つまり、誰もいない。

何が起きたのかシェイク状態にある脳内で判断するのが難しかつた代わり、視覚が捉えた光景を認識することがそのまま答えになるのだと理解する。

記憶の中での間違い探し。一枚の絵を見比べて私は相違点を探した。

言わずもがなというところだが、絶対的におかしい。一枚目の絵には限り無く続く一本道に一人の男子生徒がいたのに対し、数秒後に切り替わった絵には彼がいなかつた。

おかしい。おかしいのだ。

絵の中の世界なら可能でも、ここは三次元であり、逃げ出す場所もなければまさか消されたなんてこともない。例え百メートルを十秒以下で走れたとしても有り得ない。

彼の笑い声は微かな響きすら残さずに雨に溶け、彼の姿は陽炎のような余韻すら残さずに消え去った。密室殺人は完了したとでも言うべきなのだろうか。

冷や汗が玉になつて吹き出し、首筋を伝つていった感触が自我を取り戻し、私を現実に引き戻す。

これは日常。

必死に私は何かを否定し始めた。

これは日常で、きっと私は雨に黄昏ていた時間が思いのほか長かつたのだろう。それにしらを切らした灰田が帰つたと考えれば全て納得がいく。

何も心配することはない。私はしばし放心していたのだ。理由はさしづめ灰田のあの殺人犯が殺人対象を射殺すような無機質な目せいだ。

そう自己完結すると、それからの足取りは軽かつた。「気にすることなんて何もない。きっと今日は疲れてるんだ」と自分で言つていて嫌になるような稚拙な言い訳をその場に残して、今度こそ独りで一本道を長靴の音を響かせながら帰路についた。

今だ雨は止まない。窓を叩きつける音もそろそろ風流に感じつつあるが、室内にいると幾分雨は鬱にさせてくれる。

若葉も縁雨と言えどもここまで攻撃的に降られれば参つてしまつだろう。恵みの雨も用法容量を守らないと毒になるようだった。

私は帰宅後、自室で教科書を広げてぼーっと窓を見ていた。リズム感の無い曇り空のオーケストラは、聞くになかなか素晴らしいものだった。と感じるのは私が暗いせいだろう。

(なんなのよ、あいつ)

全ての原因は灰田にある。これはどうやっても否定しようのない事実だ。特別虐められたわけでも無いし、何か気に障るようなことを言わされたわけでもない。

ならば何故？

これも堂々巡りになりそうな匂いへの問い合わせだが、端折れるものではなかつた。

胸のうちに蔓延るもやもやとした気持ちが恋心だというなら可憐なものだが、残念ながら対極に位置していると言つても過言ではない

い感情だ。

その苛立ちをどうすることも出来ず、私は教科書をしまってベッドの中に飛び込んだ。先ほどまで座っていたせいか、微かなぬくもりが残っていた。

埋めた顔の中、脳内はやはり落ち着かない。これほどに勉強が手に付かなかつた日があつただろつか。青春を謳歌する学生たちが今だけ羨ましく感じた。私の場合は物思いにふける理由が下らな過ぎる。

まず何なのだ、あの灰色の髪の毛は。灰色の地毛などじこの民族でもいなければ。金髪茶髪許せて赤髪、白髪だつてあるが、灰色など聞いたことが無い。もつと簡単に言つならば、アニメで言つ銀髪なのだ、彼は。

自分の髪を見れば、メラニン色素が剥げて紫外線を受け傷ついた部分は確かに存在するが、灰色になど成る氣配など微塵も感じさせない。

それにあの言葉。

『今日じゃなかつたのか』とは、一体どうこう意味だ。明日になれば何か起きるというのか。

布団を両拳で殴りつけた。埃が舞つたような気がした。

「ご飯よー！」

お母さんが下の階から呼ぶ声がした。ふと時計を見てみると、もういい時間だつた。一体帰宅してから何時間彼について考えていたのだろうか。これでは本当に恋愛事情みたいで苛立たしい。あんなものを彼氏にした日には死んでもいい。

私は一つお母さんに返事をして、階段を降りていく。手すりが付いているのだが、私の家には足の不自由な人はいない。何の意味があるのだろうと毎回思う。

食卓に着くと、テーブルの上には現代社会では失われつつある

般家庭の料理が広がっていた。最近友人に聞けば、深夜遅くまで出歩いていたりしているために家族で食事を取ることは少ないし、朝食も一緒に取らないといつ。

私の場合は都合が一致しているだけなのかもしれないが、学校で過ごす昼食以外は外食だって付き合つて、家族での行動は大体共にしている。

……というのは表で、確かに実際そうしているが、それは親に悪い印象を与えないためだ。独立はしたいが、基盤が出来るまでは協力を惜しんでもらつては困る。利用、と言つては悪いが、似たような気持ちがあるのも嘘ではない。

そんな食卓のメニューには、私の好きなカレーが大皿に盛り付けられていた。色鮮やかな野菜が食をそそり、健康面もばっちり。さらにはスペイスはお母さんお手製で、私はそれのなんとも言えない香辛料の香りが好きだった。

異変は、家族が揃つた時に起きた。

父親がそんな私を怪訝な目で見ている。言われなくとも分かっているのだ。私だって何が何だか分からない。

記憶を巡らしてみた。帰宅した後に間食をした覚えはないし、体形を保つためにもそれは自己禁止している。

(なら何で食欲が湧かないの…?)

カレーを目の前にして、スプーンを手に取つておきながらそれ以上行動が出来なかつた。

「どうしたんだ?今日はお前の好きな母さん特製のカレーだぞ」「わ、分かつてるわよそんなこと。今日何か食べたっけなあ……」「何?食欲が無いの?あんたが間食するなんて珍しいじゃない」

珍しいと言われても、本人こと私には覚えが本当に無い。

食欲が湧かないと言つても、満腹感に満たされているからというわけではなく、発熱した時のよつた食べたくても胃袋が寄せ付けようとしているような感覚。鼻腔をくすぐるカレーの香りは確かに美味しそうだし、理性は食べろと叫んでいるにも関わらず、本能が有り得ない反抗をしていた。

「食べないなら後でも良いけど……どうするの？」

お母さんが心配そうな顔で見てくる。自分自身も心配になつてきただ。何か病気なんぢやないだらうかと疑いを持つてしまつが、まさか、という都合のいい言葉に片付けられた。

「ううん。食べる。水くれないかな、多分それでなんとかなると思う」

水分を欲しているのだろうと思つて、水道水を汲んできてもらつた。私の家庭は別にアルカリイオン水とかをいちいち買いに行く性質ではない。健康面、味面では確かに向こうが上かもしれないが、だからと言って水道水が飲めないわけではないからだ。こだわりはあまりない。

中国ならまだしも、ここは日本で、水道水は飲めると豪語しているのでから飲んでやらなくては意味が無い。

コップになみなみと注がれた水を一気に喉に流し込んだ。……確かに若干鉄臭い。

ふはあ、とオヤジ臭い吐息を吐いた。

すると幾分か楽になつたような気がした。再びこげ茶色のカレーに皿を移せば、積もるほどの食欲はやはり湧かないが、スプーンを口に運ぶことは可能になつた。

食べてみればあらびっくりとも言つべきか。意外にも食が進んだ。お父さんもお母さんもその様子に安堵したのか、自分たちに用意されたカレーを各自口に運び始めた。

福神漬けが赤い。稀に黒っぽいのも混ざつていて、私はその色が好きだった。きっと濃い味なのだろうと思つてはいるからだ。全て食べ終わつたときには、突然として満腹感が襲い、私はそこでやつと食事をしたのだと痛感することが出来たのだった。

その頃一階に置きっぱなしだされたピンクの携帯電話が振動する。ヴー、ヴー、ヴー、ヴー。

名前『灰田』。

3・ナクナツチャツタ世界

その光景を私は見ていた。

どす黒い血まみれの少女が、怯えて声も出ないか弱い女の子の脊髄を抜き取り、五臓六腑を抉り出し、ついには手探りするように体内に手を巡らせて脳髄を刈取つた光景を。

女の子は精細に作られた彫刻が壊れるような無慈悲な音を立てて崩れ落ちた。血だまりに一人の子供が沈んでいき、倒れた子の眼球が赤く、赤く、赤く……。

悲鳴は無かつた。

途中会話が少し聞こえただけで、二人とも誰かに助けを求めたりもしなかつたし、襲うほうもずっとケタケタ笑つているだけだ。

時折涙を流しながら。

矛盾している彼女の行為は恐ろしい。笑いながら人を殺し、殺した拳句嘆き悲しんで、悲しんだかと思いきや笑つて次の獲物を狩っている。逃げ出すことすら忘れた私が見ただけでも、もう何人もの子供が血だまりに沈んでいったのを確認していた。

鳩尾の辺りが酷く苦しかった。

喉の奥からすっぱい味が舌の奥に伝わっている。少しでも気を許したら胃液を逆流させそうな緊張感を私が隨時包んでいた。

アレハナンダロウ。

表現のしようの無い狂氣の沙汰。ホラー映画や、グロテスクなゲームはいくつか見たことがあるが、このような血祭りは見たことが無い。

突如現れて人を驚かすゾンビ。

宇宙からやってきて、人を惨殺していく恐ろしいエイリアン。

捕食欲望の赴くままに人を喰らう猛獸。

自らの快樂のためだけに殺人を犯す人。

一体どれなんだろうか。内臓は取り出してもそのまま。相手は悲しんでいるから快樂じやない。侵略が目的でやつてきたわけでもないし、驚かすためだけにこれだけのことをするわけもない。

私の常識から逸脱した凶行の数々。

これを見てしまつた私が罪人か。触れてはいけない世界に触れてしまつたのか。

逃げ出したい。二ゲダシタイ。二ゲダシタニ二ゲダシ……。

炯々（けいけい）とした眼光が私を貫いた。

「ひいつ！？」

思わず悲鳴を上げていた。裂帛とした声は上がらない。喉の奥に音がつつかえて発声しきれなかつた。代わりにがらがらとした肺の中で空氣の震える音が口から漏れた。

悪魔が、化け物が、女の子の皮を被つた『何か』がこちらにひたり、ひとりと冷たい足音を立てて近づいてくる。荒唐無稽だつたはずの存在がひとり、ひとりと私を狙う。

左手には血濡れの臓器。右手には血濡れの臓器。左足には捻り潰された残骸。右足には捻り潰された残骸。彼女の口元には、啜つた血液が涎と混じつて垂れていた。

ねえ。

声になつていない問いが私に向けられた。

頭の中で反芻するように響き渡る。いらないと放り出したくとも、彼女の意思が伝わつてくる。

どうして殺さなくてはいけないの？

また、あの世界の悲劇を全て見尽くしたような悲しみの表情。これから当の本人がその惨劇の記録を更新しようとしているといつに、まるで他人事のような咳き。

ぐちゅぐちゅと音を立てる嗚咽の向こうに彼女の本心があつたとしても、私はそれを救うことは出来ない。自己保身で精一杯だ。笑みが、笑みが、笑みだけが彼女の表情を支配する。そこには一瞬の悲しみも苦しみも無い。だが、だからと言って感情が喜というわけではなく、複雑に絡んだ喜怒哀楽が存在していた。まるで人間のようないい、悲しみ、ふとした時には優しそうな表情を浮かべ、次の瞬間には怒っている。

今はどうだらうか。笑つてゐる。アハハと愉快な声を漏らして、笑つてゐる。

「来ないで……っ！」

気付いたときには私は拒否と否定の意を込めて、そんな言葉をぶつけていた。威勢を張つたは良いが、ガタガタと震える両手両足は脳からの信号を完全無視する。動けどどれだけ反芻したところで、全部が無為に還る。

その時、ずいぶんと女の子が顔を寄せてきた。まるで初めて見る昆虫を観察するような好奇心の眼差し。あまりに近すぎたそれは、眼球が接触するんじゃないかと私に思わせた。相手の黒目に私の怯えた表情が写り、きっと私の瞳には彼女の狂気に歪んだ表情が写つていることだろう。

私は激しい焦燥に駆られた。

殺される。殺される。 ハロサレル。 ハロサレル。

誰が私の脳内をこんな汚らしい言葉で支配してしまったのかは知らないが、もしやつた人が近くにいたのならば、早急に解除してほ

しい。こんな、こんな恐怖を味わうべからいだつたら全財産をあげても良い。だから、誰か……。

切なる願いも声に出せなくては意味を持たなかつた。いや、声が出たところでこの世界にいる人が私を助けてくれるなどとは思つてはいない。

だつて、彼女と私しかいないのだから。

「ねえ、どうして私はあなたを殺さなければいけないの？教えてよ、ねえ」「…

優しい手つきで私の頬を撫で、愛しい人を扱うように唇を寄せてくる。血生臭い臭いが鼻につき、思わず身を引きたくなつたが、下手に動けばその頬に添えられている手が凶器にも化すことを恐れて縮こまつた。

「ねえ、あなたも知らないの？どうして知らないの？教えてよ、ねえ」「…

「し、知らないわよ。だからその手を、その手を離して…お願い…」「…

もう問い合わせ内容を理解しようとする余裕すらなく、とにかく私は彼女から離れたい一心でいた。けれども、それは彼女にとつて不服を催すものだつた。

突如として彼女の表情が喜怒哀楽で言ひ喜び哀から怒へと変貌する。

答えをもらえない」と不条理にも苛立ちを覚える幼児のような、どうしようもない。駄々をこね始める子供をあやすのは至難の業だった。

「ち、ち、違う。そうじゃないの。私はただ……」

そこまでだつた。

狂気の空間はここに生成された。私は被害者。創生者は女の子。女の子は私の顔に置いていた頬をゆっくり横にずらすと、耳の穴に指を捻じ込んできた。

「あ、ああああああああああ！？！？」

悲鳴とも言えない喉を押ししつぶすような声が私の中から発せられた。次の瞬間には喉が潰れ、空気がスースーと虚しい音を立てるだけ。

女の子の侵略は止まらない。耳奥に捻じ込んだ指は私の頭蓋の中で蠢いて顔面を引き裂こうと腕に力を入れていた。鼓膜はずたずたに引き裂かれて音を感じ取ることはもはや不可。それどころか段々と眼球付近に感覚が押し寄せてくるのを感じて、私は一層大きな悲鳴を上げた。

田の前で彼女は笑つた。

まるで私の悲鳴を聞いて楽しんでいるかのように、痛みを楽しんでいるように。

女の子の腕は長かつた。耳から侵入した、もう腕とは言えない何かは血みどろの体内を水泳でもしているようにどんどん泳いでいく。私の身体は既に動かない。指先一本に力を入れることすら許されず、眼球はもう無かつた。どこへ行つてしまつたのかと聞かれれば、きっと私の顔に付いているんじゃない？と曖昧な返事をするだろう。だつてそれがある感覚すら私には無いのだから。

嗚呼。もう私の中身はなくなつてしまつたことだろう。五感を全て失つてしまつた私にそれを確認する手段は既に無いが、そうなつてしまつたことこそが一番の証拠になる。

今彼女の手は私のどこにあるんだろう。心臓かな、肺かな、脳みそかな、子宮かな。

無くなつちやつた。

何もかも無くなつちやつた。

あはは。無い、無い、無い、無い無い無い無イナイナイナイナイナイナイ

ナイナイナイ。

ナクナツチ 。

ぐしゃり、と音を立てて世界は終わつた。

私は殺された。

朝の目覚めは普遍的にやつてくるはずだったのだが、まず私には普遍的目覚めといつものどんなんのものを思考する必要がありそうだった。

鳥のさえずりが目覚ましになるか、はたまたカーテンの向こうから漏れる太陽のさんさんとした光によるものなのか、それともお隣さんがわざわざ起きて来てくれるような漫画みたいなもののか。

どれにも当てはまらない今日の私の目覚めは、携帯のアラームかと思いきや、メールの着信音での目覚めだった。お気に入りの曲が数秒間バイブレーターと共に鳴りだし、置いていた机の上で五月蠅い音を立てた。

「朝っぱらから、誰よ全く……」

しぶしぶ私は机の上に手を伸ばした。ベッドから勉強机までの距離は短い。手探りでニスが塗つてあるだらび、つるつるした卓上を掌が滑る。携帯の「じつじつした感触は…無い。

仕方なくベッドから身を起こして、ぼやける視界の中で射程距離を伸ばして手探りを再開した。そのうち、手に馴染んだ感覚を捉える。ピンク色の携帯を手にとつて親指だけで画面を開いた。

『着信・灰田』と記されたものが三件ほどと、メールが四件。全て同じ送信者からだった。

昨夜は携帯を確認しなかつたため、昨日の夜中からメールと着信が溜まっていたようだ。とは言え、昨日は調子が幾分悪かった。たとえそれを確認したところで返信、もとい電話をしたかと言えば恐らくしなかつただろう。

……いや待て。

私は寝ぼけた頭で、ある重要なことに気が付いた。一気に覚醒を催すほどの事実は、若干の恐怖を私に呼び込んだ。

何故あの男が私の携帯番号とメアドを知っているのだ。

無論、教えた覚えは記憶の片隅に散らばる残骸の欠片の一部分、なんていう遠い親戚の話をするような言葉を並べても見当たらない。間違いなく言つた覚えはないし、携帯を見られたことすら無ければ、灰田は昨日知り合つたばかりの男なのだ。少し気味が悪い。

電話をかけ直して問い合わせてやろうか迷つたが、せめてもの抵抗のつもりで無視を決め込むことにした。今日は土曜日で休日。小学校低学年までは午前授業があつたが、今では必要かも分からぬゆとり教育とやらで完全休日。政府がお与えになつたせつかくの休みをみすみすわけの分からぬ男のために費やす必要も無い。

私の1日は至つて普通に始まる。洗顔、整髪といったこれこそ普遍的日常の象徴。普段はやらない朝シャンと呼ばれるものもやってみた。思いのほかすつきりする。癖になりそうだった。

朝食は簡単に、白米に味噌汁、加えて鮭でもあれば失われた日本の朝食に近づけたかもしれない。考えてみれば、日本の朝食は白米がベースだったはずなのに、多国籍文化だったか知らないが、いつからパンが普及し始めたのだろう。時折朝食に白米は当然だという意見を口にすると、友人からは「えつ?」という反応が返つてくる時がある。私からすればそっちのほうが大分異常だ。

家族が私より数分遅れてリビングに降りてきた。奇異の目で私を一瞥すると、すぐに洗面所に入つていった。もはや声すらかけないのかと、自分のした奇行に改めて驚く。

やはりそれもあるの灰田のせいだ。こんな朝早くに起してしてくれて全く迷惑だ。

洗面所から両親が戻ってきた。一人ともパジャマで、瞼を眠そうにこすつている。私の用意した朝食の前に座ると、私も同じくして

席に着いた。

「頂きます」
「頂きます」
「……」

まただつた。

何故かは知らないが、一気に食欲が失せて、本来口にするべき挨拶を忘れた。

黙り込んだ私に、両親は不思議そうに聞いてきた。

「昨日からあなた少しおかしいんじゃない？ 何々、恋わづらい？」

お母さんが一矢一矢して乗り出してきた。昨日もそれは考えたが、有り得ない。というより有り得て欲しくない。

「ならなんのよ。病氣かしら」

「食欲が無いみたいだな。腹痛とかはあるか？」

「つづん。お腹の調子は……」

と言いかけて、考へてもみれば病氣の可能性を何故考えなかつたのかに気付いた。確かに腹痛は無いし、吐き気も間接痛も熱もないが、最近は病原菌渦巻く御時世だ。可能性を考へてみる価値はあるかもしけなかつた。

「保険証渡すから、今から病院行つてきなさい。悪くなつてからじや面倒だから」

「そう言つて酷く年期のありそつた保険証を手渡してきた。更新とかしてあるんだろうか。」

病院の名前は森野医院といって、名前の通り鬱蒼とした森林の中にある病院だ。空気が良いとかなんとかいい訳をつけて、院長が建設したらしい。ちなみにデザインも院長のものだとか。そのおかげか何か知らないが、安らぎの空間だか、そんなことで雑誌に取り上げられているくらい名の知れている病院もある。

だが、問題が一つだけあった。

森の中というだけあって、その道のりが普通と比べると険しい。病人に対して安らぎの前の試練とでも言いたいのか、全く持つて皮肉な場所に立てたものだと思う。

険しいというのは、一般的に見れば『道路が舗装されていない』ということを言うのだろうが、私にとっては何よりも『森』という存在自体が険しい。

優等生を気取りたい私にとって、最も自虐すべき弱点がある。それが『虫』だ。

六本足の昆虫だろうが、それ以外の害虫だろうが、あの小さなフオルムに収まるグロテスクさといったら、言葉にしたら四百字詰め原稿用紙十枚は書けそうなほど。無数の網状の眼球に葉脈のような羽といい、何故あんなにも醜い形に神様は想像してしまったのか、敵ながら同情したい。

そんな悪魔の形相を浮かべる未知の生命体が蠢く森林。季節は春先で、ちょうど活動を始めた虫たちが空をひらひらと舞っている頃だ。

ああもう、考えただけでも虫唾が走る。大体何なのだ、動物に分類すらされないくせして稀に毛が生えているし、無駄に毒を持ち合わせているくせものはいるわ。地球上に無脊椎動物よりも速く誕生したからと言つて調子に乗るのもいい加減にして欲しいものだ。世界で最も生物の種類と数が多いとされているとしても、私は屈す

るつもりは全くない。

大体虫を好いている人間の気が知れない。

ぶつぶつぶつぶつ……。

頭の中で無限の愚痴をこぼしていると、目先に白い建物が現れた。清潔感漂うとは言い切れないツタの伸びた看板に『森野医院』と乱雑な筆書きで記されていた。この病院が名高いと言ってしまうのならば、大学病院には神でも住み着いていそうだ。

カラソカラソと引き戸の上に取り付けられた来客を知らせる鈴が鳴る。まるで風鈴のような音で、ここに来るといつも季節を間違えそうになる。

中はとんでもなく殺風景かつ自然的で、ログハウスと名付けるのが良いのではないかと思う。だが、密足はちらほらと見え、伊達に雑誌で紹介されただけではないようだ。

「すいません、診察受けたいんですけど……」

「はい。では、ここに具体的な症状と質問にお答えください、診察の時に持つていってください。保険証はお持ちですか？」

私はお母さんから手渡されたそれを、看護士に渡した。その代わりに、下敷きと用紙をもらつて青い椅子に座る。用紙には適当に『食欲がない、風邪っぽい』とだけ書いて、後のわけのわからないアンケートには全て『いいえ』で答えておく。

そのうち自分の名前が呼ばれた。

診察室に入ると、優しそうな女性の医師が白衣を着て、椅子をくるくると回している。カルテを見ているようだつたが、私の書いた用紙に別段特筆すべき点はない。見るだけ無駄ですよと言いたくなつたが、それを喉の奥で堪えた。

診察は簡単に、聴診器を当てられて喉の奥に棒を突っ込まれただけだ。……なんだか言つていて変に思える。

喉の赤さと心臓のリズムで一体何が分かるのだろうかと思うが、

医師の判断には抵抗できないのが日本人の性だ。私もいちいち路地をつりつく不良に声をかけるほど勇気のある人間じゃない。

「多分風邪ですね。春先は体調を崩しやすいですし」

定番になつた言葉だ。最近はこれが有名になりすぎたせいで、何かと理由をつける医者が多いが、この病院はまだ典型的タイプのようだ。多分、とか付け加えている点は保険なのだろうか。

「食欲が本当に全く湧かないんですけど、それはどうしたらいいんでしょうか？」

「風邪のせいで胃が弱つてるだけだと思いますよ。一応整腸薬と風邪薬出しますね」

診察室を出ると、昼間に差し掛かつてきたせいいかご老体の方々がちらほらと姿を現していた。これはどうやら嫌な病気をいただきになる前に撤退したほうが良さそうである。

薬局と病院が一貫してあるこの施設で、三種類ほどの錠剤の説明を軽く受け流しながら聞き、私はさつと帰宅することにした。

5・恐怖消去・痛覚残留

邪魔なものが目の前に立ち塞がつたときに、私はどうやってそれを掻い潜ろうかいつも悩む。それは物質的なものもあるけれど、精神的なものもある。

例えば、今私の目の前でにこにこと腹の立つ笑みを浮かべて待ち伏せていた男、灰田とか。

ろくに舗装もされていない林道を抜けて、日差しが暑いアスファルトの上に数時間ぶりにたつた私を歓迎したのは他でもない彼だつた。四十キロ制限の標識の下で、春先の暑い日指しの下で、優雅にハンカチで額を拭つていたところに遭遇したものだから私も運が悪い。彼に対する人間的評価を更に落としてしまつたようだつた。

森野医院からの帰りである私のことを知つているのは家族以外にはいらない。無論、途中で顔見知りの近所のおばさんと出くわした記憶が無いかと聞かれれば曖昧な返答になるが、まさか刑事ばかりの捜査能力をこの男が駆使したとは思えない。やはり、彼は普遍的ではなかつた。

「……何の用よ」

あからさまに嫌そうな顔を仕向けて、私は灰田にそう問つた。

「そんな顔をしないで欲しいね。僕は別にナンパをしにきたわけじゃない」

「分かっているわ。で、用件は何」

灰田はため息をついて、ハンカチをポケットにしまう。今日の服装は当然制服などではなく、もっと質素な服装かと予想していた私の期待を大きく裏切つた格好だった。腰周辺にはキャラキャラした

装飾に、ナウいなんて死語を吐かされそうなほどのセンスで構成された上着。春の日の下に良く似合う緑色のカーティガンを羽織っていた。

靴はそれに対して不遇な下駄のようなサンダル。ラフと言えばラフな格好だった。

ふと自分の服装を見てみる。赤いワンピースなど着る勇気も無いが、流石にパジャマ同然の服装で外に出たのはいささか間違いに思えてきた。

「君、森野医院に診療されに行つたのかい？」

「そうよ。見ての通り」

氣だるげに私は貰つてきた薬の袋を掲げる。灰田は興味無そぞうに一瞥して、すぐに私に視線を戻した。

「(一)」は春先は虫が多いだらう?僕も何度か通つたんだけれども、少しあれだけは願い下げだね。君もそう思わないかい?」

「確かに虫は嫌いだわ。今回は出くわさなかつたから別に良かつたけど、次こんな状況があつたら物凄い形相の私を目撃してしまうかもしれないわね」

「それは面白そうだ。是非とも次回森野医院に通うときは僕に連絡をよこしてくれ。例え火の中森の中でも駆けつけるから」

「森野医院にいたら既に森の中よ。全く、あなた見かけによらず変態ね」

すると灰田は微笑して、そうみたいだね、と意外にも肯定してみせた。私はやはり気味が悪く、その灰色の髪の毛を見ないよつに勤めながら彼を横切つて歩道を歩き始めた。

胸糞悪い。皮肉を言つたつもりが全くそれに気付いていないようだつた。私の後を飘々と余裕の笑みで付いて来る。本当にストーカ

「なんじゃないかと疑い始めていいも良い頃だと思うが、私はそれ以上のかを感じ取っていたため、程度の低い小学生のような思考は消し去ることにしていた。

国道とはかけ離れたこの道路は一本の別れ道も無く続いている。車道の両端には白いガードレールがあり、その更に両端には延々と続く森林。伐採される計画は立てられていないようだが、山でもないこの森が一体どの様にして出来たのがは不明だ。噂ではやはり伐採のための養殖森林だという話もあるが、それにしてはあまりにも殺伐としすぎている。カブトムシでも取りに行つたら確かにいそうだが、野鳥観察には向かない、とこんな感じだ。

そんな最中を歩いていた私の横に、灰田が追いついてきた。

「虫が嫌いな人って、何で虫が嫌いなんだろう？」

唐突にそう聞いてきたものだから、私は苦い表情をして虫の気持ち悪さを少しだけ語つてやつた。ある意味生き生きとした私の愚痴のようない文句を灰田は一語一句逃さず聞いている。

「つまり、簡単に言えば気持ちが悪いのよ。眼といい羽といい、何もかもがね」

はあ、と一度大きくため息をついた。

「じゃあもし、もしもだ、その気持ち悪いと感じる要因が無くなつたら君は虫を好きになれるかい？」

どうしたことだろうかと思考を巡らす。虫が気持ち悪い要因と言えば、語った中でもあつたが羽、眼、その他もうもうの形や手触り全てが要因だ。それが無くなることは、既に虫であることを止めているのではないだろうか。

「蜘蛛の足は八本だ。それが六本になつたところで気持ち悪さは消えない。かと言つて一本になつたつて蜘蛛は蜘蛛のままさ。僕が言いたいのはそういうことじやない。つまり、君が虫に対して恐怖といつもの覚えなくなつたらどうだらうといつ話や」

一瞬理解が出来なかつた。私が右斜め上を向いて考えていると、灰田がそんな私を見通してふつ、と笑みを漏らした。私よりも一步前に出て、その瞳を細めていた。まるでこれから悪戯を起しそうとする子悪魔のように微笑んで。

「君は神経異常の患者が、どんな気持ちで生活しているのか理解できるかい？」

いつもの通り状況に無頓着で、私の方を見てそつ言つ。

「神経異常つて、あの痛覚とかが無くなるやつ?」

「そうだね。歯医者で麻酔を打たれた状態が永遠に続いている状態と言つたほうが良いかな

「辛いわね、それは」

正直な感想を簡潔に私は述べた。

しかし、それに灰田は目を見開いた。

鬼の形相というのは常世にて狂氣と殺氣と禍々しい妖氣を含んだことを言つのだとしたら、彼のこれは何なのだろうか。

私は胸の中心を細く、頑丈な指で引きちぎられたような激しい苦しみを覚えた。自然と息が荒くなり、額から汗が滲み出る。足が杭で打たれたように動かない。膝に打たれたのか、屈伸運動すらままならず、私の目は灰田にそれこそ釘付けになつていた。

正直言つて、怖かつた。その瞬間だけ世界が凍りついていたに違

いない。鳥のさえずりは聞こえず、道路を走る車の排気ガスなど路傍の石程度にも思わない。

舞台上に上がったのは、主人公の灰田と、私。

「神経異常、痛覚が無くなること。感覚が無くなること。それは辛いこと、面白い答えじゃないか。そうさ、辛いに決まっている。人としての一歩を失うのだから、辛いに決まっている」

何度も何度も反芻するように灰田は私の目を見てつぶやく。それは辛いことだと、辛いことだと、辛いことだと、何度も言い聞かせる。

「けれどもね、僕はこう思つんだ。痛覚を失つことは辛いことと同じに、嬉しいことでもあるんだ」

「……は？」

思わず私からそんな間抜けな声が漏れた。

今やあの壊れた人形のような目は灰田から消え去り、いつもの無頓着な彼に戻っていた。

「痛いことが無くなるということは、『痛みを伴う恐怖』を克服することに繋がるんだ。先端恐怖症の人間がいたとして、そいつに僕はナイフを突き立てる。当然怯えるだろうし、僕はだからと言つて止める氣も無く、その人間を刺す。きっと人間は氣絶するだろうね。そして目覚めた時に僕を叱る。殴る。蹴る。けれども僕はまたナイフを突き立てるんだ。そういううちに、きっと人間は刺される恐怖から抜け出すことが出来る。だって、痛みを感じないんだから」

理屈は通つているのだろうと思つ。先端恐怖症の多くは『刺され

てしまつ』という無限の妄想から恐怖を抱くパターンが多いという。程度は上下様々だが、鳥肌が立つ程度の人もいれば、震える手足に数分を要する重病な人もいる。

刺されてしまつということは、『痛み』や『死』に直結する。つまり、その一点である痛みを取り除けば緩和されるということだ。それを刺して何度も認識させ、自然とそう思い込むまでに凶行を繰り返す。痛みがないと。

だがそれは『被害者』である当本人以外には推測するべき事象ではないと私は思う。例えば、いじめや自殺の小説を書く人間が増えているが、その作者がそういう体験をしたことが無いのに想像だけで書いていては所詮は程度が知れる。物事を体験からではなく、推測で語るにはあまりに大きい話題だと思った。

「君は今、それは僕の推測でしかないと思つただろう？ そうさ、その通りさ。僕のような何ら不自由なく生きている憎たらしいホモサピエンスなどに病気の重さは語れない。けれど… それは単なる比喩表現だ」

思考を読まれたことに気味悪さを覚えながら、この男がやはりただものではないことを再認する。私は見えない何かに碟にされた手足をやつとのことで動かし、手の平を閉じ開きして感覚を取り戻した。多少痙攣のようなものを繰り返した指先が氷から溶けた液体のように動きが滑らかになる。

「僕が言いたかったのは、『恐怖心』というものが無くなることが、果たして辛いのか幸せなのかということだよ。だって、怖いものが無いなんてとても嬉しいことだろう？ けれども神経異常の人に対しても『辛いだろうね』と僕らは言つんだ。痛みなんていう不動の恐怖を克服出来るのにだよ？ 知らないうちに傷ついているから可哀想？ そんなものは不注意でしかない。僕は思うんだ、感覚が無くなるこ

とは人にとつて辛いのかもしれないけれど、本質的には別にどうでもいいことなんだ」

「……どこがどうでもいいのよ。怪我をしても気付かないだなんて危ないじゃない。ふとした拍子に大事故になることだって有り得るわ。あなたはそういう点樂観的すぎね」

「樂観的？違うよそれは。僕は眞実を語つているだけだ。言つただろう、人間的にはそれはとても不自由で辛いんだ。それは僕も理解している。けれどもね、『痛みを感じない』という点においてはそれはとても嬉しいことなんだ。痛みを伴つてこそ人は成長するものだというけれどもあれは嘘だ。鉄は打つて固まるかもしれないけど、人の心と肉体は打つても固まらない。弱い者は弱いまま。殴られて強くなれるわけじゃないし、痛いものは痛いまま。それを受け付けなくなるということは、既に人越とも言うかもしれない。痛みを知らずに育つてきて何が悪い。痛みを知ることが出来なくなつて何の不都合が生まれる。痛覚なんてものは、いらぬいんだよ」

巻くしたてる上げるように言い切り、それでも灰田は凜とした態度で私の横にいる。理論というものを二段ほど飛び越した灰田の論理に私は半ば凍りついていた。

彼の意見を鵜呑みにすることは不可能だったが、理解できなくも無い。人間の危機管理能力の一つであること以上に確かに痛覚の意味合いは無い。かと言つていらないわけもない。こればかりは飛躍しそぎていると私は思いつつも、彼の言つことに深く考え込まずにはいられなかつた。

「どちらにせよ、僕ら人間には痛覚がある。痛みを恐れる恐怖心がある。虫を見て怖がる恐怖心がある。けれども

瞬間、再び世界が凍りついた。

灰田は目を見開き、まるで面白い玩具でも見つけたような童心に

溢れかえった表情を見せ、私の傍によつて肩の上に手を滑らせた。その感覚が冷たく、私は思わず冷水を被つたときのような身震いをしてしまつた。

一つにこりと笑みを漏らすと、彼は視線を地面に落として指を刺す。私はそれに誘導されるようにして、何があるのか予想もついていないのに恐る恐る首を下に向けた。灰色のアスファルト、ガードレールと森林の木陰で冷たくなったそれの上に、黒っぽい何かが蠢いていた。六本足でじたばたと羽をつるさく羽ばたかせてのた打ち回る姿は滑稽。

私は、反射的に踏み潰した。

。せひべ、せひべ

ケモヤケモヤケモヤケモヤケモヤケモヤ !!

と
私の中だけで音を立てて演す 外界の畠田から見れば それ
はほんの些細な出来事。私にとつてもそれはほんの些細な出来事。
足の裏に何が付こうが、別に何だつて良かつた。

「けれども君は恐怖しない。は、ははっ。踏み潰してしまつたよ、これは笑える、笑えるよ。命の尊さなんて頭の片隅に微塵も無いんだね？その足の裏に何がへばり付いているのか雑草ほどの興味も持たないんだろう？そして君は言つんだ……」

私は灰田を見た。大口を開けて笑っている。その歯を砕いて、綺麗な髪の毛を剃り取つて、澄んだ声が出る喉を潰して、輝く碧眼を抉り取つて、流れるような四肢を引きちぎ。

視界がブラックアウトした。脳みその裏側がちりつ、と焼けたようになくなつたかと思えば、視界が暗闇に支配されて私には何も見えなくなつた。

けれども口が動いた。彼と同じように、口が動いた。

『アナタハダアレ?』

私の頭蓋は爆炎に包まれ、消え去った。

6・異変・天才考察（前書き）

長らく更新してませんでした。

今回の話は少し読みにくいかもしれませんので、『注意ください』。

そこにある種の天才がいたとしよう。
学者でも料理人でも運動でも何でもいい。『俗に天才と呼ばれる』
人物がいたとしよう。

天才とは常に万人の尊敬と憧憬の対象であり、そうであれと望まれるものもある。それ故に物語の中では天才というのはその才能故の苦労を強いられていることが多いが、それは『傍観者』からすれば関係の無いこと極まりない。他人の苦労は自分には分からず、自分の苦労は他人には理解しがたい。当然の理論だ。

それを目指す人間、が多々いただろう。自分もああいう風になつてみたい、ああいうふうに尊敬のまなざしを向けられたい、と。子が親を目指すのとは根本的に次元が違うと分かつていながら努力をして、ふと気付いた時には諦めているものだ。

憧憬とは常に『憧れ』でしかなく、それを『目指してみよう』とは思つても『再現する』とはまた異なるものだ。

例えば年間に五十本のホームランを打つ選手がいたとして、ある男の子がそれをキラキラとした眼差しで、ほんとうに無垢で純粋な気持ちでそれを目指し始める。だが、努力をして気付くことがある。五十本のホームランとは既に『天才』の領域であつて、自分が目指すものではないことに。再現できる範囲のものではないことに。すると、男の子は次いで四十本のホームランを打とうと頑張り始める。それが普通であり、『憧れ』が『現実』になどなるわけがないと、先入観をとうに超えた概念が人間にはあった。

だが、それが全ての人間に適応される思考なのであれば僕は彼女に出会わなかつただろう。

彼女はあまりに異端だった。

異端とはつまり常軌を脱してしまったことであり、異端にとつての異端は普通でしかない。そのどちらからも異端とされる彼女は、

紛れも無く異端。

彼女は常に完璧であらうとする。それは、『憧憬』を超える、『夢』を超える、『未来』として見据えるほどに。しかし、それほどに目指すものがありながら、彼女は自らの欠点を妥協する。それは仕方の無いことだと頭の隅に追いやる。その数がどれほど多かろうが、出来ないことは出来ないと妥協する。

つまり彼女は、『出来る』ことだけを完璧にこなし、それ以外を排除する『思考の持ち主』なのだ。一見してそれが普通のように思えなくも無いが、そこは僕にも説明し難い微妙な境界線が生じる。

「例えば、彼女は料理が得意だとしよう。すると彼女はある中国の有名料理人のような料理を作りたいと言い出すんだ。けれども、高校やそちらの歳でそれを極めることなんて出来るわけがない。彼女は天才ではないのだから。すると彼女は諦める。それは自分には成し得ない領域なのだと無意識に理解し、『自我』『思考』というものから完全に追いやることが出来る。まるで、中華料理なんてものは最初から無いといつよつて」

それが顕著に現れたのが先の『虫に対する恐怖の無意識的完全疎外』だ。

しかしそれに納得できると同時に僕は思う。

「それは即ち諦めではないのだらうか?」

一体何度もこの問答を続けたのか分からない。

分からぬほど続けた問答に僕は、妥協といつ答えを出した。

妥協とは、つまりどこか『そうなってしまう』ことへの諦めでもあるが、それはイ「ールして『何もしない』といつにはならない。だから僕は彼女の願いをかなえることにした。その無意識下にある願望を引きずり出すようにして願いを現実へと変える。

人としての完璧とは、普遍的なことであり、人でない故に完璧なことは、既に人越という。彼女の完璧はあまりに人間らしそぎるから、その人間らしさはあまりに異形だから、『本物の完璧』を彼女の中再現する。

それが僕こと灰田純一がここに在る理由であり、『存在の暴力』セルフディストラクションを襲名した所以でもある。

その日の目覚めは一度目であったが、ここまで普遍的な目覚めで無かつた日常は一度と来ないだろうと私は思う。メールの着信音で目覚めるなんてことは有り得る話であるが、私の目の前にこの男がいた、というこの状況は決して有り得てはならなかつた。

一体全体どういった経過があつてこうなつたのか、記憶は定かではないが、『確かに熱中症か何かで倒れた』はずである。確かに記憶にある炎天下に長時間居座ればそれも捨てた可能性ではないが、目の前にこの男がいると実は手刀で昏倒させられたのではないだろうか無意味に誇大な想像をしてしまうものである。

知らぬ間に私は自分の部屋に戻つていた。恐らく状況から察するにこの男がここまで連れて帰つてきてくれたのだろうが、だからと言つて私の枕元で嫌な笑みを浮かべるのはよして欲しいと思つた。

自分の額に手を置くと、ほんのりと熱が伝わってくる。本格的に風邪を引いたらしい。

そこで初めて灰田は私が起きたことに気付いたのか、どこから持ってきたのか、私の額の上に濡れタオルを置いた。

「現在時刻は五時半といったところだ。別に疲労が溜まっていたわけじゃないだろうに、随分と長く寝ていたね」

ひんやりとした感覚が額から身体全体に伝わっていく。ちらりと窓の外を見てみれば、虚ろな曙光が世界の八割を占めていた。森野医院に出かけた時間とは全く相容れない光景だ。〔冗談ではない、危うく半日を惰眠で過ごすところであつた。寝すぎたせいか、頭の奥が酷く痛かった。〕

私は枕元に手を置いて、ゆっくりと立ち上がるとする。しかし、それを灰田が『待つた』の姿勢を取つてそれを制した。

「君は少々——おかしくなつている（…………）ようだからまだ休んでいたほうが良い。君に肩入れするつもりなんて微塵も無かつたけど、流石に目の前で倒れられたら適わないからね」

「嫌な表現使うのね。……それより、どうやって家に入ったの？見知らぬ男を家に入れるほど私の家族は警戒心の無い人たちじゃないと思つてたんだけど」

「ああ何、気にしないで良い。彼らは僕に『また明日にでも調子を見に来てくれる』嬉しい』と言つた。それを僕がただ単に『ではまた明日』と言つてここにいる。それだけのことだ」

「つまり不法侵入？」

「…………えあ、どうだるうね」

上手くはぐらかしたつもりなのだろうか、灰田は黄眉に向けておぼつかない視線を送つた。やはりどうにも掴めない男であると改め

て認識する。彼の銀色、いや灰色の髪の毛は何度見ても異質で、それでいて私の気分を激しく揺さぶる。彼の瞳はまるで、他人の中に入り込んで内側からドアを壊そつといつくらいの勢いでノックする暴力のように静かで痛かった。

「……ヒロで、天才とは、一体何だと思つ?」

「……は?」

なんだか数時間前にも同じような反応をした気がする。が、今回も灰田は付け入る隙など蟻の巣の入り口ほども持ち合わせていない。いたつて真剣にそう私に問うた。

しかしあまりに唐突すぎるそれに私は思わず問い返した。

「いきなり何よ。どこの悟り開いたのよ全く……」

「なあに、君が寝ている時に少し考えたくなったのさ。君も、優等生を気取ってるのならば考えたことがないわけじやあるまい?」

その発言には流石の私もイラつときた。灰田を睨みつける。

「氣取つてゐて……何様のつもりよ、貴方。最近付回してきたと思つたら、ちょっと圖々しいんぢやない?ストーカーとか何とか考えたことあるけど、貴方それより大分悪質な氣がしてならないんだけど」

だがその炯眼けいがんすらも彼はもろともしない。いや、前提として間違つてゐるのだろう。彼は既に私が睨みつけていることを知らない。眼中にすら入つてないくせして、ここまで気にかけてくるこの矛盾が腹立たしい。なのに彼は笑う、妖しく笑みを漏らす。

「くくく。それはそうだ。君が僕を不快に思うのは当然の理。自分

の領域の中に不適合因子^{アリトリ}が入りこめば嫌悪する。そんなのは熱帯魚

だって同じさ。まあ最も彼らの場合は、嫌悪ではすまなそうだが「共食い、もとい油でもぶち込んだら一気に死ぬわね」

「 そりやつて危険な、本当に君とは思えないその発言が楽しいね。君にとつて僕が油かどうかと聞かれればそれは違うね。僕は君にとつて『毒』^{よくないまの}であることに間違いはないと思うけれど、それは決して死に繋がるとは限らない。僕もこの世に生を受けてから結構経つけれど、いくらなんでもこんな状況で君を殺す計画を虎視眈々と狙えるほど僕も狂った人間じやない。……いや、狂つたつて意味で言えば、それ以上か」

そして再び妙に濡れた笑い声を漏らす。

まるで 自分が狂っているのを、心底楽しんでいるように思える。あの壊れたフランス人形ぱりの威圧感と恐怖感のある瞳を輝かせることは無いが、何故だか、そう、傀儡子に操られる傀儡子。器を操っているくせして、その器に翻弄されているかのような不安定で、奇怪で、奇妙な男。

昨日までとはまるで違う灰田純一が、そこには存在していたように思える。それが何故なのかは分からぬ。私が彼のいる日々を過ごした中で、何かおかしい点があつただろうか。

いや、違えてはならない。

彼との日々を数えるな。彼を数えなければならない。

常に狂い、常に晒し、常に常でいた。だが。

「いやなんだ。衰弱している状態の君にこんな訳の分からぬことを言つのも何だけど、僕は人間なんて低俗な生き物に分類されるべき存在じやないんだ。ん、とは言え決してこの存在が嫌いなわけではないんだ。彼らには十分に楽しませてもらつていいし、無論だけど僕は君が気になつてゐるからここにいる。それは間違ひない。ま

あ、果たして君が『白』^{グリーン}なのか『黒』^{レッド}のかはまだ定かじやないんだけれど、くくく、まあ僕にとつてはどちらでも良い話だ。それよりも、僕の問い合わせてくれないか？君とつて天才とは何だ？」

だが、そこにいたのは『常が常でない』ものである。あれはきっと『化け物』だ。何かが、何かがずれ始めているかつて『人間』であつたものに恐らく等しい。そして同じくして、自分を化け物か何かと勘違いしている正真正銘、疑いようの無い馬鹿だ。

なら、正面真っ向から私が、『優等生』である私が叩いて見せようじゃない。

「……天才っていうのはね……生まれつき備わっている、人より飛びぬけて良質な、それでいて完全な能力のことよ」

下らない、自分で言つても実に下らない答え。思わずくすりと笑つてしまつた。

だがそうして私が微笑を浮かべたのと真逆に、灰田は心底面白そうに口元を吊り上げた。……これだ、これが灰田純一の真であり嘘の姿。

胸糞悪いが、どうやら私も普通ではないらしい。この男に楯突くなんて、あまりに無謀だ。このまま殺されるのもしれないとも思つてしまつた。

「ああ、実に君らしい。実に『優等生』^{きみ}らしい答えた。そう、人より飛びぬけて良質で、完璧な能力のこと。補足を付け加えるならば、そのままを実行できる人間のことも言つただけれどね」

「単純な補足ね。貴方の事だから、もつと不可解なことを言つのかと思つたわ」

だが灰田はその口元をゆっくりと一本の線に戻し、普段、普段と

言つて良いのか分からぬが、優しそうな表情に戻つた。

「なあに、僕とて人間に分類されるべき人間じゃないと言つたが、それは即ち僕も人間なのさ。ああ、物凄く残念で、非常に喜ぶべきことには。つまり僕も完璧じやないし、人間の枠外に位置できるほど壊れてもいい。故に僕にとつての天才も、君の意味するところと同じ場所にある。ふうん、そうかそうか。……で、君は天才に憧憬を抱いているのかい？」

「勿論。私はあんたみたいな奴とは違つて、常に上を目指しているもの」

その答えに満足したのか、灰田はさほど私に興味も無くしたかのように視線を外して、今あつた出来事を全て帳消しにするような言葉をほざいた。

「風邪は万病の元さ。早めに治すと良いよ」

「そう思つてくれているなら、絶対に明日来ないでね。気分が悪くなるわ」

「了解した。明後日学校で会おうじゃないか。また、その日まで」

「ええ、本当は一度と会いたくないけれどね」

それに言葉を返すこと無く、灰田はそこから自然に出て行つた。ガタンッ、と小さく音を立てて扉が閉まる。知らぬ間に私の額に乗せられていた濡れタオルは熱ですっかり温められてしまつていた。ちょうどビーチの横に水桶があつてので、それに私はタオルをつけれる。

三十七 弱ほどしかないだろうその熱は、きっと明後日には治つている。それが今回のことと、最も悔やまれた事項だった。

7・因果マッハカン（繪書き）

少しロメテイタイプの話です。

7・因果マシンガン

世界には今まで使えていたものが突如、本当に突然に使えなくなることがある。

筆も使つていれば段々と毛先が解れてくるし、機械も駆使していればいつかは壊れる。故にこの世界には壊れない絶対のものなどほとんど無いに等しく、それは人間の身体も同じである。身体の、脳の細胞が死んでいつていつかは動けなくなる。人間は機械のような身体だと比喩することが多いが、実際にその通りだと思つ。壊れない人間など人間に不等号である。

壊れる人間こそ人間に等号である。

なら、彼はどうだろうか。

灰田純一。彼は完全に壊れている。人間らしい部分なんて所詮言語を話す、DNAがそれっぽいくらいの共通点しか見当たらないだろつ。

存在自体が暴力のようで、器は人形、心は灰色。

……と、ここまで考えたところで一気に馬鹿らしくなってきた。

こんな戯言みたいな思考は私には似合わない。首を振つて、もやもやとした頭の中を焼き消した。

今日は正真正銘、何の偽りも無く田曜日であることに語弊は無い。昨日は熱で一日中……と言つても半日だが、灰田があの後私の部屋に来ていたことを親に知られることも無く、ベッドの中で読書をしながら過ごしていた。

そのかいあつてか、朝一番で熱を測ると三十六 台まできつちりと下がつていた。関節を回してみるが、違和感は無い。快調のようだつた。

と、私がベッドから出ようとしたときだつた。

ピンポーン。

家のインター ホンが無機質な呼び鈴を鳴らす。今日は田曜日であ

るが、両親は一人とも朝早くから仕事に出かけている。なんともハードワークでお疲れさまであるが、休日も潰す親もそうめんは無いだろう。

「……つたぐ、朝っぱらから何なのよ……」

「——一週間はきっと早朝の運が最悪なのだろうと思つた。テレビをつけて確認してやるつかと思つたが、とりあえずは玄関に下りることにした。

「はいはい、どうひ様~？」

氣だるげに扉を開けた、その瞬間だった。

「先輩つ！ おはようございます！」

「……」

……誰？

目の前に現れた少女、少女と言つていいだろう彼女は、髪本来の艶を失わない程度に染められた茶髪に、後ろに一つ結びをするストレートボニー・テール。服装は随分とラフなワンピースをしてきていた。手には小さなハンドバッグが握られており、今からデートにでも出かけるんじゃないかと思わせる風貌だった。

そしてどうしてか、彼女とはどこかで顔合わせをした記憶がある。先輩、と呼ばれたからには恐らく後輩なのだろうが、『先輩』と私を呼ぶ後輩は第一学年の数と等しいほどにいる。顔合わせをしたことに間違いは無さそうだが、覚えているはずも無かった。

「ええっと、どちらさま？」

「忘れちやつたんですかあ？」

「ほらほら、金曜日に購買部でサンド

ウイッチを分けて貰つた貧困民ですよ。因果ですよ因果。原因と結果です」

「……あー」

なんだか靄のかかつていた部分が取れかかつてきている。金曜日と言えば、私が灰田と始めて出くわした日であるが、そのきっかけがこの少女ではなかつただろうか。第一印象、五月蠅い。

「あ、思い出してくれました？　いやですねー、あたしも自分のことは結構薄々感づいてたんですよ、影薄いって。別に前髪垂らしてるわけでも背後靈背負つてるわけでもないのにあんまり他人から気にされないって悲しいと思いませんか？　あ、だからと言って友達少ないわけじゃないんですよこれが。しかも今回は先輩ちゃんとあたしのこと覚えてくれていたみたいだし、万事解決ですよ。因果ですよ因果」

訂正は無い、第一印象は五月蠅いで不動である。

それもまだ彼女は止まらない。朝田と同じく眩しい笑顔を輝かせながら言葉は続く。

「いやね、あたしもこの『因果ですよ因果』って毎回言つてるのも自分でうざこなあとか思つてるんですけどね、こう、『運命ですよ運命』とかちょーっとばかしこ女チックな台詞つてあたし的にあまり合わないんですよ。ほら、白馬の王子様とか存在するわけ無いじゃないですかー。あいや、そりやあヨーロッパにでも旅立つて白馬飼つてる人にプロポーズでもされたなら別の話ですけどねー。やっぱそれも因果じゃないですかー」

訂正しよう。五月蠅いとは五月の蠅が特につるることから発足した言葉であるならば、この子を五月蠅いと呼ぶには語弊がある。

第一印象はマシンガンに決定した。以前遭遇した時も静かな子ではなかつたが、まさかここまで舌が回る子だとは思いもよらなかつた。扇風機顔負けである。

「ま、待つて貴女。少し落ち着きなさい……。まあ、名前を名乗つて」

すると、彼女は私の注文が何故か意外だつたのか、一瞬呆けてから「コツ」と笑つて答えた。

「白椿菊乃つていうんですよあたし。マジに不吉だと思いません？この名前。椿は首落ちでお見舞いにタブーだし、菊は習慣的に葬式にタブーですよこれ。因果ですよ因果。椿あるところに菊ありつていやまあこれはあたしが勝手に考えたんですけどね」

「そんな豆知識はどうでもいいんだけど、結局私の家に何をしに着たのか教えて頂戴。　　あ、その前に何で私の家を知ってるわけ？」

「家ですかあ？　そりやあの田にストーキン……じゃなかつた。お礼を言おうと思つてこいつそり付け回してたんですよ」

「貴女、それ訂正する意味が無いわ」

「おうつと！　失態ですね。いやね、あたしも今巷で流行のケーワイでしたっけ？空氣読めない人間にはなりたくないんですね、先輩が親しげに男性の方と歩いてたもんですから自重させていただいたんですよ」

その言葉に私は顔をしかめた。あの豪雨の放課後、灰田と共に帰宅していたところをこの白椿さんに見られたらしい。どうやら深読みはしていないみたいだが、あまり私としては放つておける事態でもなかつた。

放つておける、ところは決して『灰田と共に見られた事』では

ない。問題は、

「貴女、あの男の『』と知ってる?」

この點一につに限られる。

「あはは、嫌味ですか先輩? あんなやつの『』と、知ってるわけ無いじゃないですか」

「……やつ」

知らないらしい。刹那ではあるが、表情に笑みが消えたのは気のせいであろう。というよりも、何か違和感を感じる。

嫌味? 嫌味って何だらうか。

「というよりも何でそんな質問を? あれって先輩の彼氏じゃないんですかー?」

「あれが彼氏だつたら私は今頃棺桶の中よ。貴女も見たならなんとなく感じなかつた? 彼、ちょっとおかしいわ」

「いやー、あたし千里眼つていうんですか? そういう因果に関係無いことは全く分からんのですよ。『見る』つていう原因に対して『理解する』つていう結論は結びつきますけど、『判断する』とはまた別物ですからねー。奇跡とか信じない性質ですし、あの灰色の方と面識があるならまだしも遠くから見てるだけで人を判断できたら今頃あたしは聖徳太子ですよー」

「聖徳太子は別に千里眼なんて持つてなかつたと思つけど……」

頭が良いのか悪いのか分からない発言を良くする子だと思つた。

しかしこの白椿菊乃という少女、果たして『因果』といつ言葉の意味をしつかり理解しているのか悩ましい。確かに千里眼は因果とは全く関係の無い超能力と称されるような事象であるが、結果的に

は『千里眼を使えば見える』といつしかりとした因果の元に成り立っているものであつたりもする。一見して卑怯な理論に見えないことも無い。

そもそも、因果律、つまり原因と結果の法則は、ある結果の前に必ず原因があるというが、閉鎖性の成されていない因果律など因果と呼ぶにはあまりに不確定要素が多くなった。彼女の言つたものを例とすれば、『白馬の王子様』が現れた原因は『ヨーロッパでプロポーズを受けたから』ということになるのだろうけれど、それは別に『留学生だったから』とか『過去に馬の飼育場で働いたことがある』なんてアホらしい原因でも構わないし、むしろ言ってしまうならば『偶然』なんていうのも有り得る。

因果なんて格好の良い言葉ではあるが、実際のといひあまりにも不安定な基盤なのだ。

「ああ先輩、そんなことよりもですね、今日はお礼に参りましたんですよ」

……と、閑話休題、といったところだらう。白椿さんは私の手を取つてぶんぶんと上下に振る。早朝から元気なことこの上ない。目覚まし時計には少々鬱陶しいくらいだ。

「そうだったわね。で、何かしてくれるの？」

すると彼女は満面の笑みでこいつ答えた。

「朝マック行きましょ、朝マック！」

「……え？」

元気系と健康優良児は同等ではないことをこの朝知った。

8・朝食はマクドナルドで

朝マックする？ といつ広告がテレビで何度か見たことがあるが、そもそも朝食を外食で済ませるという経験をすること自体学生には珍しいのではないだろうかと思う。あれは言つても社会人、朝食を取る暇の無い大人に手軽に食べられますよ、というサービス精神からであつて、決して学生が好んで取るような朝食の方法ではない。とは言え、意外なことに朝のマクドナルドにはやはり社会人ではある人が多かった。席を取つて朝食を取る人はほとんど反比例だつたが、まだ濁りきつていらない空氣の中でハンバーガーというの中々に良いものだった。

私は簡単に百円程度で済むハンバーガーに加えて軽いオレンジジュースを注文し、白椿さんは暴飲暴食とも言える量を頼んでいた。強いて挙げていくなら、チーズバーガー×2、テリヤキマックバーガー、アイスティー、ジンジャエール、ポテト・サイズ、そして律儀なことにサラダも忘れていない。見ているこつちが吐き気を催す量である。これは流石に夕食でも多い。

「そ、そんなに頼んで全部食べられるの？」

彼女は田をキラキラさせて頷く。

「余裕ですよこんなの。あたしがマックに着たらこれを注文！ 因果ですよ因果」

「そう……。太るわよ？」

「大丈夫、あたしの胃袋は基本的に全ての食物が別腹別腹、まるでゴミの分別みたいですがそんな感じに果てしない銀河系が広がってるんですよこれが。俺の胃袋は宇宙だ、なんて屁でもないですよ」

「なら本物の胃袋の中には何が入るのよ」

「酸素ですね」

それは肺にだろうと突っ込みたかったが、恐らく不毛に終わるだ
ろうと推測してやめた。

白椿さんがチーズバーガー一個皿に口をつけながら聞いてきた。

「それにしても先輩も貧欲ですよねー。折角あたしが奢りますよー
って言つてるのに、そんな一品だけなんて。あ、今からアイスクリ
ーム一品追加頼んでおきましょーか? いや太るのを懸念している
なら大丈夫ですって。先輩スタイル良いですし、運動すれば万事解
決ですよ。ていうか毎朝ランニングとかしちゃつてますよねその肉
体美。因果ですね因果」

食べている時すらも口の減らない娘だつた。

私も話していくは食が進まないと、ハンバーガーに口をつける。
ジャンクフードはあまり好きな類ではないが、味が良いというのは
保証できる。最近はカップラーメンも様々な味が出てきて飽きを回
避したらしく、米国のジャンクフード文化は確実に日本に引き継が
れているようだ。

私が口をつけるのと同時に、白椿さんの手からチーズバーガーの
姿が消え、代わりにストローを吸っていた。左手にはテリヤキがあ
る。口がべたべたになるのを怖がっているのか、どこから食べよう
か迷つているように見える。

「ところで、貴女のその『因果ですよ因果』って口癖随分おかしい
わね。誰かの真似?」

「あたしのですか? いや別に誰の真似でも無くオリジナルです
けどね。さつきも言いましたけど、これでも自分で変だなあって思
つてるんですよこれが。まず高校生で因果なんて言葉やたらと使う
時点でおかしいじゃないですか。まあ簡単に言つてしまえば、あ

たし

運命って言葉が結構好きだつたんですけどね、やっぱあたしには乙女チックなものは合わないなあと思って、ほら、小説家が『概念』とか『観念』とかやたらと使ってカッコよさアピールしてるのと同じようなもんですよ。だからあたしも『因果』とか使っちゃつてるわけですよ。あんまり意味分かつてないんですけどね

「ああ、あるわねそういうの。高校生とか良くやるわ」「ですねー。」

「ハンバーガーが一段であることを誰が決め付けた。それは観念だ』みたいなつ！ ああ、話してたらメガマックとか頼んでみたりなりません？ 因果ですよ因果

「……ならないわよ。特に今の状況を見てたらね

「あははー

申し訳無さそうに頭をかいて、テリヤキマックバーガーを胸袋に放り込む。同時に頼んであるジンジャーエールが、ずずずずつ、ヒ音を立て始めていた。

「先輩つて運命論とか信じひきつタイプ……なわけないですよねー

突然そう白椿さんが結論した。先ほどの話から同意でも得られると思つたのだろうが、自分で言つておいて途中で気付いたのか萎れていた。

そして私が答える前に、どこか遠くを見るような目で語り始める。

「いや分かってるんですよ。最近の女子『一セーつてやつも随分とませひやつてまあ、『運命を感じたのー！』なんて言つてみてくださいよ。周りの人たちに『ほいほい』ですよ。先輩もどっちかというと運命なんてクソ食らえって感じですかね。いや実は言つとあたしも別に運命なんて信じちゃいないんですよ。原因も何も無いのに、そういう運命だった、だなんて理不尽すぎてアイスティー吹いちゃいますよホント」「

「」の白椿菊乃という娘、もしかしたら物凄い子なのかもしない。一見してどこにでもいそうなギャルのような雰囲気をかもしだしているにも関わらず、何か深いものを感じる。それが何なのかは定かではないが、恐らくは『因果』という言葉を覚えた、『運命』という言葉を乱用するようになつた原因があるのだろうと思つ。

「」と笑つてはいるが、そのくせ腹の中で何を抱えているのか検討も付かない。ある意味では灰田と同じく掴めない少女である。とは言え、金曜日の下らないことに律儀にお礼をしてくれるというのは素直に嬉しい話で、私は相手に失礼な念を抱いたな、と思つて彼女の話に微笑んでおいた。

「あー、笑つたつてことは岡星ですか煮干ですか一番星ですか。いいんですよ、あたしも先輩も同類、『夢見ない乙女軍団』ってチーム就任ですよ。あれですかね、今流行のノンレム睡眠つてやつですかね。あー、別に関係ないですけどね。ところで、先輩、箸……じゃないや、手が進んでませんね。あれですか、ダイエット中ですか？」

しかし本当に口の止まらない少女である。これだけ一斉射撃を受け続けていれば手を動かすタイミングも見逃してしまつどころのだ。こちらはハンバーガーしか頬んでいないのに、白椿さんに越されそつである。

「手が進んでいないんじゃなくて貴女が早すぎるだけよ。もつと奥く噛まないと消化に悪いわよ？……というか貴女、噛んでる？」
「いやですねー先輩、そんな早食い選手権に出るわけじゃないんですねから。最悪」飯の旨みが口内全体に広がる程度にはしてますよ。
あー、考えてみるとあれって微妙じやないですか？糖がデンプンに変わったんだしたつけ？逆でしたつけ。まあどちらでもいいんで

すけど、なんかそんなのをくちやくちや噛んでるって正直あまり気分が良いものじゃないですよ、いえあたし的にすけど

「気持ち分からぬでもないけれど、それを言つたら貴女が今食べてるそのジャンクフードだつて変わらないじゃない」

「これは別物でしょー。ああやつて『』飯は噛んだ方が良い』なんてことを植えつけてくれやがりましたからにこんなことを思つてしまませませんになっちゃつてるんですよあたしは。因果ですよ因果」

最後のサラダに手を付け始めながら、得意の口癖を口にする。私もちようどハンバーガーを食べ終えたが、……白椿さんのサラダを見て不覚にも釘付けになる。菜食主義ではないが、あの類のサラダセットというのはどうにも魅力がある。緑黄色野菜とはよく言つたものだ。……赤も混じつてはいるが。

「あー、なんですかその視線は。いやらしいですねー先輩。なんかいつ、王の座を虎視眈々と狙うあまり王女を快樂の底に引きずりこんで拉致監禁調教して奈落に叩き落そうとしている目ですよそれは。サラダが欲しいならそう言つてくれればいいじゃないですかー。奢りがいがあるつてもんです」

「…………私が今まで生きてきた中でぶつかりで嫌なランキング一位を『冠した表現を有り難う、白椿さん』

要領を得てているのかいないのか、良く分からない娘である。

「じゃあ強情な先輩のために一個だけ質問しますから、それに答えてくれたらサラダ奢ります。ちなみにサラダいらないから質問に答えないっていうのは却下の方向で」

「どうよりもさつきから質問攻め……に、あつていてるわけではないよね……。なんだか貴女と話していると混乱するわ」

「それは『愛嬌つて』ことで妥協してくだせえ先輩。……で、質問なんんですけど」

白椿さんは財布を持って立ち上がる。中々に中身が入ってそういう分厚さに目を囚われた、その時だった。

凝視。

視線を上げたとき、強制的に身が凍った。身動きが取れないのでない。取ってくれない視線。目と目が一本の鉄の線で繋がれたように、動かせない。

何が起きたという問いに対し、何も起きていない。
誰だという問い合わせ、白椿菊乃。

何処だという問い合わせに對して、マクドナルド。

なら 何がおかしいのかという問いに對して、全てと答えた。否、違う、違えるな。何もおかしくなんてない。ただ、見つめられていてるだけじゃないか。落ち着け、冷静になれ、ドライアイスを脳内に叩き込め。疑心暗鬼になるな。相手は誰だ、そうだ、白椿菊乃ではないか。

彼女は依然として一〇一一〇と笑みを浮かべたまま、私に問う。

「 灰田純一と、いつどこで誰と何経由でどんな状況でどういった理由でどんな感じで何で放課後話しながら帰つてたんですか？」

「……はい？」

質問が破綻している。どう答えるといつのだらうか。
破綻している。壊れている。

放課後について誰と何経由でどんな状況でどういった理由でどんな感じで何で。答えられるわけがない。元からその質問は質問としておかしい。おかしい。破綻している。

まずい。破綻した問いに対しても混乱している。ドライアイス。ドライアイスを早く頭に。冷やせ、冷やせ。今だけ耳を傾けるな。破綻する。質問が破綻する。答えが破綻する。

「…………」

急激な吐き気を催した。急いで口に手を当てて嘔吐感を抑える。待て、何故吐き気など催している。今の間にどこか破綻していた点があつたのか。冷静に考へろ。『破綻』ときに破綻されるな』。

「先輩？ 先輩！？ ど、どうしたんですか、物凄い顔が青いですよ。何かハンバーガーの中におかしなものが入つてましたか？ ちよ、何か飲み物貰つてきます！」

視界から白椿さんの姿が消える。

何故消えたのか。いや、そんなことを問うている暇など無いはずだ。

問題は、『何故私はこんな風になつてているのか』にある。それ以外に興味を持つな。彼女の質問が破綻していたことなんて眼中に置かず、私がそれについて過剰な疑問を持ったことも眼中に置かず、冷静になれ。何故、こんなことを考へている。

私の中で何かが破綻した。積み上げた積み木が誰かに蹴飛ばされたように思考が纏まらない。あと一つか二つ積み木の欠片が足りない。私はそれを必死になつて暗中模索している。暗い場所にいるわけじゃない。ただ、『ピースが多すぎてどれが本物なのかが分からぬ』。

そのうち白椿さんがオレンジジュースを持って戻ってきて、私に手渡した。私は最初それが何なのか判断に迷つたが、やつとのことでそちらに意識を向けて手にとつて飲んだ。冷たい感覚が喉を嚥下していく。

白椿さんが私の背をさすりながら心配そうな顔で覗き込んでくる。

「せ、先輩。もしかして調子が悪かつたんですか。それなら断つてくれれば良かつたのに、ああ失態ですよ失態。大丈夫ですか？」

「…………ええ、なんとか持ち直したわ。ごめんなさいね、折角誘つてもらつたのに。実は病み上がりで、昨日は完全に寝込んでたのよ。朝は熱が下がつてたから大丈夫だと思つてたんだけど、油断したわ」

「そうだつたんですか。因果ですね因果。早く帰つて薬を飲んだほうが良いです」

「そう、ね。風邪薬くらい携帯していればよかつたわ……」

薬ならここにあるぞ。

そう、聞こえたような気がした。

そして、私と白椿さんが声の方、顔を上げると、そこそこやいつはいた。

「名乗りが必要ならば名乗ろう。俺の名は黒住儀軋。^{くろすみぎせき}なあに、薬を持つてゐるといつのは嘘ではない。俺は嘘が無期懲役の次に嫌いだからな。嘘つきは泥棒になる前に殺してしまいたいくらいに嫌いだ。だが、貴様に声をかけたのは善意では無く惡意だがな」

黒い巨塔とでも言つべきだらうか。圧倒的な高さと、圧倒的な惡意を持った黒ずくめの男がそこで無表情に笑つていた。

「冗談ではなかつた。

やはり何故だか吐き気は収まらないし、風邪のせいなのか意識がふらふらとする。風邪薬を飲んで今はベッドの中であるが、これはもしかしたら昨晩よりも酷いかもしだれなかつた。

『黒住儀軋』。苗字の方はいいとして、とんでもなくネーミングセンスを疑う名前の男。とにかく服装が黒一色で統一されており、ミラーサングラスをかけて髪の毛をガチガチに固めていた。年齢は声と態度から察するに私より少し、いや大分年上なのかもしだれないが、おじさんと呼ぶにはまだ若々しい部分があつた。そして何よりも、あの身長。私も低い方ではないが、勿論男性には劣る。とは言え、あそこまで見下されるとあまり良い気分はしない。百八十五は間違いないなくあつた。

あの後、当然ではあるが黒住から薬を貰つてはいない。見ず知らずの男が渡してくる薬など誰が相手でも有り得ない。確かに見覚えのある錠剤ではあつたが、この腐りきつた世間だ。いや、そうでもなくても信用するに値するかと問われれば、一億円の契約があつても頷けなかつただろう。

何よりも彼からは、悪意を感じられた。

劣悪ではない。そういう卑劣猥劣と呼ばれるような不純の悪ではなく、純粹に悪意が満ちていた。たとえばあの場で私が薬を受け取つていたとしたら、恐らく薬を飲む私を見て、『そのまま突然化學反応が起きて死ねば良い』とか『喉に詰まらせてむせないだろうか』とか『私が薬を受け取つてすぐ捨てたりしないだろうか』のような、まるで悪意の無い純粹な悪意がそこに介在していたように思える。最悪でも、親切心なんていうのはまるで無かつた。半ば好奇心に似たようなもので動いたと表現するのが最も型にはまる。だからあの状況で、あの男はこんなことを言ったのだろう。

「どうする。俺が持っている薬は先ほども言ったが嘘偽り無く貴様の吐き氣や氣だるさに効く薬だ。だが俺は悪意で貴様にこれを薦めている。それに嘘も無い。これら全てに虚言は含まれていないが、主に悪意で出来ている。故に現在貴様には俺を信用するか否かの選択の余地があり、俺はどちらに転んでもそれは結果なのだと見過ごそう。無論、これにも嘘は無い」

相当嘘を嫌つてゐるのか、発言するたびに自分の言葉の信頼性を強調していた。

この男もやはり全く掴めない。何が目的が、あの場に居合わせたのか。

恐らくは、それこそが『悪意』。

「俺は薬剤師の免許を持っているわけでもないし、医者でもない。だが、貴様が何故そのように苦しんでいるのか、その理由は分かる。これに嘘は無い。もう一度言おう、これら全てに虚言は含まれていないが、主に悪意で出来ている。故に現在貴様には俺を信用するか否かの選択の余地があり、俺はどちらに転んでもそれは結果なのだと見過ごそう。無論、これにも嘘は無い」

恐らくあの薬は本当に効く薬だったのだろう。あれを飲めばあさまま白椿さんとその後ショッピングにでも行けたかもしれないほど、即効性も効力もあるような薬だったと思う。

だが結局、彼にとつて薬は渡ろうが渡らなかうが関係なかつた。そういうつた迷いを生むこと、相手に疑心を作ること、薬を目の前にさせて、その信憑性を底上げしていつて、私がそれを手に取らないのを知つていてやつた行為。それが彼の悪意。

無性に腹立たしかつた。

あの後、私はふらつく足を白椿さんに支えてもらつて家に帰宅し

た。時は既に昼過ぎで、一体移動にどれだけ時間を食つたか分からない。何が原因で熱が再発してしまったのかはそれこそ全くの原因不明、因果も何もあつたものではないが、恐らくは『灰田』の名だろつ。

「……だるい

熱のせいか、汗で着ていたシャツがべつたりと肌にくつついて気持ちが悪い。これでは時間帯が昼なのに加えて、恐らく寝ることなど出来ないだろう。

もう少しだけ、睡魔が襲つてくるまであの時のことを思い出していくことにした。

田の前に差し出されたカプセルを見た。

私が昨日森野医院で貰つてきた薬と外見は完全に一致する。しかし、カプセル薬なんてものは見た田どれもこれも同じだ。信用するためにには残り九十九パーセントは足りない。

「医者でもない、薬剤師でもない。……突然の親切を無下にしてしまつようで悪いんですが、拾つたものは食べない主義の人間なので、聰明な判断だ。もとより俺も貴様がこれを手に取るなんてことは毛ほども思つていない。これは単なる口実だ。……言わなくとも分

かると思うが、俺はそこの小娘に用事がある

そう言って白椿さんのほうを踏み出すような視線で見る。先ほどもそうだったが、身長が高いために軽く見下されているような気分になる。それもサングラスをかけているために効力が倍増。さながら感じの悪い兄貴といったところか。

白椿さんはそれに気圧されることもなく、いつもの調子でそれに答える。

「あたしですか？ どーでもいいんですけど、先輩が苦しんでるタイミングで話しかけてくるつてのも嫌なおじさんですね。あ、それともあれですか、『むしろ狙つた』んですか？ これはいやらしい因果ですね因果」

「なあに、突然こんな俺みたいな人間が話しかけてきても貴様らは変質者か何かと勘違いして会話が終了。俺の行動原理は悪意が主であるが、それでも自分に不利な状況に働くことなどそうはしない。それは貴様も承知だろう？」『白椿』

黒住が白椿さんの名前を呼んだ。瞬間、白椿さんの表情が歪む。私はそこに横槍ではないが、白椿さんを助けるためにも、自分が知りたいことのためにも口を挟んだ。

「貴方は、白椿さんとどういった関係で？」

すると今度はこちらにあの嫌な視線を向ける。

「どういった関係でもないし、貴様にはそもそも語る必要が……。ふむ、撤回だ。俺といつには何の因果もなかつた。つまり、知り合いでない。俺が一方的に知つていただけだ」

「……ストーカー？」

「あのような屑同然の悪意と同様に扱うな。それに、ストーカーといふのは大抵のパターンが知り合いである。小娘は俺のことを知らない。俺は小娘を知っている。この関係でストーカーという線は薄いと気付け。それに、ストーカーがこんなにのこのこと当人の前に姿を現すとでも？」

「無いわね。貴方はどちらかと言えば、ストーカーを追う側の人間に近い雰囲氣があるわ。不動、炯眼、無関心、追求、戯言、故に真理。警察と近いわね」

「ふん。それは買い被りすぎだ。それを言うならば貴様のほうがよっぽど危険な目をしている。『値踏みしている人間を値踏みする』など、正氣の沙汰ではあるまい」

「…………」

睨みつけられたら睨み返すのは正氣の沙汰だろう。それが私だ。ミラーサングラスの奥、全くこちらからは窺えない眼光が微かに光った気がした。それがこちらに向けられている間、白椿さんがため息と同時に言葉を吐く。

「それで、その擬似ストーカーさんはあたしに何のようですか？さつきも言いましたけど、先輩今熱出して苦しんでるんですよ。正直あなたに付き合つてる暇無いんですけど」

白椿さんがこの男から逃げようとしていることは声の質の問題から一目瞭然だつた。微かだが、本当に微かだが声が揺れている。何故なのかは私には分からぬが、息を荒げるのを必死になつて抑えているのを感じる。黒住はそれに当然気付いている。

黒住は彼女を凝視する。先ほど私が目を点にして白椿さんに見られた視線とは明らかに違つ、值踏みするような汚らしい目、それでいてどこか諦観していて、なのに出來損ないのアヒルの子がいつか更正するのを待ちわびてゐる親のような目。実に複雑である。

気付けばマクドナルドの店内にいる人たちには皆してこちらを遠目に見ていた。自分だけはあそこに関わってはいけないと彼らの細胞が疼いているのに、そこから目を離せない。ホラー映画が怖いのに、見ようとしてしまう人の性といったところか。しかし初めてそこで気付いたが、この視線はあまり良いものではない。奇異の物、まるで自分と違う何かを見ている彼ら。その標的となつている私は、吐き気を催すほどの嫌気にさらされた。オレンジジュースをこつそりと飲み干して、私は一息ついた。

黙殺。

「ここは一体何処だつただろうか、とそんなもの思考するまでも無い。だが、だだつ広い草原の中心にでも立たされたかのようにここは静かだつた。誰も話さない、黙殺する。

その静寂を断つたのは、勿論黒住だつた。

「つまらないな。こうして出会えたのは偶然ではあつたが、どのような人物か期待した俺が馬鹿のようだ。最悪怯えては悪いと予想してミラーサングラスまで着用したというのにこの体たらく。見るに耐えんな。そちらの病氣の娘のほうがまだ『それらしい』といつものだ」

「……っ！」

それを心外だといつよに白椿さんが黒住を睨みつけた。

「あんた、何なんですか？　ちょっと下手に出てれば調子に乗りやがつて、誰だか知らないけどあんたなんかにあたしの価値をじつのこうの言われる筋合いか無いんですけど」

「怒るな小娘。怒声は好かない。そこには不純な悪意しか含まれていなからな」

「悪意悪意うつさい。あんたに向ける悪意が善だらうが悪だらうが関係ないつすね。突然現れた何んですか？　人を中傷するだけし

て帰るつもりですか？ 最低ですね、あんた」

啖呵を切ったように白椿さんの軽い淑やかな雰囲気とは相反する言葉が次々に飛び出す。止まらない、完全に白椿さんは怒っていた。それを見て私は小さく舌打ちした。この男の意味するところの『悪意』の全貌が見えてきたからだ。

白椿さんの口はべらべらと、崩壊したダムの水が流れ出しがごとく悪口という悪口が出てくる。もはや相手の容貌など全く関係の無いところまでにおよび、それを黒住は何食わぬ顔で聞き流している。既に白椿さんには興味が失せたかとも言えるよう、彼女を視界にも納めていなかつた。

とりあえず私は彼女を止めるために会話に割つて入る。

「少し落ち着きなさい白椿さん。この男には何を言つても無駄よ。冷静になりなさい」

出来る限り冷たく言い放つ。案の定白椿さんはビクッと親に叱られた子供のような反応を見せて、しぶしぶと黒住に向けていた視線を外した。

「申し訳ない。子供をあやすスキルは残念ながら俺には備わっていないのでな」

「別に構いやしないわ。今のは貴方とは種類の違う威圧だから、やつてることとは変わらないもの」

「ふん、嫌味か。風邪で体力を失っているはずなのに大した度胸だ。どうだ、俺と共に世界に蔓延るクズどもを片つ端から豚箱に叩き込んでみないか？」

「そのためにはまず貴方を叩き込まないといけなさそうで、難易度

高すぎてやる気が出ないわ。残念だけどお断りね」

「それは実に残念だ。勿論、これに嘘は無い」

黒住はサングラスの向こうから一度だけ白椿さんを一瞥し、身を翻した。

「失礼した。この場、黒住儀軋が拝借。俺の行く先に再び縁が訪れないことをお互い祈るわ」

意識が朦朧としてきた。思い出すことを止める。

汗で濡れた額を一度拭つて、クーラーのタイマーを設定する。ピツ、という電子音が鳴り、それを合図としたように、今度は携帯のバイブレーターが音を立てた。

これを見て今田は寝てしまおうと決心して、それを開いた。送信者を見ると白椿さんだった。名前を見ただけで、あの騒がしい様子が頭に浮かぶ。

『今日はどーもありがとうございました！　また朝マック行きましょーねー。風邪は万病のおとんど、早く治してガツコで合いましょう！　では、本当にありがとうございました』

女子高生とは思えない顔文字の一つも無い文面が、どうしてか寂しく見えた。

10・鮮血色（前書き）

なんだか短くてすいません。次回頑張ります。

ああ、そういうえば、酷く滑稽で、それでいてどうしようもなく救いようの無い夢を見ていた気がする。

無意味に人を殺して、無機質に笑つて、無感情に泣いて、無為に帰す。

私はその日始めて女の子の名前を知った。その血塗れの外見とは裏腹に、とても少女らしく可愛い名前だった。女の子は自分の名前を自慢するように、その時だけは本当に楽しそうだったようだと思える。

田の前で誰か、怯えていた女の子がその子に殺されていた。顔面の肉を引きちぎられて、物凄い悲鳴が聞こえたかと思えば、その場は既に血だまりになっていた。それがどんな風になっていたのかは私にはもう表現することどころか、認識することすらままならなかつたけれど、確かに赤かつたと思う。

あの子で何人目だつたろうか。

三日ほど前からこの大量殺戮が始まつたように思える。それまでは、確かにあの子との仲が良かつた人はここにはいなかつたけれど、それでもこんな事態が起ころうほどに悪いわけじやなかつたはずだ。

彼女が狂氣と邂逅したのは、ある日の川の流れの変化に問題があつた。

その日はいつもは緩急はあるとも、洪水や干上がることなんてまずなかつた川が初めて氾濫を起こした。堤防など最初から無かつたかのように押し破り、一気に私たちの住む場所まで流れ込んできて、私たちの住処を破壊しつくしていった。その水の冷たさと言つたら形容の仕様が無いほどで、最初は皆凍える寒さに震えていたのだった。

その洪水がきっかけか、その日の夜から、いや正確には早朝にかけてに一人の女の子がおかしくなり始めたのだ。感情などまるで無

しに周りにいる子を次々と手にかける。その行動原理は呼吸と同義、行為 자체に意味など無く、それをしなければ良くないからする。

最初の被害者の末路を見たときは胃袋の中のものを全て吐いた。

一番目の被害者の末路を見たときは嘔吐を抑えるのに必死だった。

三番目の被害者の末路を見たときは頭痛とめまいを覚えた。

四番目の被害者の末路を見たときは眉をひそめて嫌だなあ、と軽い感想を漏らした。

もう次からは、「またかあ」と、自分の番がいざれ回つて来るごとにすら興味をなくし、ただ坦々と日々を過ごしていたのだった。

……そして、私の番が回ってきた。

無論言つまでも無いが、私は殺された。マニュアル通りといつたところか、人体のあらゆる部分を犯されて死んだ。そこには何のモラルもない、ただただ獵奇的な殺人。

閑話休題、彼女の殺人云々の問題など殺された私がどう解釈しようがもはやどうしようもない。問題は彼女が私の問い合わせに答えたことを提示したこと。今まで何を問うても「分からぬ」や、逆に「なんで?」といつ答えを返してきた彼女が、私の問い合わせに答えたこと。

「あなた、お名前はなんていうの?」

聞かれた彼女はすぐびる驚いた顔をして、その後笑つて言った。

「

ああ、その時私は気付いたのだ。私は今ここで、この因果の鎖に縛り付けられた状態ではこの殺戮から逃れられることは出来ないのだと。彼女がその名前を持つていてる限り、因果の鎖が解かれることも無い。半永久的な因果応報。

『彼女にその名前を持たせた彼女が殺されるのは、当然の理』だつ

た。

だから黙つて殺された。痛みに身を任して、なるがなるままの運命に命を委ねた。

最後に見たものは何だったか。

そうだ、どこからか白い手が伸びてきて、私の首を掴もうとしていた。けれども女の子は視線を向けもせずにそれを払い除けて、結局私を殺した。あれが助けの手だったのか、それともまた別な刺客だつたのかは私の知るところではない。けれども、あれがもし前者だというのならば、早く他の子たちを助け出して欲しいと思う。半ばみんな諦観していると言えども、死にたくないの気持ちは無くなつていなければずだ。

本当に下らない。地獄に下りた蜘蛛の糸を掘むかのようだが、それがなるべく強靭な糸であることを祈った。

白い腕は、その願いを受け入れない。

元より彼女のほうこそ間違いなのだ。危害を及ぼす因子があるならば、それから周りのものを遠ざけるよりも、元凶を叩いてしまつた方が良いに決まっている。ゴキブリが出たから人間が家を出るなど有り得ない話で、当然スプレーなどで殺虫するのがポピュラーであり当然のやり方であると同じことだ。

だから白い腕は『彼女一人とも』を殺そうと腕を伸ばしたのだ。結果、失敗に終わったが、これで引き下がれるならば元よりこの場

に姿を現していない、と血りを鼓舞する。

「一撃必殺のマグナムで断ち切れぬものならば、マシンガンを用意しろ。それで残り粕」と全て葬り去つてあげよう!」

その鮮血の空間に、真っ白な腕が無数に侵食し始めたのは、その日の朝のことであった。

一週間の始まりは日曜日からだが、こうして学校生活を楽しむ人間においてはやはりどうしても月曜日が週の始まりなのではないかと錯覚してしまうものだ。キリスト教の教えによれば、日曜日は神が世界を作り終えた後の休憩の時間、七日目の休みであった。その日が週の始まりというのはどういった意図があつて決まったのだろうか。

一説によれば、キリスト教のその教えは全く一週間の流れとは関係が無く、七曜と呼ばれる天体が起源らしい。守護星という惑星の流れから順序が付けられ、今に至っているといつ。

兎にも角にも、どうでもいいことに今日は登校日で普通授業であった。

無論サボリ授業が多い私立高校ではないので、土日の連休明けでもクラスメイトは揃っている。とは言え、真面目そうなイメージのありそうな都立高校ではあるが、やはり授業中に隣の友人と会話を楽しむ生徒は珍しくない。私の隣の席の女子生徒もしきりに話しかけてきたが、授業を真面目に受けている身としては言葉の返しが無い。

学校の授業風景はいたつて普遍的であり、私にとつても他の生徒にとつても何ら不都合は生じない。教師はそこそこに生徒を注意するものの、義務教育で無くなつた高校ではそこまで生徒に目をかけたりはしない。故にあのような混沌を招くのだが、それはそれで一つの味だということで私は無理矢理納得していた。

元より騒がしい雰囲気は嫌いではない。大人数でどんちゃかするのは流石に気が引けるものの、『賑やか』と『五月蠅い』では大分意味合いが違う。『静寂』と『閑散』も然り、教師が小言のようにぶつぶつと漏らす教科書の内容など聞き取れるわけも無く、生徒が真面目に授業を受けていたのならば静寂が包んでいただろう。

逆に言えば、閑散とはまさに今のような状況を言うのだとと思つ。授業が終了した教室内は部活に出た生徒とそのまま帰宅した生徒で溢れ……というのもおかしい表現ではあるが、現在教室内には私以外には誰もいなかつた。

いついかなるときでも優等生を気取つていたい私にとつて部活動に参加していないのはどこか矛盾が発生するかもしれないが、元より何か一つのことに対することはそれこそオールラウンダーの意思に反する。

そう言つたものの、オールラウンダーとは日本語訳するならば『万能人間』のことを言つ。それが果たして『何でもそつなくこなせる人間』のことを言つのか、『何でも普通以上の結果を残せる人間』のことを言つのかは私には判断がつかないが、私は前者であるうとに勤めていた。

風邪もすっかり完治した日、下校時間十分前、本来ならばもっと早くに下校しているはずだったのだが、今日は少々予定が入つていた。

白椿さんが一緒に帰ろうと誘つてきたのだった。夜遊びはするほうではないので拒否をしたいところであつたが、何度も頼み込んでくるその姿勢に三顧の礼も脱帽、私は彼女にとつてとんでもない特待生のようだつた。故に無碍に断るのもどうかと、結局その場に流された私である。

鞄に教科書類を詰め込み、陸上部である白椿さんの部活動終了の時間を待つ。既に窓の外は夕暮れ色に染まり、見ている人を憂鬱な気分にさせてくれる。これが一種の黄昏といつやつであろう。ほどよく光沢の塗られた卓上が暁光を反射させて、自分が恋愛ドラマのヒロインにでもなつたような錯覚を覚えた。

「ああそうだね、夕焼けをバックにするのはいつだつて感動のシーンだ。けれどもそれは物語の中の話であつて、そんなロマンチックな状況を作り出す人間なんて滅多にいやしない。暁光は常にラス

ト。現状を見るなり、それはあまりにまだ早いよ

そんな私をやけに透き通つた声が迎えてくれた。

どうせそんなことだらうと、私は思つていた。

夕日をバックにして現れるのは最悪白椿さんだつたはずなのに、そこ机に腰掛けっていたのは灰田純一だつた。場違いな灰色の髪の毛が夕日に照らされて、妖しい色をかもしだしていた。当然のことであるが、私は彼の姿を見て激しい嫌悪感を覚える。この出所不明の感情は難なのだろうと毎度のように思つ。吐き気などないのに、元々腐つた空気が肺に溜まつてゐるような不快感を身体の中に感じじる。

「このまま今日は会わないでおくれつもりだつたのにね。彼女を恨みたいわ」

私はため息を吐いてそつと。彼の対応はもはや怒りをぶつけてもどうしようもないのだ。

「うん？ 彼女とは誰だい？」

「後輩の子よ……つて、何であんたにそんなこと言わなきゃいけないのよ」

「や、年下に少し興味があるだけさ。気にしないで詳細を」

「意味が分からぬいわ。ほら、あんたも会つたでしょ？ 先週の金曜日、購買部の前で」

灰田がわざとじりじり顎に手を当てる。

「ああ、うん、思い出したよ。せりていつなうり放課後、僕らの後をつけていた人だろ？」

私はそれに素直に驚いた。まさか灰田が気付いていとは思わなかつた。

かつたからだ。

「知つてたなら言いなさいよ。気にはしてないけど、ストーカー紛いのことなんてされて気持ちがいいものじゃないわ」

「別に僕は気にならなかつたからね。ま、視線は良いものではなかつたけれど。……で、何だい、その子と待ち合わせでもしているのかい？」

「そうよ」

「ふうん。珍しいね、君が自分の決定されたスケジュールを変更してまで他人に付き合つなんて。いや、これは僕の持つた先入観かもしれないけれどね」

「やはり失礼ね。ま、どうでもいいけど。」

「三日足らずな後輩のために行動しているなんて信じられないけれど……なんていうのかしら、あの子はどういう風に見ても嫌な感じがないのよ。引っ張られるというかなんというか、付き合つて得があるかどうかは分からなければ、間違いなく損はしないだろうつて気になるわ。そういう損得無しにしても可愛い子だしね」

「ほう。『君が自分を蔑ろにしてまで付き合つても良い子』か。興味が出てきたよ」

「蔑ろとは何よ。まるで私があの子のために自分をダメにしてるみたいじゃない」

「決して間違ひではないだろ?」

言われて考える。

確かに自分のスケジュールを無視したことは大被害には程遠いもの、確かな被害は被つた。それで自分の人生がどうのこうの左右されるわけではないだろうが、それでも立てた計画が崩れるというのはその後のペースに関係する。その証拠として、ここで灰田純一と出会つてしまつたのだから。

肯定するのも悔しかつたので、私はため息を吐いて、言った。

「なんでもいいからわざと出で行きなさい。もうすぐ来る頃
だし、正直あの子とあんたを会わせたくないのよ」

すると灰田は不思議そうに微笑み、居座る気満々で机に腰掛けた。
灰色の髪がどこから吹いてきたのか、見知らぬ風に揺れた。

「名前だけでも教えてくれていいじゃないか。友の友は友、敵の味
方は敵さ。知つておきたい」

敵の味方は敵、全くもってその通りだ。前者はどうか知らないが。
私はそれで帰つてくれるなら、とその名前を口にした。

「白椿菊乃さん。白いに花の椿に菊、『の』は……どう説明したら
いいのかしら」

「ほ？」

瞬間、しまつた、と私は激しい後悔に駆られる。

灰田がニヤリと、本当にいやらしい笑みを浮かべたからだ。その
事象が滑稽で滑稽で仕方が無く、面白い玩具を見つけて、更にはそ
れをどう悪戯に活用してやるうかというような悪質な子供の雰囲気。
それに加えて灰田の笑みにはどこか自嘲するようなものが含まれ
ていた。いつもの身の毛がよだつような凍つた表情ではなかつた。
それを私は看過することは出来ない。今の灰田は、昨日までの灰田
とは違つ。

「……君、『黒住儀軋』という男に出会わなかつたかい？」
「…………つー？」

何故、という言葉が飲み込まれる。その様子を悟つてか、灰田は

今度こそ最悪の笑みを浮かべた。自然と奥歯に力が入り、鼓動が荒くなる。どうにも心を乱されるのを抑えられないようである。

「ホトトギス」

「…………え？」

その笑みを浮かべたまま、彼は唐突にそう切り出した。

「ホトトギスと言えば、僕は最初に日本史に登場する『織田信長』『豊臣秀吉』『徳川家康』の三人の天下人の性格を表した句を思い出すね」

その句は実際に本人が書いたわけではないが、後世の人間がその頃の人物像を表すのに、鳴かないホトトギスを彼らはどうするのかという表現を使つた句であつた。

最初から、『鳴かぬなら、殺してしまえホトトギス』、『鳴かぬなら、泣かせてみせようホトトギス』、『鳴かぬなら、鳴くまで待とうホトトギス』。現代解釈された語であるが、意味は違えない。つまり、織田は短気で荒い性格、豊臣は好奇心と行動的、徳川は忍耐強さを表しているといつ。歴史の授業をしていれば小学校の勉強にも登場する話である。

それは誰にでも分かることだが、今の白椿さんと黒住の話からどう繫がるのかが全く不可解だつた。

「しかしさらに言つならば、織田はその荒い気質で天下を作り上げ、豊臣が好奇心と行動でそれを発展させ、そしてその完成した基盤の上で徳川が待つということを覚えたとも言える。故にこれはもし順番が『徳川』『織田』『豊臣』のようになれば、イコールで繋がつていた人物像はそのまま交換されてしまうと僕は思うんだ」

一理はある。もし戦乱の時代の織田の立場に徳川が就いたのであれば、忍耐強く待つ、などという性格が形成されただろうか。

「織田の下に豊臣、そしてその豊臣の下に徳川。けどもし、この二人が同時代に異なる国を統べていた人間だとしたらどうだろうか。当然争いは起きてるだろう。すると誰が勝利を収めるのか、なんてことは誰にも分からぬ。これは仮定の話だからね」

「でしょうね。軍事力がどの程度か私には分からないし。……ただ、性格から考えるなら織田が結構優勢じゃないの？」

「聰明な見解だ。僕の話から性格をここまで引っ張ってきたね。そうだね、そう言えるかもしれないが、やはり比べることは出来ない。これは仮定の話であり、例題だからね。ただ言えるのは現代では、織田は勝ち残れない」

やけに自信めいた言い方だった。

「天下を治めるために動く人間と、天下を治めた人間と、天下が治まった後に動く人間がいる。この違いは然程無さそうではあるけれど、絶大な違いを発生させる。能動的のことと、受動的のことと、そのどちらも兼ね備えた人間。もはや比べるまでも無いだろう」「豊臣が、勝つってこと……？」

「さあ、どうだろうね。実際に戦つてみなければ分からないし、これは『比喩』だ。僕は彼らの話を聞かせたいわけじゃないのは、君だって察しているだろう。だから僕はあえて『織田は勝てない』と言つたんだ」

言葉を聞くたびに頭が混乱する。結局この男が何を言いたいのかは直接表現で言つてもらわないと絶対に理解不可能のようだった。理解できないことは放棄することとして、私は問つた。

「結局何が言いたいの？」

灰田の方を見て、彼が立っていたことに初めて気付く。

「僕は三人の天下人が戦つたらどうかと言つた。そして結果は分からぬとも言つた。状況から察することが君には出来るはずだよ、優等生君。僕は嫌な人間だから、ギャルとかが嫌いそうな遠まわしな表現しかしない。短気な女の子がいたら殴られてるかもしれないくらいにね」

「納得するわ。私が短気じゃなくて良かつたわね」

「当然君がそんな人物じやないと知つてているからこんな嫌な人間に僕はなつていいんだけどね。クイズは嫌いかい？」

私はそれに対して首を横に振つた。否定の意であるが、クイズは嫌いじゃないという肯定の意もある。

「なら良い。今会話は全て問題文だとしよう。答える指定が無い、ね」

「嫌な話ね。一足す一が問題で、イコールが無ければそれを足して二にしていいのか分からぬって感じかしら」

「そうだね。まあその場合の問題文には大抵イコールの記号はついていないと思うけど」

思い出してみればそうだったかもしれない。

彼はにつこりと、今度は優しげな微笑を返して言つ。

「違えるなよ。どの人物にどの物を位置づけするかは君の自由だ。そして結果は誰も予想できない。醜い縄張り争いの始まりだよ」

身を翻して教室のドアへと歩を進める。そして、最後に予想通り

振り返る。

暁光の世界にただ一人、灰色の髪の毛を持った男がいた。名前を灰田純一。背が高くて、言動の全てが私の感情をかき乱し、全ての言語が理解不能。綺麗な彼と汚い彼と、まるで白と黒を混ぜ合わせたような色の人物。

だが違えてはならない。たとえ定義が『白と黒の混ざった色』だとしても、だからどうしたというのだろうか。『灰色』は『灰色』でしかないということ。

「また明日、会えると良いね」

足音遠く、彼は去つて行つた。

状況は最悪を極めて極悪だった。

どうでも良い話であるが、最も悪いを超えるのが極めて悪いというのもおかしな話である。

説明をすれば、灰田純一と別れて数分もしないで白椿さんは教室に現れ、そしてそのまま一日連續のマクドナルドとしゃれ込んでいた。昨日は朝に行つたのでそれほどでもなかつたが、夜中は客も多く、窓から見える夜景は闇に光が沈んでいるようで、なんとも美麗なものである。自然のものが最も美しいと日本人は間違いなく感じているのだろうけれど、人工物も馬鹿に出来たものではないと思う。実際にクリスマスツリーなどは完璧に人工物であるが、あれも金をかければ大自然に匹敵するような感嘆を上げるだろう。勿論、それと今夜景を比べるには程度が相当低いが。

そんなものもあいまつて、更には異分子がここに存在していた。
女子高生一人に囲まれて、真っ黒な服を着た男が一人。場違いにもほどがある。

「いやなんだ、俺もこういうハーレム状態に興味が無いわけではない。無論これに嘘は無いが、主に行動は悪意で出来ている」

「結局嫌がらせなんじゃないですか」

「ふむ。言われてみればそうとも言つな」

「そうとしか言ひませんから」

黒住に白椿さんが毒づいた。ジュースをすすつて、明らかに嫌そ
うな顔をしている。最早どう考へても黒住の思惑通りとしか言えな
い状況であった。

マクドナルドに到着したはいいが、一体どういう縁あつてか、サ
ングラスと黒のニット帽を被つた、まさに昨日とほとんど変わらな

い服装の黒住儀軋と出くわした。彼は偶然立ち寄つたと言つてゐるが、彼の素性からして悪意で動いていたに違ひない。つまるところ、嫌がらせに近い。

話を聞いていてわかつたことがある。黒住は昨日、白椿さんのことを一方的に知つてゐると言つたが、それは白椿さんの両親と面識があつたらしい。さらに言うならば、驚いたことに白椿さんは現在一人暮らし状態で、両親は仕事でどこかへ行つてしまつてゐるらしい。半ばそれを追つていた黒住が、このマクドナルドで見知つた顔に声をかけてみた、という経路だつた。両親の話をされると終始表情を濁す白椿さんであつたが、恐らく家庭の事情の問題であまり深く関つて欲しくないのだろうと思つ。黒住もそれを察してか、途中からその手の話題は持ちかけていない。

時計を見た。現在時刻、七時半過ぎ。どうやら学校を出てからここに来て一時間は暇を潰したらしい。その成果は何も実つていないがたまにはこんな蛇足な時間も良いだろ。ファミリーレストランだつたら途中退場を食らつてもおかしくはないだが、マクドナルドとこゝものは店員が店内をうろつかない為にそういうことが無いらしい。学生が勉強するにもつてこいの場所だとは聞いていたが、そういうた理由からなのかもしれない。

ジャンクフード特有のなんともいえない臭いと、黒住の注文したコーヒーの香りが混ざり合つて、ここに煙草の臭さが加わつたら嘔吐感を催しかねない臭いが鼻につく。その中でも依然として二人は不毛な会話を続けていた。

「大体何を血迷つたら一日連續で、しかも二度目が夕食でマクドナルドになんか来ようと思うんですか。ていうかコーヒーしか頼んでないじゃないですか。ジャンクを食べましょうよジャンクを。ところで先輩、ジャンクつて考えてみればゴミじゃないですか。こんなに手軽で美味しいハンバーガーをジャンクと呼ぶのにはあたし少し意見の相違が発生するんですけど、どう思います?」

「……私に聞かないで。栄養的には『ヨミ』みたいなものなんだから、別に表現としては間違つてないでしょ」

ふむ、と何に納得したのか、白椿さんは視線をハンバーガーに落としてなにやら考え込む。

「しかし、米国のジャンクフードは本物の『ヨミ』りしご。いや、表現には悪意が含まれるが、日本のものよりもカロリーの度合いが桁違いいだ。そこで俺も思うのだが、パン、つまり炭水化物、肉、つまりエネルギー、レタス、つまりビタミンや纖維、量の比率に差はあるぞ、バランス的にはそこまで悪くないと思うのは俺だけか」

「そういう貴方みたいな考え方をする人がいるから、そういう構成にしてるんでしょう。実際にどうかは知らないし、とりあえず私に聞かないで」

「ふん、『ヨミ』ですら氣を使う時代か。下らないものになつたものだ」「下らないのはこの会話の方よ。白椿さんじやないけれど、貴方本当に何をしに来たの？」

「問ひに答える前に言つが、会話自体は下らなくは無い。日常の会話とはコミュニケーションを取るに置いて重要な努力だ。会話の放棄は相手にも雰囲気にも悪い。無駄なことに興味を持つことは若者に必要な事だ。『死や生』について思考するのが思春期というが、それも束の間の出来事。可能性の出来事や、当面の問題でない出来事に興味を示さないのは愚人のやることだ」

随分と真つ当なことを言つたものだから、私は思わず黒住の虚空を追う視線を追つてしまつた。白椿さんはもはや会話することに飽きたのか、食にかぶりついている。

「調子に乗るが、物事に興味を無くすということは、人間的な死に限りなく近い。人間の世界に娯楽というエンターテインメントが生

まれたのは、まさに人が生きるための糧を供給したと言つても過言ではない。俺たちは何かを蹴落としても、楽しさを覚えるための努力をしなければならない。それを忘れた人間は、そうだな、『自我が崩壊している』と言つても良いだろう。精神論ではない、単純に自分を失っているという意味合いでだ』

「自我が崩壊している、ね。まあ随分言つてくれたようで悪いけど、私もそこまで言うほど物事に無関心な人間じゃないわ。それに私は貴方が何故ここにいるのかに興味がある、優先順位の問題よ」

「ふん、俺がここにいる理由か。下らない、それこそ本当に下らない。これは偶然だ、何ら因果の無い事象だ」

「それにしてはあまりに出来すぎているような気がするけれどね……」

クラスメイトでもない人物と連日出くわすという確率は限りなく低い。それも同じ場所でだ。確率的ならばまだ同時刻であつたほうが高いが、朝と夜では大きな違いがある。やはり黒住の登場が登場だつただけに、疑心を抱かざるを得ない。

と、そこに白椿さんがジュースをする音と共に口を挟んできた。

「何ら因果の無い、ですか。それは危険ですよ、おじさん」「おじ……ふん、どうでもいい。何が危険だというのだ」

黒住の反応に満足したのか、彼女はジュースを置いて、口元を少し吊り上げた。

「因果律が適応されない物事つてのはですね、全てが『運命』なんですよ。ねえ、この言葉つて物凄い綺麗に聞こえますけど、反面かなり危ない感じがしません？ 怖いじゃないですか、今まで全く関係してこなかつた赤の他人が、ある瞬間を境に自分の人生の一つのピースになるんですよ。つまり、あたしたちとおじさんがここで二

度目の出会いを果たしたことによって、何かが起きたんですよ。それが何なのかは知りませんけど、こうしてあたしがこんな訳の分からぬ話をしている時点で、当初の目的と違つてきてるんですから

確かに、黒住が現れなければこのような会話はありえなかつたし、もつと静かに、いや騒がしく過ごせていたはずである。これはある意味黒住に向けての皮肉でもあるのだろう。

「ですけどね、あたしはこう考へているんですよ。いやホントませませんで」「めんなさい。あたしだつてこんな論理的人間になんかなりたくないなかつたんですけどね、家が家だけに、因果ですよ因果。ま、言うなれば、『おじさんと再開したことは、一度田に出来つてしまつたことが原因』なんですよ。ねえ、そうでしょう、『黒住』さん」

ぐつ、と私の喉が詰まつた。

これは、見たことがある。昨日、灰田純一について聞いていた時と同じ瞳だ。相手の首を絞めるような無言の圧殺。三人称を変えたのは、もはやその二次産物でしかない。

その瞬間、私は自分の周りが果てしなく狂つていると思った。否、気付いた。

(白椿さんも……普通じゃ、無い?)

黒住においては言うことはないし、灰田など思考することすら無駄に等しい。当の黒住は私が苦しんでいるのを横目にすら見ずに、まるで自分の周りに絶対不可侵を誇る城壁を構えている安心感を携えていいるような、それほどに無関心に白椿さんを見返した。

「それは俺の答えられる問い合わせではない。俺の発言には一切の嘘は無

く、故に悪意で出来ていい。ここにいるのは紛れも無い偶然であるが、そうだな、貴様の言つとおり、『そう定められていたと知つてから、ここにいる』という見解も決して外れではないのかもしない。これは予知ではない、どこでどう動いていようが、『結局は俺と貴様は出くわす運命』だったと、そう言いたいのだろ？』

その言葉を聞いた白椿さんは、がっくりとわざとらしく肩を落としてため息を吐ぐ。瞬間、私の片の荷もどさつ、と首を立てて落ちたように思える。

「やっぱ嫌がらせなんぢゃないですか。……仕方ないですね、もう起こつてしまつたことはもはや水に流せないので、今日の夕食代金全部おじさんの奢りで許しますよ。因果ですよ因果」

「なら少しは自重しろ。一体いくつ田だ、そのハンバーガー」

「まだ序の口ですよ。あと十個は胃袋に入れて帰ります。や、無理だと思いますけどね、流石に」

そう言つと、完全に食べきつたトレイを戻して再びカウンターへと歩いていった。

そのタイミングを見計らつたよひ、黒住が机に開いたスペースに肘を置いて、こちらを向いた。

「白椿菊乃とはどういった状況で出会つた。彼女の言葉を引用するつもりは無いが、彼女と縁を持つということはかなりの異端だ。無論これに嘘は無いが、主に悪意で出来てているがな」

「彼女とはたまたま学校の購買部で出くわして、財布を忘れて右往左往していたところを奢つてあげたのよ。その恩かどうか知らないけど、なんだか気に入られたみたい」

「どうやらそのようだな。私も白椿の家とは長い付き合いがあるが、彼女の家はまさに天涯孤独と言えるような仕事をしているために

友人というのはただの一人たりとも見たことが無かつたものでな

「……一人も？」

私はその誇大とも言えるような表現に首をかしげた。

「ただの一人もだ。彼女の両親は常に夫婦で動いていた。故に他のパートナーなど逆に邪魔だったのかもしれないがな」

「そ、そんなことつてあるの？ 小さい頃に学校とかで知り合った人とかは……」

「白椿菊乃を見れば一目瞭然だろう。たった一人、偶然購買部で出会つた人間にこれだけ依存している。彼女の中には『もしかしたら』という気持ちが少なくとも存在している」

「で、でも待つて。こうして学校に通つていたら、嫌でも他人と関りを持つようになるでしょう？ そんなことは不可能じゃない？」

「何、友人の一人もいないで学校生活を過ごす人間もいないわけではないだろうが、彼女の場合は、そうだな、家庭の事情に絡む」

「両親が原因なのね。一体何の仕事をしているの？」

その問いに黒住は言いよどむわけでもなく口を開ざす。それ以上はプライバシーに関するからだろうか、雰囲気から答えてくれる気は無いと私は悟つた。

黒住の言うことに嘘は無い。これは彼の信条云々関係が無くそう思う。あれだけ気さくな彼女が友人の一人もいないというのは常識的に考えづらいものがある。購買部のおばさんとは気軽に話していたようだが、あれは彼女の性格の現れであり、決して意思疎通しているわけではないのだろう。表だけの係わり合いといつものだ。

そんな彼女が、友人を作ることをどうしてか許されていない彼女が、私の家に来て、それで一緒に食事を取らないかと誘つた。一体そこにどんな想いがあつたのかは分からぬが、恐ろしいほどの勇気と罪悪感があつたように思える。簡単に言えば、一体どの様な規

制があるのかは察せ無いが親の意志に反した事になるのだ。それも、十五年も守ってきたものを。

その対象となつた私はどういつ風にして彼女と接することが最善なのだろうか。彼女の家のことを考えてあえて突き放すのも手ではないが、それではあまりに不憫に思える。だからといってこのまま付き合うというのは危険な気がした。黒住の語らない彼女の両親の職業が気になつて仕方が無い。

「俺は刑事をしている」

黒住が唐突に口を開いた。私は思考を一旦中断して、彼のほうを見据える。未だ半分は残つているだらつ「コーヒーを啜つていた。

「言つまでも無いと思うが、公務員ではない。完全に私企業のほうだ。いわゆる『なんでも屋』、『自由業』、『便利屋』といったところか。まあそうは言つても一般人から金を貰つて依頼を受けるわけではない。『自分が職を選択して、それになりきる』だけの話だ」「それは一見して普通のように思えたが、黒住の指すところは違つ。彼は、オールラウンダーなのだろう。

「しかし俺は生まれてこの方、刑事以外をしたことがない。それは何故か、分かるか?」

ゆつくりと思考を巡らす。そして出た答えは単純なものだった。

「ずっと、追い続けている人間がいる……」

それに満足げに黒住は頷く。コトン、とコーヒーのカップが机に置かれる音が響く。まだ、白椿さんは戻つてこない。

「頭の良い人間は理解が早くて助かる。とは言え俺はある人物を追おうと決めてこの方、たつたの一度たりともその人物に触れたことすらまだ無い。それともう一つ、俺が何故『刑事』などという職を名乗っているか、分かるか？」

彼の言わんとすることは理解できる。ただ人を追うだけなのであれば、それに順応する職を探す必要など無い。刑事の証明書があるわけでもないのだから、他人に名乗るときにその肩書きは必要ない。そうだ、つまり、彼の職業には職業としての意味がある。

酷く面白い結論だつた。思わず頬がゆっくりと笑みの形を作つているのが自分でも分かる。

「貴方は、正義を振りかざす悪意なのね」

私の不可解な笑みに釣られてか、彼もサングラスに良く似合う微笑を返した。

「悪意とは常に自分以外の気に食わない人間に向かつて向けられるものだ。そこには同族意識は発生しない。故に、『悪意とは悪意に向けられるもの』であるパターンが多い。つまり、俺が追つている人間がどのような人物なのか」

「そう、まるで貴方みたいな人間ということね」

間髪いれずにそう言つ。が、それが的を射てなかつたのか、黒住は酷く不快そうな顔をして首を横に振る。

「ふん、それは言い過ぎだ。奴らは俺とはまるで違つ、両極端といつても過言ではない。それ故に似ている、という理論は全く通用しない。言つなれば、ホトトギスの句、織田と徳川の内容の差くらいい

に差異がある」

「…………え」

凍りついた。完全に、比喩ではなくて凍りついた。

何故この男が、灰田純一と同じ内容を喋った？

有名な言葉ではあるけれど、何度も登場する表現ではない。私はわなわなと口元を震わせて、必死の形相で黒住を睨む。体内で震える空気を抑え付けてゆっくりと息を吐いた。

そして問う。

「貴方がどちらかは知らない。けれど、聞いておきたい。

豊臣秀吉に当てはまる人物の目論見が、貴方にはあるのよね？」

まさかという思いが募る。それはどんどんと体積を増していつて、次第に体中に蔓延る。重い、実に重い。
だつて……。

「当然だろう。三人の天下人は、三人いなければ三人ではないのだから」「から」

当然だ。三人の天下人を使うならば、三人いなければならないのだから。ピースが、かちつとはまつた音がした。黒住は織田か徳川のどちらかで、黒住の追う人物が黒住でないほう、そして、豊臣は。

「お待たせしましたー。あれ、どうしたんですか先輩、顔が青いですよ？ もしかしてまだ風邪が治りきって無かつたんですか！？」

「だ、大丈夫よ。「一ヒーの香りが嫌いなだけ」

「ほう、それは初耳だ。ならば俺はそろそろ仕事に戻るとしよう。長居したな」

黒住が逃げる。追わなければならぬのに、身体が全く動かすこと

を聞かない。いや、正確には脳かもしない。追おつとすり思つて

いない。

「彼女とせいい仲良くしてやれ。俺の仕事が元遂されれば、それ

で様々なことに片がつく」

「おじさん、あんた、先輩と何話してたんですか」

白椿さんが憤怒しているように黒住の黒服を掴んだ。

「俺の仕事を語つてやつただけだ」

「なりどりしてあたしの名前が出てくるんですか。関係ないでしょ

う？」

「それは、本気で言つているのか？」

「……っ！？」

飛び跳ねるようにして黒住から離れる。掴まれた部分を黒住は整えて、私を一瞥、特に何も伝える気も無いらしく、そのまま身を翻していった。

「先輩、あたしたちも帰りましょ。雰囲気を害しました」

「ついてに気分も害したみたいね。まあいいわ、追加注文したものはどうするの？」

「持ち帰つて夜食にでも」

「太るわよ？」

「因果ですね」

その抑揚の無い声が、酷く孤独に感じた。

一つ足音が増えて、一つ消える。

耳を澄ませば数多に聞こえてくる足音を、そのようにロマンチックに聞くことは不可能である。都会の夜は深い。吸い込まれるような大自然の深さとは違う、飲み込まれるような深さ、それが都会の夜の風景だ。煌びやかな装飾が絶えず闇を照らし、人の賑わう声が静寂を決定的に妨げる。私はそんな空気が嫌いではない。大勢の中にはいる、自分が孤独を感じないからだ。逆に大人数いるからこそ孤独を感じる人間もいるだろうが、私にとっては『大勢という孤独の中にはいる』からこそ、孤独を感じないのだ。

しかしそんな中、ただ一人だけ孤立した人間がいた。

先ほどからいつもの元気はどこへ行つたのか、仏頂面で私の隣を歩く白椿さん。その表情は無に近い。

先ほど黒住に聞いた話を思い出す。

白椿さんの家庭事情、友人を作れない状況と、そうなった原因である両親の仕事。まだ見えていない部分が多いが、やはり彼女も普通の人間でないことは確かなようだつた。しかし、そこまで白椿さんの事情を把握している黒住のことを、白椿さんが知らないのはどうにも腑に落ちない。親だけの付き合いということで納得はしているが、黒住はその娘、彼女を確實に見たことがあるはずである。それが遙か昔の出来事であつて、白椿さんが忘れているというのならばそれもありなのだろうが、それならば逆もまた然り、黒住が成長した彼女を覚えているというのもおかしな話である。

横を歩く彼女を盗み見る。高校生で順当な顔立ち、薄く化粧もつてあり、髪の毛は後ろにひとつに纏められている。傍から見ればどこにでもいそうな少女だ。そんな少女がこれだけの事情を抱え込んでいることに、私はどうしてか……。

ドンッ。

誰かと私の肩がぶつかった。そのまま無視して歩こうとしたが、後ろから肩を掴まる。

「おいおいネーチャン、人にぶつかっておいて謝りもしないで行くのは礼儀がなってねえんじゃねえのか？」

どこにでもいそうな不良がガンをつけてきた。うざつたらしいと思いつつも、肩を掴む力が予想以上なことに動けなくなり、私はやむをえなく頭を下げる。

「すいません」

「ああ？ すいませんじゃねえだろ？ が、どうしてくれんだよ、今まで服の紐が解れちまつたじゃねえか？」

見てみると、確かにぶつかった部分が解っていた。嫌な造りをしている洋服であるとは思つが、恐らく自分で千切つたのだろう。乱雑にされた形跡が見るに耐えないほどはつきりと分かる。見れば、白椿さんが虚構を射殺すような視線でこちらを見ていた。

「おにーさん、どうでもいいんですけど、今あたし機嫌が超悪いんですよ。あたしの先輩にこれ以上迷惑かけたら、ただで済ませんよ。つーかそれ自分で千切つたんでしょう？ 誰が見ても一目瞭然じゃないですか。それに、謝る謝らないって問題だつたら、おにーさんのほうこそ謝つてくださいよ。あんたみたいなクソ汚らしい存在が触れて良い人じゃないんですよ、先輩は」

本気で腹が立っているようだ。声に怒声がたまに混じっている。不良が私の肩を離して白椿さんに掴みかかる。

「テメー舐めてんのか？ ガキがでしゃばつてんじゃねえよ」

「ガキはどっちですか。ああもつ、予定がぐちやぐちや。どうしてくれんですか、あたしが先輩に嫌われたら、ねえ、本当にどうしてくれるんですか？ 今すぐ消えてくれればあたしもゲージ八десятくらいで済むんですよ。でも、ホント、マジこれ以上邪魔するつてのなら、怒るじや済ませませんよ？ こんな因果クソ食らえだよったく」

「わけわからねえこと言つてんじゃ」

「消えろうつづてんのが聞こえねえのかよ。殺すぞ？」

.....。

思わず唾を飲み込んだ。それは私でもあり、不良でもあった。これは一般人が出して良い、違う、出せて良い殺氣じゃない。視線を定められない、心臓が掴み取られたかのように自分の内部だけが停止している錯覚。それを間近で受けている不良の心情は未知。この殺氣はもう、形容するならば……。

「 嘘

思い当たった。これを出せる人間が、他にいることを。

「う、ぐ、くつそ、気をつけろよ、つたぐ……」

最後の抵抗か、白椿さんをアスファルトの上に投げつけて不良は走り去つて行つた。白椿さんは何事も無かつたかのように立ち上がり、服を整える。

私は感じた感情を全て喉の奥に押し込んで白椿さんに近寄つて言った。

「大丈夫？」

「先輩、あの不良を見ててください」

「……え？」

言われて私は去つて行つた不良のほうを見た。本気で恐ろしかつたのか、人ごみを搔き分けながら奥に進んでいる。光景は酷く愉快なものだつたが、私はそれを見て恐ろしいと思つた。

何故なら、白椿さんがそこをただ一点、殺す視線で見つめていたからだ。

「さつきマクドナルドで因果が対応しない事象は全て運命だつて言つたじゃないですかあたし。でもですね、因果の一一番最初、ある出来事の全ての根源は運命にあるんですよ。運命の前には何も無い。残念です、非常に残念ですけど、世界つてのは随分と不条理に出来てるんですよ先輩。それも、あしたたちが思つてはいるよりも大分酷く歪んでるんです。昨日まで元気だった人が、突然病魔に倒れる。ただ遊んでいただけなのに、死人が出た。そんな軽いもんじゃ済まされない、『因果』つていうのが存在するんです。だから私は運命を好かない。

だつてそうでしょう？　　あの不良が死んだのは、あたしに会つてしまつたからなんですよ

「貴女、何を言つて……」

その瞬間、物凄い音がその方向からして、私は思わず耳を塞いだ。不思議なことに、視線だけは瞬きすらなくそちらを向いていた。車のクラクションが塞いだ耳の向こうから聞こえてくる。人のざわめきが増す。周りの人間の顔が一斉に、奇妙なくらいにそちらに向かれる。一瞬にして変貌した都会の夜。変わらないのは不気味に町を照らす蛍光灯と、『団体』といつ名の孤独に包含された人々』。間違いない、そこに異分子を含ませたから、その団体が崩壊したのだ。

悲鳴を上げる人、救急車と叫ぶ人、呆然とそれを眺める人、傍観に徹してまるで興味すら湧いていない人、そして当事者。

「出会いっていう因果は最悪です。恋人とかが言うでしょう？『どうして私たちは出会いてしまったんだろう』って。因果なんですよ、払いようの無い。『運命』っていう最悪にして最強の鎖に縛られた因果なんですよ。出会いがそれの中でも最も強固で、黒い。だから私は友達を作らなかつた。必要ななかつたんじゃないし、必要であれば作れたんですよ。先輩があのおじさんから何を聞いたのかは知らない。けど、あたしはそういう状況に不満なんてものは何一つ無いんです」

出会いは人を強くするという。

それは何故か考えたことがあるだろうか。

出会いとは最悪であり、最悪の状況こそが人を強くするからである。

人が強くなる瞬間というのは、固執して涙を、悲しみの涙を流す瞬間に限られる。人の死、人生の挫折、別れ、悟り、そして出会い。人と関るということは、最悪を招くことに他ならない。それが良しであれ悪しであれ、それが因果なのだからどうしようもない出来事である。

ならば彼女はどうなのだろうか。人と関らないで生きる人間はどうなのだろうか。

彼女は孤独である。砂場に突き刺さった一本の木の枝である。誰かがそこを通れば触れなくても壊れてしまうほどに土台が緩く、幼い子供ですら何の努力もせずに折れる芯。

断ち切られた因果を繋ぎ合わせるのは不可能に近い。差し伸べられない手を掴むことは出来ないけれど。

「あ、でも先輩は別ですよ。先輩との出会いはもうあたしたち
やあ一兆円出されても後一億年働いてから来いや！ とか言えるほ
ど貴重で、大切ですから。心配しないでください」

そう一囁きと笑つて言ひ白椿さんの言葉は、今のざわめきの中では酷く場違いに思えた。

と、白椿さんが私の手を取つた。

「帰りましょ先輩。明日も学校ですし、風邪は治つた直後が一番
危ないらしいですからね」

繫がれた手が因果の鎖だといつのならば、彼女は私に何を求めて
いるのだろうか。孤独が嫌いじゃない少女に、孤独は良くないもの
だということを言つことなど無意味にもほどがある。それに私には
ある確信めいたことがある。それは、彼女が恐いくらいのままではこ
れからも誰ともかかわりを持つことはないだろうと。

時々私は部屋に天窓がついていたらどうだったのだろうかと思うことがある。こゝしてベッドに横たわって、ふと天井を見上げれば夜空が見渡せるというのは凄いロマンチックなことだ。都会では星は見えないとは思うが、永久に広がる暗闇を眺めているといつのも趣がある。

宇宙理論というものがどのようなもののかは知らないが、宇宙とは限りないものだという。それが果たして数値で表せない故なのか、それとも理論的に限界が来ないことが判明しているのかの判断は私にはつかない。地球を一周できるように、もしかしたら宇宙もそういう構造でぐるりと回つてこれるのかもしない。

と、このような不確定要素をぐだぐだと考えていたつて結論は出るはずがないのだが、今の私は少し現実逃避をしたい気分に陥つていた。

目の前で人が死んだ。

それ自体に何か感情を揺さぶられたわけではない。淡白とかそういう以前に、赤の他人が死んだところで同情するような精神を持ち合わせていないだけの話である。問題は、白椿さんについた。

『不良が死んだのは、あたしに出来つてしまつたから』

正直わけが分からなかつた。あの予言めいた言葉はどこから出たのか、そしてその通りになつてしまつた現実。これが困惑せずに何をしろというのだろう。一本一本は太くて頑丈なのに、まるでゲームのコントローラーの紐が絡まつてしまつたように嫌らしい複雑難解な思考の乱れが脳内を埋め尽くしていた。

結局その後は終始不気味なほどに笑顔を絶やさなかつた白椿さんと帰宅し、自室に籠もつてゐる。母親が干したばかりであろう太陽

の臭いがする。下の階からは両親が話す声が聞こえる。おかげでただいまを言ひ仲。それはいくら親不孝な子供でも知っていることだ。

しかし白椿さんはどうであろうか。

彼女が拒絶しているのは、『他人』ではなく『他者』。両親が原因であんなことになつてしまつてているのならば、勝手なことでありながらあまり睦まじい仲とは想像しがたい。本当の意味で、彼女は孤独かもしかれなかつた。

『出会いは最悪の因果』

彼女はそう言つた。だから自分はその状況に不満など無いのだと。ならば、その鉄のキープアウトのテープをいとも簡単に潜つてしまつた私は、彼女に何を求められているというのか。

「……面倒くさい」

枕に顔を押し付けた。途中で息が出来なくなつて、顔を上げた。視線の先には滅多に使わないテレビがあつた。テレビはリビングに一台あれば十分じゃないかと思う派閑の人間で、正直ここに設置してからこの方、スイッチを入れた回数は両手の指で数えられるほどしかない。十四インチほどしかない小さなテレビは、何故か清掃が行き届いている。恐らくたまに母親が掃除をしてくれるからだろう。銀色の型に、埃一つ被つていないことに今更気付いて驚いた。

私はおもむろにテレビのスイッチを机の上から取つた。そして、グーンとブラウン管に電力が通る音がし、映像が出てくる。十一チャンネル、バラエティ番組がやつていた。そこでは見たこともない芸人が芸を疲労して、いるのかもわからない観客からの笑い声が飛んでいた。

そこで私は黒住の言葉を思い出した。

『人間の世界に娯楽というエンター・テインメントが生まれたのは、まさに人が生きるための糧を供給したと言つても過言ではない』

それに間違いは無いと思うのだが、私はこういう番組を見ていても面白いと感じれないことが多い。昔はお笑いブームというものに乗っていた時期もあつたが、いつの日からか、そういうた娯楽に興味がなくなつてしまつたのは事実であった。そういう意味合いで見れば、私は黒住から見て『崩壊した人間』なのだろう。認めれない事実であるが、認めるしかない事実だ。

チャンネルを変える。娯楽が好きではないからと言つて、別段ニュースなどの堅物が好みのわけでもない。ＮＨＫをつけて、ニュースアナウンサーがちょうど記事を読んでいるところに出くわした。

「今日未明、東京都内××区で連続殺人事件がありました。犯人は某所周辺の家宅に侵入し一家を殺害、その後その家宅の周辺住民までもを巻き込んだ、かなり獵奇的殺人だと思われます。周辺住民には避難勧告が出ており、恐怖に怯える夜を近くの小学校の体育館で過ごしています。警察は厳重警戒態勢を取つており、××区はゴーストタウンのような状況に……」

カメラで取られているのか、警官が三人一組辺りでその区をうろついている映像が流れていた。ニュースキャスターの比喩は的を射ting、本当にゴーストタウンのような不気味な静けさがそこを包んでいるように思える。人がいるというのに、この虚無感は些か異常過ぎる。住人がいなくなるだけで、家というものはこれまでに空虚なものになるのかと私は目を見張った。

××区はここからそう近くは無いが、連続殺人犯ならばその行動範囲を増すということは容易に想定できる事態だ。私は自分がこんなところで暢氣のんきにテレビなんて見ていて良いのか心配に目を細めた。

下には親がいる。それを失つたことを考えれば、これは区内だけではなく、東京都全域に避難勧告を出すべきだ。

そう、思え。

「…………」

私の心情はそれとは裏腹に、酷く冷めたもので、映像に流れてくる『ポートタウン』とは私の心の中ではないだろうかと思ってしまうくらいだった。死に対して恐怖が無いわけではないが、危険に直面しているわけではない現状に対しては人間はあまりに鈍感と思えるほどに興味を示さないものだ。いや、それは私の樂觀かもしない。實際、子を大切にする親がこういった事件を頭から野放しにするわけがない。それは当の子供にとつては過保護とも言える行動ではあるが、それが通常の人間の行動原理であることに間違いは無いはずである。

ならば、私が今こんなにも冷めているのは何故だろ？と自分で自分に問いを投げかける。会話の無いキャッチボールはボールを投げた側が鬱になるほど無意味であるが、受け取る側も同様ならば均衡は取れる。

最近の自分はこういったことも踏まえて大分淡白で無機質になってしまったと思う。というのは、風邪がほとんど完治しているにも関わらず食欲は依然として出なかつた。これはほとんど夕食に限つたことでもあつたが、それ以前に『食べる』といつことが面倒くさく感じてしまつてゐる節がある。

中学生などが良く疑問に思う『どうして数学は勉強する必要があるのだろう？』。高校生にもなれば、むしろ現代文のほうが将来に役に立たないことを知るとは思うが、そういう結論の見えてゐる事に対して、自分がそれに不満があるから疑問を持つ、というパターンが少なからず存在する。つまりは私もそういう状況で、『食べなければ死んでしまう人間の構造に疑問を持った』とでも言つべきな

のだろうか、そういうた複雑な事情では無いにしろ、これは自分で過度のダイエットでもしようと思わなければ出来ないほどの食欲不振だった。

意図的ではないが、あまり思わないことであった。
ニュースが次のものに移る。特集でも組んでいるのかと思って期待していたが、それは裏切られたようだった。

「連續殺人事件、ね」

口に出してみたが、やはり実感は湧かない。こういうのは実際に身近な人間が被害に合わなければ危機に気付かないところが性質が悪い。私はスイッチを押して、テレビを消した。

『^け殺すぞ?』

静寂が訪れた瞬間、酷く重い声が頭の中で再生される。私の先ほどの感情など比べるものおこがましいほど冷たい脅し。

あの白椿菊乃は、一体誰だったのだろうか。あれこそまさに殺人者のような、それも刑事物に登場するような殺人者じゃなく、もつと狂氣の世界とファンタジーに溢れたような世界に登場する人のものさしで計れない存在だった。それで人が一人死んだのだというのだから、あながち馬鹿に出来たものではない。

テレビの画像を思い出した。ゴーストタウン、人が蔓延る無の空間。それは何故そのような感想を私にもたらしたのだろうか。

答えは簡単だった。

その街はとても孤独だった。温かな団欒も街角の会話も消え去り、その街にとつての仲間はどこにもいなかつた。警察が包囲し、外部者を許さず、それでいてその中にそれを許しても必要だと思わない感情がある。そこは、とても静かだった。

そこに似合う人間がいたとしてら、私の記憶の中には一人しかな

い。

同属。類は友を呼ぶ。あの街には彼女が、彼女にはあの街が、互に許容できる。

ああそうだ、あそこで殺人を犯したとしたら、私には彼女以外有り得ないと思つ。

と、その瞬間猛烈な吐き気が私を襲つた。

「う、おえ……」

突如やつてきた胃袋の反感に抑えるタイミングすら逃れられず、私はゴミ箱に向かつて勢いよく吐ししゃ物をぶちまけた。

(私は今、何を考えた?)

口の中に広がる不快な酸っぱさ。意図と反して出る涙。荒がる息。その全てを殺したくなるくらいに自分の愚考に吐き気を催した。氾濫した川のように襲い来る吐き気をかみ殺し、拳が砕けん勢いで壁を殴つた。骨に衝撃が響き、肩まで痛みが走つた。今だけ、その痛みが心地の良いものに思え、次の瞬間にはその程度で自分を許そうとしていることに再び怒りを覚えた。

「う……あ。ふざけないでよ、何が、何が優等生よ……」

灰田の天才が何なのかという問い合わせに對して、私が口にした答え。辞書にあるような模範解答。それが私のやり方であり、絶対に崩れない『持論』であつた。

「その私が、何も、何もしてない白椿さんを『殺人者』ですって?」

おかしくなるのも大概にしないわよ私……

可能性としては最も確率の低い答えだ。事件が起きた後日、一日の初めに出会った人間を『お前が犯人だ』と眞面目な顔して言つているのと何も変わらない。馬鹿らしさを超えて愚かだ。

「おかしい、おかしい。『んなの、私じゃない。何を考えてるの…

…』

ゴミ箱の中を見る。そこには吐いたものなど何も無く、自分がその気でいただけなことに気がつく。それを見た直後、やりようのない腹立たしさが起こってゴミ箱を思わず横に殴り飛ばした。捨てられたゴミが床にぶちまけられる。

その中の一つ、紙くずがころころと床を転がっていく。音も立てず、その紙くずが拾われた。

「ああ、始まってしまったよ。最悪といづれの変化が、形を持つて、姿を持つて現れてしまった。分かっているだろう、君も。『自分がおかしいと気付いたその事こそがおかしい』ことがあるということが

「なつ…………」

男は音も無く私のテリトリーに足を踏み入れた。背後には扉があつた。まるで、そこに彼が誘うような形で。顔を上げられない。無駄に長い髪の毛だけが視界にかかる。

「そりいえば君の名前を聞いていなかつたね。僕の名前は灰田純一、灰色の世界の住民さ。それで、君の名前を聞かせてくれないか？」

言葉は暴力だった。意識を直接殴られ、一瞬にして昏倒する。

そういうことが、そういうことだったのか。

灰田純一はおかしい。とてもおかしい。

それは彼が、他でもない『存在の暴力』^{セルフディストラクション}だったからだ。『自己の崩壊』^{ラクショーン}とは、自分で自分自身を破壊するとは限らない。彼は着実に、

本当に効率的に自己を壊していくた。それをまるで灰田が灰田自信を傷つけるごとく、私を壊していった。

私が彼を嫌悪していたのは、自己防衛だったのだろう。彼に関してはいけない。他でもない、自分自身が殺されてしまうから。だから私は言つてやつた。

「……不法侵入者に、教える名前なんて……無い、わよ……」

わけもわからないまま、私は身体を床に倒した。もはや立ち上がる力も、瞼を開く力も残っていない。不思議とそれに疑問は無かつた。腑に落ちないだけで、それはそれで良いんじゃないかと思った。

「僕に答えるか否かは君の自由だ。けど、君は君の名前を決して忘れてはいけないよ。その名前は君以外には誰にも相応しくない名前であつて、まさに君自身を象徴出来る最後の砦なのだから。全てを奪われても、絶対に名前だけは守り通すんだ。それが、君が救われる、君たちが救われるただ一つの方法」

彼の名前は灰田純一といった。それは彼以外には有り得ないし、彼以外認めるわけにはいかない。

「最後に、眠つてしまつ前に問おう。

君にとつて、優等生とは何だい？」

その声に答えられるわけも無く、私の意識は闇の奥へと落ちていった。

15・セルフ・ディストラクション

そこには、一度洪水で滅びかけた村があつた。日本の縄文時代を思わせるような小さな小さな集落ではあるが、村人の数もそこそこ、それでいてとても近所付き合いの良い集落だつた。そこには数々の個性を持つた村人がいて、各人それぞれ皆に尊敬されていた。

ある人物は剣の達人であつたり、ある人物は大食人であつたり、ある人物は手先の器用さが群を抜いていたり、ある人物は良くなき泣き良くなき笑うことで有名だつたり、ある人物は研究に没頭している人間だつたりする。

だがその村に大量殺人鬼が生まれた。ある意味で言えば、それも村人の個性の一つであるのだが、洪水のタイミングを狙つてその本性を露にしたのだ。村人は恐れ慄き、逃げ惑う暇も無く一人目が殺され、絶望に村全体が打ちひしがれていた。仲の良い村人たちは、その一人もでも失つただけで全てを失つた感情に叩きのめされていたのだ。

日を追うごとに次々と殺されていく仲間を目の前にして、彼らは何も出来なかつた。村で一番強いと呼ばれた兵^{ひょう}さえも呆氣なく殺人鬼に破壊され、見るにも無残な姿で帰還した。誰かが殺されるたびに殺人鬼の笑い声が空を舞つた。村たちは耳を塞いでその声から、現実から逃げた。けれども、不思議なことにその場所からは誰も逃げなかつた。

村には当然村長がいた。聰明な人間で、村を統括するにはもつてこいの人材だつた。頭脳明晰で村一番の学者であつたし、剣の腕もなかなかに立つた。だから、村長はその殺人鬼に対抗しようと立ち上がつたのだ。

村人は全員揃つてそれに反対した。彼らはこの力ある指導者を失いたくなかったのだ。ある女はありつたけのご馳走を用意して村長を止めようとした。しかしそれに村長は首を振つて食事を払い除け

た。ある女は理論的に出された結果から勝てないことを悟らせようと語った。だが村長は耳を傾けなかつた。頑固一徹とも言えるその態度に次第に村人たちは魅せられていき、ついには誰も止めるものはいなくなつた。

村人に理解を得た村長は、村一番の鍛冶屋が打つた剣を手にとつて殺人鬼と対峙した。

「何故あなたは人をこんなにも殺したのか」

誰かがそう問うたのを村長は聞いていた。その人間の変わりだとでも言うように、澄んだ声でそれを殺人鬼に問う。

殺人鬼は笑つて答えた。

「どうしてか私は人を殺さなきやいけないの」

村長は顔をしかめる。

「人を殺すには相応の理由があるはずだ。何にかに恨みがあつたのか。それともそうしなければならない理由があつたのか」

「人を殺すことに理由なんていらない。そうなつた過程に動機があつたにしても、殺すという行為 자체に意味合いなんて全く無いの」

「ならば、その動機は何だ」

「そうしなければならなかつたから」

そこで初めて村長は殺人鬼が嘘や妄言を吐いているわけではないと知つた。これは紛れも無い本音であつて、真実であるのだと悟る。驚いたのはそれだけではない。殺人鬼は、なんと女の子の風貌をしていた。珍しいことではないし、それがそうであるという確信も村長にはあつたが、目の当たりにすると彼女の美しさには目を引かれた。血みどろの服と髪が一層妖艶さを増しているようにさえ思え

る。

その後ろに、白い手が蠢いていた。

村長は思わず目を疑つた。殺人鬼が生まれたことさえ衝撃的だといつのに、村の中にはこんなものまで紛れ込んでいたのかと、自分たちの守りの薄さを呪つた。白い手は一本や一本では済まされない。地面から、空から、わけのわからないとこ様々から出てきている。それは様子を窺うように伸びたり縮んだりして、女の子が一瞬の隙を見せるとすぐさま襲い掛かっている。

村長が今までそれに気付かなかつたのは、女の子がまるで空気を搔き分けるようにいつも簡単にそれを払い除けているからだ。

「その手は何だ。そんなものは今までなかつたはずだぞ。これもお前が出したのか」

「違う。これは私たちを殺そうとする悪魔の手だよ。ただ、この中で私が一番怖いから、早く殺そうとしているだけ。でも安心して、私が死ななければあなたが殺されることも無い」

「私たちを殺す者だと？　どうしてその手は私たちを殺そうとしているのだ」

「……それは、私たちが死ぬべき存在だから。どうせもうすぐ黒い手も現れる。そうなつたらもう誰にも殺戮は止められない」

「黒い、手……？」

「そう。白い手よりかは猶奇じやないけど、あつちは賢い手。きっと私はかりじやなくて、あなたたちも殺してしまう手。でも大丈夫、私が、手なんかに殺される前に　殺してあげるから」

村長は息を呑んだ。剣を咄嗟に構えて、彼女の攻撃に備える。冷や汗が一滴首筋を伝うのが分かつた。しかし、完全に気圧された村長に拭うほどの余裕は無かつた。

剣の形状は『イメージ』として西洋剣が正しい。一般的にブロードソードと称された代物だ。故に村長のもう片方の手にはバッククラ

「つまり小型の盾が装備されている。それを見て、殺人鬼は酷く落胆した。

バックラーを装備した騎士を相手に一対一で戦うことは相応の技術が必要になる。それは、小型の盾を盾、つまり防御として使うのではなく、相手の剣術を弾き飛ばすために主に利用されるために、映画のような激しい戦闘が予想されるからだ。しかし、村長の構えはどうだ。剣を無様に前に突き出し、盾を自分を守るためにしか使用しようとしていない。恐らくはどこかで仕入れた知識でしかないのだろう。それでも『腕が立つ』と呼ばれていたのは、比較する対象がいなかつたからに違いない。

こんなものでは、『見えざる手』からも『白い手』からも村を守るどころか、自分の身すら守ることができないだろう。ならばいつのこと、死ぬ前に殺してあげればいいと、殺人鬼はそう考えていた。

「つおおおおおお！」

村長が地を勢いよく蹴った。振り上げた剣の切っ先が闇に光った。唐突だが、殺人鬼はこう考えていた。見えざる手が何故見えないのかということ。それは何かの比喩ではなく、文字通りの意味で見えないので。しかし、そのネーミングはまさにこの世界だけに適応されるものだと知っている。

闇だった。この世界はあまりに暗い。気付かなければ気付けないほどに闇に満ちていた。故に、『その色を保護色とする手』は見える手に違いない。

一体何人の村人が自らの知りえないうちに命を落としたのだろうか。それを思うと、殺人鬼は思わず涙を流してしまった。

「大丈夫だよ。無くなる前に、全部壊してあげるから」

殺人鬼は血塗られた手を伸ばした。と、その時だつた。

ぐちゅ、と厭な音が辺りに不自然なほどに響いた。同時に村長の動きも止まる。村長はゆっくりとその音の元を探そつと、自分の腹部を見た。

「 つ！？」

声すら出なかつた。自分の腹部に突き刺さつていたのは闇そのものだつた。だがいかに保護色といえども完全に同化しているわけではない。その存在はくつきりと形を持つて視界に捉えることが出来る。

手であつた。艶やかな女性の髪の毛のような漆黒を持った手だつた。それがお腹を撫でるように自分で蠢いている。

「 めて」

殺人鬼がか細い声を上げる。わなわなと口元が震え、今まで自分で生み出してきた状況を目の前にして恐れおののいている。これはなんという自分勝手な感情だらうか。彼女の瞳から零が零れ落ちる。赤い、とても赤い涙だつた。

彼女は村人の血を吸い過ぎて、真っ赤に染まつてしまつたのだろう。ふと自分の姿を顧みると人の色をした部分が何一つ存在しなかつた。からうじて唇は赤くとも良いだらうが、舌なめずりをすれば強烈な鉄の味がした。

村長が真っ黒に染まっていく。これは人が死ぬことと同義であつて、同時に生きることとも同義であつた。

「や、止めろ、私に触れるなあああ！」

耳を持たない手に声など届くはずが無い。人という器に液体を注

ぐように、ゆっくりと身体が満たされていく。村長がいくら腕を嫌々と振るうが何も意味を成さない。腹部から腕、膝、首、かかと、顔と、そのうち風景と同化していく。

殺人鬼はいつもたつてもいられずに必殺の手を携えて駆け出した。

「やめて！ その人は私が殺さなければいけないの！」

勿論超えは届かず、変わりに白い手が殺人鬼の身体に絡まる。

「邪魔よ、離して！」

白い手は惨殺されていく。だが、数は質をねじ伏せることが時に可能になる。さしづめイソギンチャクの触手のような感じで地面から一気に手が溢れ出し、完全に殺人鬼を押さえ込んだ。まるで見せざる手とコンビネーションを組んでいるかのようだ、殺人鬼は苛立つて手に爪を立てる。

「何なの!? あなたたちは対立してんじゃないの!? お願ひだから止めてええ!!」

ついには悲鳴を上げた。その悲鳴が爪を立て、白い手を切り刻んでいく。

村人たちがその悲鳴を聞きつけて徐々に集まってきた。「冗談ではなかった、これでは状況は悪化する一方で、白い手は次々と増え続けてこちらは何ら進歩できない。

ダメだ。

もはや殺人鬼は諦観するしかなかつた。首をがくりと落とし、殺人鬼は力を抜いた。

『君の名前を、聞かせてくれないか?』

「……何？」

声がした。とても澄んだ声だった。声は反響して、次第にはつきりと聞こえてくる。

「色、何色が根源なのかは僕ら低俗な人類が察することの出来る事じゃない。世界で最初に生まれた色が、白なのか、黒なのか、はたまた赤なのか青なのか。それとも……灰色なのか。君はどう思う？」

扉がそこにあつた。とても綺麗とは言えないが、不思議な扉だった。灰色で、それでいて他の色に見えないことも無い。

「しかし分かるはずの無いことをグダグダと思考していくも仕方がないから、人は自分たちで決める事を覚えた。例えば花の名称、例えば数学的な証明、例えば言語。けれども考えてみてくれ、黒と白のどちらが根源なのだろうかという事はまだ両者が分裂している。白、つまり人のイメージするところの『善』や『光』が根源なのか。

黒、つまり人のイメージするところの『悪』や『闇』が根源のか。

鶏が先か卵が先か。誰も決めていいないことをどうやって判断すれば良いのだろうかと考えたとき、先ほどの結論に達する。自分たちで決めれば良い」

彼が本当に自分たちの知るところの言語を喋っているのかすら錯覚してしまいそうなほどに不可解な内容を喋る扉。いや、恐らく扉の向こう側に喋っている人物がいるのだろう。一体誰なのかは分からぬが、今すぐにでもこの状況を開けて欲しかった。と、そう思つて辺りを見回してみれば、自分以外の全ての時間が止まつたよ

うに、見えざる手が、白い手が、村人たちが扉を見つめていた。

「 そつなつたとき、当然人間は自分たちが分かりやすいように、有利になるように決断を下す。無論これを決定するのは民主主義であるが故の国民投票が一番平等で良い。……と言いたいところなんだけどね、こういうものは先に言い出したものの勝ちなんだ。だから僕は灰色を世界の根源と設定させてもらう。故に、闇が帰る場所も光が帰る場所もすべからく灰色の世界、『異端が集まる場所』に違いない。だから僕は全てを帰す。この世界にただの一人も異端を残さないために」

扉がゆっくりと開いていく。邂逅が始まる。

「 まあ始めよ!。『セルフ・ディストラクション』を」

「……つはあつ！」

私は半強制的に目を覚ました。心臓の動きが激しく、耳の裏で血流の音が聞こえる。ドクンドクンと五月蠅い。着ていた服が汗でびっしょりと濡れており、間違なく着替える必要がありそうだった。そこで気付いた。私は帰つてから制服を着替えていないようだつた。着替えもせずにベッドで寝たのかと思うと、最近の自分の自己管理能力の無さに嫌気が差す。額を拭つてみると、自分の額を拭つているのかと疑えるほどに汗が手の甲についた。私は顕著に嫌そうな顔をしてその汗をシーツで拭いた。

夢だ。夢を見ていた気がする。それも、今まで遭遇したことの無いほどのどびつきりの悪夢を。それがどんな内容だったかは全く思い出せないが、少なくとも夢の中で『自分が死んだ』ような記憶がある。夢は現実の断片、理想、その逆の絶対に起きて欲しくないことなど、人間の精神状態が出るものだというが、これはどういうものだろうか。何かを暗示しているにしては[冗談が過ぎているように思えた。

「さつさと着替えよ……」

着替えると言つてもまだ昨日から風呂にも入つていなかったために、私は先にそちらを済ませることにする。

ベッドから重い身体を起こして、私は一度背伸びをする。随分長い間眠つていたのか、ところどころで骨が鳴る。首辺りが鳴つた時に僅かな痛みを覚えたが、特に気にすることでもない。

私は何食わぬ動作で携帯を手に取つた。メールのチェックをするわけではない。目覚めで必要なのは時計である。携帯のディスプレ

イの右上に表示された数字を見る。時計は十一時十分を表示していた。

そこで私は始めて気づいたように、風呂に入りつつと着替えを持った手を止めて、思考する。

「十一時、十分……？」

登校時刻は朝の八時半である。首を回して窓の外を見てみたが、午後十一時というわけではなさそうだ。カレンダーを確認する。今日は火曜日であり、休日である可能性はゼロに等しい。冷静になって状況を整理してみる。結論はいつも簡単に出了た。

「もひに遅刻じゃない……」

この様子では今から登校したといふでまともに授業を受けることは出来ないだろうと判断して、私は五時限目からの出席を覚悟し、ため息と共に部屋を出た。

部屋を出て階段を降りた時に私は異様な違和感を覚えた。嘔吐感とは違う気持ちの悪さが私の喉の奥を襲つた。平衡感覚がおかしいとすぐに判断して、私は必要ないと決め付けていた階段の手すりに掴まる。

「う……な、何？」

今になつて良く確認してみれば、額の汗はふつふつと湧き出できているし、それに体内温度が心なしか高いような気がする。はあ、と吐息をわざとらしく漏らしてみれば、口内の熱さが必要以上に認識できた。

「熱、ぶり返したかしら……」

「この状態では、きちんと熱を測つてみないと風呂は危険かもしれない。私は一階に降りて、リビングの救急箱から体温計を取り出した。家具がセンスの良い位置に配置されたゆとりのあるリビングを見渡してみたが、両親は既に仕事に出かけているらしい。机の上に書置きを見つけてそれを手にとつて見た。内容は、私が珍しく寝坊しているところを起こしに行つたらしいのだが、私はその時『今日は休む』と答えたらしい。それで両親は恐らく私が先週風邪を引いていたことからぶり返したのだと判断したのだろう。書置きの横には『丁寧に森野医院から貰つてきたカプセルと、簡単なお粥がラップに包まれて鍋に入つていた。

どうやら私は寝言で自分の限界を親に伝えていたらしい。考えて見れば、そんなことを言った気がしないでもなかつた。何となく違和感を覚えつつも、とりあえずは胃袋の中に何か入れておこうと粥鍋を火にかける。その間に熱を測つておこうと思い、椅子に座つて体温計を腋下に入れた。

「…………」

一人で家にいると、物凄い静かだな、と感じることが良くある。こういう時に家族の団欒だんらんがいかに重要なものののかを思い知らされる。

白椿菊乃。恐らく彼女には家族の団欒など遠い夢のような産物なのだろう。友人付き合いを規制する家族が仲が良いはずがない。向こうがそう接しようとしても、白椿さんがそれを全面的に受け入れているのかと聞かれれば、恐らく否だろう。私が勝手に決め付けられることではないが、そうでも解釈しなければ『家庭事情』という言葉がそぐわない。

いや、それは考えすぎかもしれない。この状況に少し感化されすぎている節が自分自身に見えた。元より彼女からは事情を嫌でも聞

きだす予定である。

彼女がいつたいどういう事情を抱えているのかはまだ未知であるが、私に何かを求めて接触してきたのは確かなのだ。それを無下にするほど私も非道ではない。だが、与えるものが何か分からぬ以上は行動のしようがないのだ。彼女が自ら語つてくる日もそう遠くは無いだろうが、どうしてか一步を踏み出したくなる衝動に駆られる。

私自身、彼女を氣に入っているというのは間違いないだろ。ペットみたい、と表現するならば番犬のほうが正しいように思えるが、小動物的可愛らしさと、昨日見た百獸の王すら身を凍らせる威圧感をもつた彼女。アレを見た瞬間に私の心は決まったのだ。彼女を救つてあげよう。その気持ちは偽善ではない。偽善とは結果についてくる言葉であって、元より偽善で動くほど私は落ちぶれた人間では無いと自分で豪語できる。

ピピピピピ、ピピピピピ。

体温計が音を鳴らして計測の終了を知らせる。脇下から抜いて、それを見た。

「……三十六度、五分。全然平熱じゃない」

嫌な予感が私の脳裏をよぎった。最近テレビ番組でやたらと医者が「風邪ですね」と言ったのにも関わらず重病を抱えていたというパターンを放送するがために、自分もそのパターンに当てはまつてしまつたのではないかと誇大妄想に近い予想をした。しかし、森野医院はかなり名前の知れた病院であり、医療ミスや詐欺の疑いは創立してからたつたの一度も無い。ナトリウム療養所のような雰囲気がそういう悪事を妨げているのかもしれないと思つた。

とは言え熱が無いのに熱さましを飲んでも仕方が無い。もう一度救急箱を漁るが、咳止めの薬や喉の痛み、吐き気などに効く薬はあつたが、自分の今の症状に合いそうな薬が無かつた。一応吐き気止

めだけ飲んでおこうかと思ったが、間違つていては昼食の無駄遣いになる。もう一度病院に行つて診察してもらつたほうがいいのではないかという結論に達した。勿論理由はテレビ番組の影響だ。早期発見が治療の最も有効な手段らしい。

先週行つたばかりなので保険証はまだ財布の中にある。私はお粥を温めるのを止めて、二階に財布と着替えを済ますために上がつた。ふと思いつくが、これでは学校に登校することは諦めたほうが良さそうだった。特に無遅刻無欠席を田指しているわけではないので、構いやしなかつた。

戸締りを確認して外に出る。

「……あつ……まだ春先だつていのに、何なのよ」

田中、田は真上に位置して一日の中で最も日本を照らす時間帯。ラフな格好になつたといえども、熱の余韻のようなものがある今の状態では緩和されても熱い。

私は急ぎ足に森野医院へと向かつた。

森野医院での診察の結果はいたつて簡単なものだった。

栄養不足。言われてみれば、ハンバーガーを食べた一食意外にまともにご飯を食べた覚えがない。吐き気やダルさはそこからきているのもだと判断された。反論のしようが無かつたので私はそれでとりあえずはサプリメントらしきものを貰つて家路へつこうとしていた。

「先輩」

突然後ろから声をかけられた。聞こ覚えのある声で、半ば反射的に振り向いた。

「白椿さん？ どうしてここに……」

その瞬間、私は目を疑った。彼女の印象でもある元気な雰囲気が微塵も感じられなかつたからだ。特徴もあるポーテールが、だらしなくぶら下がつているだけのものに見える。そこで私は一つ、昨晩交通事故に出くわしたために元気が無いのだろうかという田測を立てたが、一秒も経たないうちに崩した。

「せ、先輩。先輩。あ、あたしですね」

自嘲しているような引っ掛けりが彼女の声に混じる。嗚咽が混じつているようにも聞こえるが、きっと彼女は泣いていないと思った。奇怪な声は続く。

「昨日のニュース、み、見てました？ ま、まさかテレビは見ない家庭なんて超がつく下らないオチは無いですよね？ や、それなりそれでいいんですよ。あたしとしてはそっちのほうが」「昨日のニュース……××区の連續殺人事件のこと？」

白椿さんの言葉を遮つて、昨日私が唯一見たニュースの内容を口にする。 その刹那、白椿さんが豹変した。

「お、おおおおおおおおー！ 「冗談にしちゃあ出来すぎますよ」 れはっ。因果、因果ですかこれが。馬鹿らしい、アホ過ぎますよ、ははっ」

大袈裟な白椿さんの反応に思わず私は身を引いた。明らかに様子

がおかしい。元々テンションの高い子ではあるが、これは異常であった。それに今日は学校があるはずであるし、故に白椿さんは制服を着ている。なのにここにいるのは何故なのか。解せない問題を問うた。

「あ、貴女はここで何を？」

「あたしですか？ 病院に来る理由なんて少ししか無いじゃないですか。病氣だから診察にきたってパターンと……『お見舞い』」

「病氣、じゃないわよね。……誰のお見舞いなの？」

恐る恐るといったように私は聞いた。

「…………くつ」

瞬間、白椿さんが背をいきなり折り曲げ、必死に笑いを堪え始めた。何が面白いのか全く分からず、気味の悪い光景を收まるまで待つた。時折ひとつ、という白椿さんのか細い声が聞こえて私は大丈夫かと、手を差し伸べようとした、その時だつた。

突如白椿さんが頭を上げて、私の手を取つた。

瞳に溢れんばかりの涙を溜めていた。なのに口元には堪えきれない笑みが浮かび上がつており、そこに一人の彼女が存在しているかのようだつた。

私はその時に思った。

孤独に生きている人間とはなんと弱く、そして強い生き物なのだろうかと。彼女らの痛みになど気付けるわけが無く、その片鱗へんりんを見せても決して全貌を見せようとしない難攻不落の要塞を構え、決して他人を踏み入れようとさせない。ゆえに、私たちには彼女らの限界というものが察せ無い。

私の決意は遅かったのだ。彼女がサンドイッチのお礼を大袈裟なまでに返そうとしたその不自然な行為を精一杯疑つておくべきだつ

たのだ。原因の無い行動などありはしない。常に結果には原因がつきまとつ。それを世間では、『因果』といつ。

彼女の涙に濡れ、恐怖に震えた声が私の脳内にゆっくりとしみこむ。あまりに残酷で、想像など出来るわけが無かつた傷がさらけ出される。

「私が殺した人の、お見舞いですよ」

扉は既に開いていたのだ。

そこからのびて いる因果の鎖を、私は今始めて掴んだ気がした。

森野医院の中は大自然と言つても過言ではない場所だった。元々建物の半分辺りが木造で出来てゐるため、空気問題には何ら支障が無く、庭には木々が植えられており、医院内部のいたるところに觀葉植物が置いてある。医療方法の中でもハーブのようなものを使つたりラクゼーション効果と言つたが、そのようなものがかなり流行つてゐるらしい。医院にほのかに漂う良い香りを発見すると、確かに人気が出る理由が分かる。香水類の匂いはあまり好きではないために、ハーブ類も受け付けないと思っていたがただの食わず嫌いだつたらしい。

……さて、私はそんな森野医院の素晴らしさについて語つていくつもりなど毛頭も無い。問題は、私の隣で絶えず涙を流している白椿菊乃にあつた。

あの驚愕の発言から私は理性を立ち直らせるのに些か時間を要した。何しろ、昨晩のニュースで流れていた殺人事件は、この子が起こしたと言つたのだから。無論そんな話を信じられるわけが無く、仕方なく私は一度彼女を落ち着かせるために森野医院の中で休むことにしたのだ。

『私が殺した人の、お見舞いですよ』

百人単位に及ぶ大量殺戮は一つの病院だけでは手が足りなかつたのだろう。緊急用としてこの小さな診療所が使われたほどに、事態は最悪だつたに違ひない。しかし、死んだ人間をどうやってお見舞いなどするというのだろうか。ふと彼女を横目に見たが、恐らく受付で門前払いされたに違ひなかつた。

正直な話、自分がこれほど冷静に彼女の横に座つてゐることが不思議に思えてならない。仮にも殺人鬼を名乗つた人間の横にいると

いうのに、全く危機感を感じない。彼女がもしもナイフを隠し持っていたら私はどうするつもりなのかと自問自答したところで、返つて来る答えなど無かつた。決して優しさとか、そういうった気持ちで彼女の横にいるのではない。私がこうして彼女に付き添っているのは真実が知りたいからに他ならない。故に、私は彼女を信用しているわけではない。しかしそれでも手元を確認するとか、危ないものを持っていないかなどを確認しようとも思わなかつた。怖いわけではない、ただ、興味が無いだけだつた。

泣いている白椿さんを老人たちが一瞥していく。可哀想に、とつぶやく老婆の声が耳に入ったとき、私が感じたのは怒りの類ではなくて、暢氣のんきだな、という哀れみだつた。

「うつ、うう……」

泣き止まない白椿さんの手は私の手の上に重ねられたままだつた。ハンカチを田頭に当てて、必死に嗚咽を抑えているが、すぐにまたつて吐き出されてしまうようだつた。

私はこれではらちが明かないと、話を切り出すことにした。

「ねえ白椿さん。一体どうこうことなのか説明してくれる？ 私、何が何だか良く分からぬのだけど」

極力威圧を与えないように、緩やかな口調で言った。白椿さんはそれに答えようと、今だ溢れる涙を大きく拭つてハンカチを顔から離した。

「うつ……ぐ……」、言葉の通りですよ。あたしは、沢山の人の命を奪つたんです

「その意味が分からないのよ。どうして貴女が人を殺す必要があつたの？ 何か、正当防衛みたいなものじゃなくて？」

「ち、違うんです。で、でも、あたしは本当は一人だけ殺せばよかつたんです！ それが、他の人に途中で見つかってしまつて……いえ、なんでもないです」

自分が実に醜い言い訳をしていると気が付いたのか、声の調子が上がりつていたのが急に下がる。

「つまり、ドミノみたいにどんどん、つてこと……。それ、まさか私をからかつて言つてる、なんてオチじゃないわよね」

「……そうだつたどれだけ嬉しいか想像もつかないですよ。でも、先輩怒らないんですね？」

「おー」……つ、つていうか、それが本気で言つてるんだつたら怒るじゃ済まされないわ。貴女が起こしたのは犯罪よ？ それも、即刻裁判で死刑判決を言い渡されるくらいの」

「じゃあどうして警察に連絡しないんですか」

「それは……」

言葉に詰まる。確かに、どうして警察に連絡しないのだろうか。まさか私は白椿さんを庇つているとでもいうのだろうか。この、『優等生』であるはずの私が。

いや、それは違う。まだ彼女を犯人だと決めるには早計過ぎるからだ。どこの誰がこの少女を見て、殺人犯だと思えるだろうか。それも、あれほどの獵奇的殺人はいかに彼女が本心は狂つているとしても不可能がある。大の男がそれを実行したところで、あれほどの殺戮を犯せるわけがない。

待て。

ならばどういう状況ならば百人単位の殺人が一夜にして完遂することが出来るのだろうか。目撃者がいなければ事件にならない、事件にならなければ百人をその前に殺すことは可能だろう。

だが、彼女は『一人を殺すために動き、その際に目撃されたから

次々と殺していった』と証言していた。ということは、最初の一人を除外した残り九十九人以上の人間に目撃されたということだ。そんな衆目の中で殺人を犯したというのだろうか、この子は。

「せ、先輩？」

白椿さんが心配そうな顔で私を覗き込んできた。

「何でもないわ。ただ、私が貴女を通報しないのは、まだ貴女が犯人だって認めたわけじゃないから。嘘……にしては、少し芸が過ぎてるようと思えるけど、それでも私は信じない。貴女がそんなことする人に見えないもの」

「でもあたしは実際……！」

「待つて、なら質問に答えて。貴女、いつ事件を起こしたのよ」

「……昨日、先輩と別れてからすぐに殺しに行きました」

それではおかしい。私は白椿さんを睨みつけて言う。

「おかしいわ。昨日のニュースを見たのは貴女と別れてそんなに時間が経つて無かった。それも、間違いなく一時間は経つてないわ。そんな短さで××区まで行つて百人単位を殺す？ 不可能に決まってるわ。早足で行つたら一時間、タクシーを使つても二十分はかかるのよ？ それから事件が起きて、マスコミが騒ぐまでに残り四十分？ 有り得なさ過ぎる」

「目撃者が多かつたんですよ。それに、殺人には他の人にも手伝つてもらつたんです……」

「嘘ね」

そのきつぱりとした態度の私に白椿さんは肩を微弱に震わせた。

「貴女言つたじゃない。『最初は一人だけを殺すつもりだった』つて。なのに最初から手助けを用意してるのはおかしいわ。脱出用でもいるのなら分かるけど、それでも時間の問題は解決しない。それに加えて、私は貴女が人を殺してないと絶対に言える理由がある」「……それは？」

「貴女が泣いてるからよ」

「……え」

心底意外そうに彼女は声を漏らした。私はそれに大きくため息を吐いて、彼女の頭に重ねられた手を解いて置いた。

「殺人者は人前で泣かない。大抵喜んでるか、呆けてるか、どこかに引きこもってる。もしくは、何も感じてなんかない。でも私は、貴女が芝居で泣いているとは思えない」

「…………」

「ねえ、本当は何があつたの？」

もう最初から言い訳苦しかったのだ。殺した人間をお見舞いに来るなんていうおかしな言葉に、人を殺したとは思えないほど悩みも無く私にそのことを打ち明けたこと。そして何より、『この森野医院で出会つたこと』が決め手だつた。

彼女が最初に言った、殺した人間のお見舞い、これが何かの表現で真実だと仮定しても、この森野医院にいる意味が証明されないので。それならば何故一番大きな国立病院にいないで、こんな辺境の地を訪れたのか。それに、運び込まれた患者など一本の手で数えられるほどしかいないだろう。そんないちいち傷つけた人間を弔いに来る人間が、人を殺せるわけがない。

そこから出される結論は、今までの彼女の行動から見てただ一つだけだつた。

「 私に、会いに着たんでしょう?」

彼女は因果の鎖を頼りに、私の居場所を突き止めたのだ。そして、恐らくその涙が嘘でないというのは間違いない。

白椿菊乃は、何かに対して悲しんでいる。……否、苦しんでいる。私はそ彼女の堤防をゆっくりと外すために、頭を優しく撫でた。

「 あたしの……」

瓶^{たが}は外れた。あとは水の流れに任せただけだ。

「 あたしの家庭事情については、黒住から、何か聞きましたか?」

「 いいえ。ただ、貴女が両親の仕事のせいで友達が作れない、ってことだけ」

「 他には?」

「 何も。彼は刑事で、誰かを追っている、とか言ってたけど、それは関係無いわね」

「 いえ、多分それあたしの両親のことですよ。黒住がそう言つたのなら間違いないです。ああ、だから黒住はあたしにあの口声をかけてきたんですね。やけに人の家庭事情を知つてゐる奴みたいでしたから、てっきり『あつち』のほうかと思いましたが、そうですか。あの人、きちんと因果で動いてたんですね」

「『あつち』?」

私はわざとらじくオブラー^トトに包まれた用語に早急に説明を求める。

「 ああ、そこから説明が必要ですか。そうですよね。……あたしたち、『たち』っていうんですけど、実は言うとあんまり普通じゃないんですよね、家系みたいなのが。何か、傘下つて分かりますか?」

大きい家の下つ端みたいな家のことなんですけど、それがうつち、白椿の家系らしいんですよ。一体どこ古代日本の話だよつて感じですけど、事実だからどうしようもないです。それで、その傘下つてのか三個あるんです。あたしの家と、あと一つ。あつちっていうのは黒住がその一つかなあ、と思つてたんですけど、その一つじゃないほうの一つだったんだってことです

「随分とおかしな話になつてきたわね。古い仕来り、なんて本の中にしかないと思つてたけど」

「そこまで予想しちゃいましたか。まあそれで、その仕来りみたいなのでうちは『浄化』らしきものをしていたらしいんですけど……まあ最初は良かつたらしいんです。詳しくは知らないんですけど」

「最初は？」

「はい。先輩も何となく分かつてくれると思うんですけど、『浄化』つて抽象的過ぎませんか？ 逆に悪に染めてしまうのなら分かりやすいんですけど、正義に戻す、つていうんでしようか、それってとても難しいし、どうしていいか良く分からぬと思うんですよ」

「確かにね。人を悪の道に陥れるのはどうにでもなるけれど、更生させるとなると私も最善の方法なんて考えつかないわね」

「で、そうなつた時にどうしようかって、話し合いが何度か設けられたらしいんです、昔に。そこで出た結論が……『人を真っ白にしてしまおう』」

「……真っ白？」

私は撫でていた手を止めて白椿さんの表情を窺うように顔を向けた。彼女の表情は思いのほか軽い。恐らく溜めていたものを吐き出せる感覚に酔つているのだろうと思つた。

「人が真っ白になるつて、どういうことか、分かりますか」

その瞬間、私の知性がある一つの答えを導き出した。その考え方

丸々代弁するよつに白椿さんの口が動く。

「白つていののは、黒と違つて何かで出来る色じゃないらしいです。光の屈折具合とか、そういうので出来る色で、黒は何でもかんでも混ぜればいつか出来る、つまり色々含まれてるじゃないですか。でも、白は何も無い。何も無いんですよ」

そこで、先ほどの話の展開に至るわけである。

「死んじやえば良い」

人の心に悪が宿され、それを浄化しなければならなかつた。しかしその悪は数も質もその仕事人たちを大きく上回り、普通の方法では時間がかかりすぎるし手間も労力も必要だつた。一度浄化しても、二度、三度と蘇る。

ならば、と彼らは考えた。

悪を宿す器を破壊してしまえば良いのではないだろうかと。極論だが、間違つていない。しかし彼らにも人情はあり、他人を殺すことは相当の精神力を必要とした。中にはその凶行に耐え切れなくなつて自害するものもいただろう。彼らは人を、他人を殺すことによつて自らも殺めていた。だがそれでも彼らはそれ以外の方法を見出せなかつたのだ。他の、傘下の家系よりも業績を上げるために。他人を救うための最大にして最悪、最終の方法は、殺すことだと。そして殺すことにより自らの感情も死んでいき、彼らはその行為をじつ咎付けた。

「これを、『自己殺害』って呼んだらしいです

白椿さんは『自己殺害』と言つた。私は『セルフ・ディストラクション』と読んだ。

「すると、昨晩の連続殺人事件は、貴女の両親がやつたことなのね」

結論を急ぐ。もはやこんな話をする必要は無くなつた。白椿菊乃が私と出会い、私に求め、そして私はそれに答える。

面白いと素直に思つた。これが、『因果』なのだろうと。

「先輩、お願ひがあるんです」

本題に入らう。彼女が私に嘘をついたのは、最初からこれが目的だつたからだつた。彼女は私にこの重大な嘘を仕向けることによつて私を試した。それでも尚、私に付き合つてくれるというのならばという賭けに彼女は出た。それほどに彼女は追い詰められていた。恐らく私が警察につれていいくとでも言い出したら、ここで殺されたいた可能性もある。そういう意味では、これは随分と迷惑な賭けだつた。

だが、もはやそんな前戯は必要ない。元よりそのつもりだつたのだ。多少予定よりも大きすぎる事象だが、『友達を救う』のに大きさなど関係ない。

「あたしは人を殺したくなんてない。今まで我慢し続けてきたんです。両親が私に教えてくれる、数々の殺害方法とか、そういうのに。もしもあたしがそれに屈してしまつたとき、友達がいたらその子が悲しんでしまう。もしかしたらその子を殺さなければならなくなつてしまふかもしない。だから友達を作らなかつた」

彼女は泣いていた。やはり真実の涙だつた。

「先輩に出会つた時も、本当は無視しようかと思つた。お礼なんて、しても何の意味も無いし、ただ自分が苦しい状況に置かれるだけだと。けど、私はやっぱそれは友達とか関係無しに返すべきだと思つ

た。でも、その日、私はある出来事を境に賭けてみよつと思つたんです

「ある……出来事?」

「はい。それは……先輩が、灰田純一と出会つていたから

一枚のピースが音を立ててはまつた。驚きは無かつた。恐らく彼女が灰田純一を知らないと答えたのは嘘だらうと半ば看破していたからだ。先ほどの黒住の話で全て揃つていた。

白椿菊乃是『出会いは最悪の因果』だと言つた。その時は言いすぎではないだらうかと否定の気持ちでいたが、もはや同意するしかなかつた。

そして、本当の最悪の因果の鎖に囚われた彼女は言つた。

「先輩、あたしを、助けて……！」

もう私は、人の踏み込める限界領域の一歩先に両足をついている。

黒住儀軋は辺りを見回して、広い場所だな、とただそう短絡的に感想を口にした。

成田空港を全便欠航にさせることは不可能に近い業であったが、権力と人脈を駆使してなんとかそこまでたどり着いた。恐らくこれによつて出る被害は全てこちら持ちだろうが、金でどうにかなる出来事なのであれば億単位の金額くらい投げ捨てることだって今の彼には出来た。

欠便になつたからと言つて飛行機がシェルターに仕舞われるわけではない。整備士たちがこの期を利用して大幅にメンテナンスを行つてゐるらしく、滑走路の中心に立つていてもあまり孤立感は感じれなかつたようである。黒住はそれに舌打ちし、背広の胸ポケットから携帯電話を取り出した。おもむろに番号を押し、電子音が鳴る電話に耳をつける。

『こちら輸送班。何か問題でもありましたか？』

事務的な男の声がガチャリ、という鈍い音と共にそこから発せられた。黒住は同じく事務的な声質でその声に返した。

「到着の予定時刻を述べろ」

『交通状態によりますが、一時間以内には間違なく到着出来ます。都外まで逃走していたらしく、少々手間を取つてしまつたので』

「最速で着いていつ頃だ」

『午後五時半辺りです』

「捉えたのは二人か」

『いえ、一人、夫の方は逃がしましたが、恐らく結束の固い奴らなので奪還を予測して誘導させます』

「拘束は嚴重にしているだろうな」

『抜かりなく。手枷足枷指枷、それと強力な睡眠剤を使用しました』

「起床予定時刻は」

『六時過ぎにはなると思います。早朝に眠らせたので、そう長くはかからないかと』

迅速な対応と予想以上の出来に黒住はふむ、感嘆の声を漏らした。

「成田空港の滑走路まで連れて來い。拘束は外すな。もし眠りから覚めたようだつたら、手足の一本や一本折つても構わない。言つまでも無いと思うが、いたぶる様な真似はするな。それは下郎のやることだ。折るなら一思いに、いや、何も思わず折れ」

『了解』

「到着を待つ」

そう言つと、黒住は携帯電話の電源ボタンを押した。そして間髪いれず再び番号を押し始める。こちらはまだ一度もかけたことのない電話番号だった。向こうが見慣れない番号に警戒心を抱いて着信を拒否するという場合が少なからず予測されるが、それならば端末を変えて再びコールすればいいだけのことと黒住は踏んでいた。

聞きたれた電子音が鳴り響く。一度目、留守番電話サービスに接続された。これでは不在か拒否かがまだ分からない。留守電メッセージに、「黒住だ」とだけ入れて電話を切つた。二度目のコールをかける。やはり主は現れなかつた。留守電メッセージに同じ内容を入れて、また切る。三度目をかけようと思ったが、一度時間を置こうと判断して黒住は携帯電話を胸ポケットに戻す。

成田空港の滑走路は人一人がそこに居座るにはあまりに広すぎる空間だつた。手を伸ばして端から端まで届かないだろうかという幻想を一度持つてしまつたら、夢ですら届かないような夢のループに陥りそうな恐ろしい感覚に嵌りそつた。

黒住には、昔そのような届くはずの無い夢があった。思い返せばあれが自分の青春時代と呼べるたつた一つの思い出なのかも知れないと、今になつてしんみりとそれに浸つていた。

「自分の言動には一切の嘘が無く、それでいて主に悪意で出来ている」

それは黒住の声ではなかつた。彼は自らの信条とする台詞の聞こえたほうに首を向けた。そこには見覚えのある銀色の髪の毛をもつた青年が立つていた。

「五年も前の話だったかな、あれは。君がそつして悪意といふ名の正義を振りかざすようになったきっかけは」

灰田純一。懐かしい顔ではあるが、確かにそんな名前だったな、と黒住は思い出した。

「年上の人間に向かつて『君』呼ばわりは好かないな。最近のガキは礼儀も知らないのか」

「それはすまなかつたよ。僕は基本的には名前で呼ばない人種ですね、性格上人のことは君と呼ぶことにしているんだけど、気分を害したなら『貴方』に変えよう」

「ふん、どうでもいいことだがな。それより何をしに来た。貴様がどうやって俺がここにいることを突き止めたのかは知らないが、貴様の仕事はここにはないぞ。無論これに嘘は無く、主に悪意で出来ている」

「つまり僕に仕事をさせないつもりだと？ 別に構わないさ、貴方がやううとしていることは禁忌に近いが、だからと言つて僕に支障があるわけじゃない。自由にやつていよい」

「なら何をしに着た。答えろ」

「別にここには用は無いさ。たまたま近くを通りかかったら成田空港が全行欠便だなんておかしな話になっていたから寄つてみただけ」

「なら帰れ。貴様は正直邪魔だ。失せろ」

「あれれ、酷い扱いだねえ。ま、僕も自分がここにいるべきだとは思つてない。言われたとおりにするさ」

灰田はやつてきて早々帰れと言われたのが不服だったのか、少しだけ不機嫌そうにそう言つて放つ。黒住に背を向け、視線を後ろにやつた。

「貴方はそれでいいのかい？」

問いただす。黒住にとつてとても簡単な問いただす。彼も灰田に背を向ける。もはや用は無い、立ち去れと無言で言つよう答えた。

「俺は、『黒住』ではないからな」

灰田はそれに納得したのか、黒住の耳に彼の足音に入る。それはどんどんと遠くなつていき、次の瞬間には全く聞こえなくなつた。黒住儀軋は自分の言つた言葉を反芻する。『俺は黒住』ではない。ならばなんだというのだろうか。自分が持つ名前以外に自分を証明できる何かがあるのだというのだろうか。

風が吹いていた。春先の風の感触は嫌いではなかつたが、その優しい感触が人の手の温もりのようで、彼自身は受け入れるのを否定していた。自分は受け入れないのに、まるで自分を受け入れるように吹く風に対し少しだけ卑怯な気もしていた。

黒住は自分は中途半端だと思っている。『黒住』の家は代々『悪意』で動く家系であり、善良な人々を、それも過度に世界にとつて保守的な人間に悪さを働く知恵を授け、仲間を作り、主に裏の企業として動いていた面が多かつた。それは麻薬であつたり、悪質な風

俗であつたりした。時には依頼で人を殺すこともあつたらしく、本当に世界の『黒い部分』を受け持つていた家系であった。先代の『黒住』も同じくして女性の身でありながらその身を悪意に染め、真っ当な黒住の家系として数々の任務や行動を起こしてきていた。彼女の名を『黒住此処』といった。実に女らしい名前でありながら、黒住儀軋にとって師匠のような存在であり、何よりも憧憬と、そして愛情で見ていた女であった。今は亡き存在ながら、黒住にとつては墓まで持つていく思い出の一つであった。

成田空港は彼女の死場であった。普通でなかつた彼女は普通でない場所で死んだ。今と同じように、彼女はある目的のためにこの広い場所選び、航空会社を丸ごとジャックして完全に乗つ取つていた。自分には出来ない芸当だな、と黒住は思う。彼は一般人が目を眩ませるような賠償金を払つて実行しただけだ。借金でも作れば誰でも出来る芸当だつた。それだけが現在の状況に置いての不満だつた。時計を一瞥する。目標の到着まではまだまだ時間がある。黒住は再び携帯電話を取り出して、先ほどと同じ番号を押した。

プルルル、ガチャ。

その電話を待ちわびていたように、電話の主は黒住の予想を裏切つてその電話に出た。相手が用件は何だと黒住に聞く。黒住は一度息を大きく吸い込んだ。

「成田空港で、決着を着けてやる。俺の因果も、貴様の因果も」

そのまま相手の返事を待たずに電話を切る。長らくして待つた瞬間にしては、あまりにあつさうとした幕引きだつた。いや、幕を引くのはまだ早い。

黒住はさらに携帯電話を使用する。先ほどと違う電話番号、成田空港の入り口に配置されている部下への連絡だ。

「これから来る客人に伝える」「UN」

黒住此処は死に際に彼に言葉を残していった。恐らくそれが彼女の望んだ遺言であり、意志を託された黒住にとつて最も必要な言葉だつたのだろう。

彼はあまりに黒住として見るならば優しかった。常に人を気遣い、悪意を悪意にしか向けない義賊であり、弱気ものの助けとなるために悪意をとにかく働かせた。しかし、それは彼女で無くとも言ったように悪意とは程遠いワル知恵である。人一人を満足に殺すことの出来ない人間、殺すことに理由を求める人間には悪意は向かない。それを直そうと奮闘していたが、生まれつきの性格だから仕方が無いと結局は妥協されてしまった。

『悪意ってのはね、相手にとつて悪いことをしようと考えることに他ならないのよ。それが相手にとつて本当に迷惑かどうかは結果が決めること。だからもうあたしは諦めたわ。あんたは自分が悪いことをしていると思って全て行動しなさい。常に悪行を働いている気持ちを持ちなさい。一杯のコーヒーを飲むなら、そのコーヒーを飲めない人間にざまあみろって毒を吐きなさい。そしてその想いに嘘をついちゃいけない。嘘をついたら、ざまあみろじゃなくて『ごめんなさい』になってしまふからだよ。だから気をつけてくれれば完璧だ。だつて、あんた、嘘が一番嫌いなんだろ?』

彼女の言葉は矛盾しすぎていたが、それで『黒住の悪意』となるならば、それほど楽なことはなかつた。だから黒住は頷いた。

だから黒住はこう言つた。

「俺の言動に嘘は何一つ無い。だが、その言動は主に悪意で出来ている」

自分の家庭が共働きしている状況にこれほど感謝したことは今までかつて無かつたし、恐らくこれからも無いだろうと思つ。私は泣き崩れて倒れてしまつた白椿さんを家に連れ込んで看病していた。移動中何度も携帯電話が着信音を上げたが、白椿さんを抱えている状態で出れるわけも無く無視を決め込んだ。履歴を見てみてが、知らない番号だったのでかけ直すのも面倒になりそのまま放置していく。

あの酷く取り乱した様子の白椿さんを思い出す。

『あたしを、助けて!』

あれは懇願であったに違いない。自分がなしえなかつたことを、なんとしてでも私にやつて欲しいという優先順位第一位の願いであつた。私を頼つてくるだらうということは予想がついていたが、白椿さんの話と状態は私の予想の斜め上を行つた。

どこの宗家に使える三つの傘下の家。分家とは違うらしいが、まさかそんな昔の日本でもあるまいし、家系どうのこうのでもめている状況が現代にあるとは思わなかつた。しかも、だ。その中でも異端の中の異端を走るだらうその仕来り。白椿家は三つの家の中で『浄化』の役目を負つてゐるのだと言つた。その『浄化』とやらが一体何なのか、何の意味があるのかは全く掴めないが概要からして最悪の結末にたどり着いたことだけは確かなようだつた。

人を真っ白に染めることによる浄化、つまり真っ白とは全てを『白』に戻す、殺すということだ。人間は靈じゃないのだから、完全にその理論は破綻していると思う。どんな理由があるにせよ、昨晩のような大量殺戮を犯して良い理由になんてならない。恐らくその境が見えなくなるほどに追い詰められたのだろうと推測する。

そしてその状況が、現在最悪だということが白椿さんの状態から容易に察される。まさかそんな状態で私に嘘をつけるほどの余裕があつたとも思えないが、最初の不気味な様子は嘘をつくためのものではなかつたのだろう。思い出してみれば、彼女がこの世のものとは思えない奇怪な言動を取つていたことが分かつた。

私は思考する。これから自分は何をすればいいのだろうかと。その殺人鬼と合つて、白椿さんを巻き込まないよう説得でもしろといふのだろうか。

「……そんなの無理に決まつてるじゃない……」「

殺人鬼とやり合えるほどに人生は捨てていない。とは言え、これは常識からは大分逸脱しているが彼女の家庭環境の問題に他ならないのだ。教育委員会でも動いてくれれば全ては丸く片付くのかもしないが、恐らく惨殺されてしまうのがオチだろう。必要なのは自衛隊かもしれないかった。

兎にも角にも、家庭問題は家庭で話し合わなければ何ら意味をもたらさない。彼女に纏わり着く因果の鎖を断ち切るには、その源に近づかなければならぬのは避けようの無い現実だ。

一人では、無理だ。

ならば二人ならば出来るのだろうかという話になるが、それも人による。誰か、相手を上手く言いくるめられる人間が必要だ。いや、いつそのこと警察に白椿さんを突き出して、両親の情報を一から百まで喋らせてしまうのも手かもしれない。だがそれだと白椿さんの身が危ない可能性がある。

「…………あ」

可能性を見出した。不本意ではあるが、この人物ならば……。

「グーン、グーン。

突如、携帯電話が鳴り響いた。鳴ったと言つてもバイブレーターだが、私はそれを手に取つて着信を確認する。先ほどと同じ、誰とも知らぬ電話番号だった。私は息を飲んでそれに出る。

「…………はい」

『…………』

相手は黙つている。いたずら電話かと思い、一度耳を離した瞬間に、声が聞こえてきた。

『成田空港入り口で待つてるよ』

「つー？」

その声に過敏に反応した私は、何か言い返そつと思つて言葉を搜したが、その数秒の間に電話を切られていた。

今のは聞き覚えがある。無いはずがない。

灰田純一、彼に違いない。私は苛立ちから携帯電話をベッドに叩きつけ、先ほどの言葉を反芻する。

「成田空港…………何で成田空港なのよ…………」

掴めない男ではあつたが、まさか場所の指定まで予想だにしないところを突いてくるとはもはや掬えない水どころか空氣である。意図が読めない読めるの以前の問題で、読もうとする意思すら許されないような門前払いだ。

時計を見る。現在時刻は四時少し前。白椿さんが眠つてしまつたのはもう大分前の話なので、時が悪いとそろそろ起きてしまう頃だらう。このまま放つておくのも後ろ指を刺されそうだが、彼女を灰

田の前に連れて行くのはあまりに気が引ける。私は急いでペンと適当なノートから紙を一枚破つて書置きを残す。

「つたく、こひちは風邪氣味で辛いって言つのに、次から次へと面倒な……」

念のために医院で貰つてきた吐き氣止めの薬を喉に流し込み、上着を手に取る。

「お願ひだから、もう少し眠つてね」

銀色の髪の男は、成田空港の滑走路で風にその長い髪をたなびかせていた。何処から見ても美しいという形容詞が良く似合う。男は滑走路のステーション側から中心にいる黒い男を見ていた。この日を待ちわびていたように、宗教人が黙祷するようにその男はただ佇んでいた。

銀色の彼は先ほど舞台に必要な最後の連絡を済ませ、時を待つている。昨晩の大量殺人事件は彼にとつても不幸で、それでいてタイミングの良いものだつた。物事は須らく早急に済ませたほうが後味が良い。そう考える彼にとって、先ほどの電話もある意味では嫌がらせに近いものがあつたかもしれない。

彼はこの景色を以前に見たことがあった。何年前の話だったかは思い出せなかつたが、同じように黒い服を着た人間が、殺人鬼を全

便欠航された空港の滑走路で待っていた。以前と同じ、本当に同じならば、これからここで『本物の劇』が始まるだろう。醜く、無意味で、無価値で、それでいて彼らにとつてはとても重要な劇が始まること。銀色の彼は傍観者だった。いや、観客というのが最も適した言葉なのだろうが、彼はそれを見ようとも思っていない。ある派閥とある派閥が争いあつたとき、それに関連する第三者は無関係だ。そんなものに首を突っ込もうとするのはよほどの偽善者か、優等生だけ。

しかし、舞台を用意した監督にとつて劇を中断させられるのは非常に思わしくない。だから銀色の彼は異分子を取り除くために連絡をした。邪魔者はいる。彼らは彼らで問題を片付けるべきだと彼は判断する。そして、同時に銀色の彼にも劇が待ち受けているのだろうと、彼は思っている。

誰かが泥水を飲んでいる頃、誰かが蜂蜜を食べている。決して間違ひではないと思うが、それは極論だ。一般論には程遠い。

誰かが泥水を飲んでいる頃、誰かが次の泥水を用意する。それが人間の循環の仕組みであり、これこそが真理だと彼は思っている。穢れ役ではあるが、銀色の彼は後者を全うしようと考えていた。

ここで劇を繰り広げる役者が泥水を飲んでいる頃、自分は次の舞台を整える。

「……くくつ」

思わず口から嘲笑が漏れる。我ながら良い表現だと酔つていた。

泥水を飲む側は勿論泥水を飲む。ここで、後者が蜂蜜を食べる人間ならそこで終わりだ。だが後者が泥水を用意する人間なら、『泥水を用意する側が泥水を飲まない』という理論は成立しない。上に立つ人間には責任がある。下つ端の犯した罪を擦り付けられなればならない。だが、その場合罪を犯した下つ端に罰を与えるのは被害者ではなく自分。そうして人間は循環していく。

「結局それじゃあ、終わりなんてこないんじゃないかな」

しかし、異分子がそこに紛れ込んだとしたらどうだらうか。例えば、『泥水を綺麗にしてくれる人間』がいたらどうだらうか。循環は変わらないかもしね。だが、下にいる人間は少なくとも幸せになれるだらう。

そんなことを許す、泥水を用意する人間がいるだらうか。有り得なかつた。穢れと辛さと苦しさを提供する側が下つ端に休息を与えるはずが無い。だから銀色の彼は、叱咤されぬように用意を整える。恐らくは劇中で最も余裕があるのは自分だらうかい。安寧を司る人間が、安寧な世界に住んでいるとは限らないのだ。

「本当に苦労人だよ、僕らは……」

春先なのに風が冷たかつた。それに銀色の男は顔を滲らせ、ゆつくつとその場から足を動かした。

電車を乗り継いで数十分、案の定成田空港の前で待ち構えていたのは灰田純一だった。既に日は落ちかけていて、暁光が銀色の髪を照らすその様子がいやに映えていて少し苛立ちながらも灰田に話しかけると、彼は場所をここに指定したのはただの気まぐれだとふざけたことを言つて、現在近くのファミリーレストランにてドリンクバー耐久戦をしている最中であった。

「いや、思つんだけれどね、ドリンクバーって単体は高いじゃないか。そんなことをするよりも一百円程度のポテトでも頼んでセットにしてもうつたほうが気分的に得するんじゃないかと毎度思うんだよね」

「だったら頼めばいいじゃない」

「実は言つとポテトアレルギーなんだ、僕」

「…………」

実際にふざけた男だということは、全く変わらないようだった。平日夕方のファミリーレストランはつい最近まで通つていたマクドナルドと違つて相当に空いていた。ちょうど学校から帰つたばかりの学生がちらほらと、他は井戸端会議の場所を変えただけの奥様方の集まりだった。夜になれば忙しなく鳴るインターフォンの音も全く聞こえない。正直な話、自分がここにいる理由が段々と分からなくなってきた。

「用事があるならさつさと言ひなさいよ。私、そんなに暇じゃないのよ？」
「ほつ、宿題でもしていたのかい？」

私はそのおどけた態度にカチンときて、思いつきつ睨みつけて言った。

「白椿さんが病氣で倒れたのよ。それを看てる時に呼び出して、ただの暇つぶしなんて言つたら怒るわよ?」

「……彼女は今寝ているといふことかい?」

「ええ。つて言つても、どうせもうすぐ起きるだらうから書置き残したけど」

「ああ、ならいいや。彼女にも動いてもらわないとけなくなりそうだし」

「……はい?」

不可解な言葉を発したあと、灰田がニヤリと笑う。

「ところで、君、そんな状態の彼女を置いて何故僕のところに着なんだい? 別に僕の言葉なんて放つておけばいいものを、わざわざ律儀にここまで来るなんてぞ」

「それは……」

何故かと聞かれれば、それは電話の内容があまりにもゲーム染みていたために、ただ事ではないと判断したからに違いないが、ここまで淡白に質問をされるとそう思つていた自分が突然馬鹿らしく思えてきて、それを口に出来なかつた。

それを悟ったのか、灰田が耐えるように声を漏らし、一度飲み物を飲んでからこちらを頬杖をついて見てきた。

「分かつてゐるさ。僕が、僕らが普通じゃないことに君は気が付いている。だから放つておけなかつた。ふふつ、それで君は、『その事実を聞かされた』彼女と、いつまでもんな茶番を続ける気だい?」

「茶番?」

「さう、茶番。それともなんだ、君は本当に彼女のことを擁護するくらいの友人だと思っているのか？」

「……」

またも答えられない。決して虚偽で白椿さんと付き合っているわけではないのだが、彼の表現は実に的を射ている。いくらなんでも一日や二日で守つてやるほど世話を仲にはなれるわけがないのだ。例えどれだけ自分で友達を反芻して洗脳しようとも、私には彼女を擁護しなければならない理由が全く存在しない。だがそれでも私が彼女と関り続ける理由は恐らくある。

「あなたは、何かを勘違いしているよ！」

しつかりと噛み締めるよつて言つて。それを灰田が興味津々そうに耳を傾ける。

「誰かを、誰かと関る、守ることに理由なんて必要ないわ。その場の感情よ。それが続いているのは別にそれを私が拒絶していないだけの話」

「ならば理由があれば拒絶するのか」

突如、灰田のやけに澄んだ瞳がこちらに向けられる。覗き込まれるような、試されるような視線に思わずたじろぐ。

「面白いね、本当に面白すぎるよ、『優等生』。君がどれだけそれを気取るひと、どんなに取り繕おうと六がどんどん見つかる。ねえ、あの時は聞きそびれてしまつたが、君にとつての優等生とはどんな意味合いを持つていいんだい？」

あの時がいつを指し示すのか記憶に無いが、前回の『天才とは如

何なるものか』といふ問いを思い出し、この男の考えを計らうとしたが蛇足だった。はあ、とため息を吐いて、面倒くさそうに私は肘を机に付いた。

「それを知つてどうなるのよ。あんた、小説家じゃないんだから遠まわしな表現は止めなさいよ。結局何が知りたいわけ?」「何を知りたいか、か。実に良い問い合わせだよ。『今日の夕ご飯は何だ?』と問われたところで意味合いを全く感じないが、『間食を取るか取らないか』を先に提示しておけば、料理を作る側は答える理由が発生する。聰明だねえ、君は」

「別にそこまで深い意味で言つたわけじゃないわ。前は調子が悪かつたからノリで天才がどうのこつて答えちゃつたけど、もうあんたの話は飛躍しすぎて付いていけないわ」

「あの時はノリだつたのかあ、それは損な事をした。あの時に同じく聞いておけばよかつたのか。まあ、僕が何を知りたいかつて、言うまでも無く君が知りたいのさ」

その気持ちの悪い台詞をさらつと言つてのけた彼を一瞥し、あからさまに嫌そうな顔で私は尋ねる。

「……何、私に氣でもあるの?」

「そうだね、君の事は嫌いじゃない」

「ちなみに私はあんたは大嫌いよ。心の底からね」

「ははつ、分かっているさ。僕は誰からも好かれないと性格をしているからね」

自嘲したような笑いに私は目を細めた。まさか自分からそういう事情を話すとは思いもよらず、どう反応したものかと答えに窮した。灰田はそんな私を放置して、勝手に話を進める。

「白椿菊乃から何を聞いた？」

極力優しげにそう聞いてきたが、内心ワクワクしている様子が垣間見れる。そんなにも知られて良いことなのかどうなのかは当本人たちで無ければ分からぬことではあるが、白椿さんから聞いた『傘下三家』の話題はそれほど穏やかなものではない。それに灰田が関つてはいるという確かな確証が私にはあるし、恐らく灰田は私がそれに気付いていることに気付いている。故にこんな質問を投げかけてきたのだろうが、彼はまさに小悪魔のような表情を浮かべて私の答えを待つてはいる。何が面白いのか全く察せ無い。私は正直に腹を割ることにした。

終始興味津々そうに私の話を聞き、『浄化』云々の話が出たところで待つたをかけられた。

「君はその浄化について、何を思う」

白椿家における役割での『浄化』とは、昔はどうだつたか私の知りえるところではないが、現在は殺人を犯すことによる『人の浄化』であるらしい。理論は通つてはいるとは思う。人の心から悪を取り除くには、『黒を白』にするよか『黒を削り取る』ほうが楽に決まつてゐるし、そちらのほうが確実性は激しく高い。……が、これは極端な『色を使った例』の話であつて、人の世の中で道徳という言葉が存在する限りはどんな事情があれども許される行為では無いし、認めて良い事象では決して無い。

だが、ここで主觀論を押し付けていても何ら解決にはならないことを私は知つてはいる。人の思いには必ずそれに相反する答えがあり、そしてそれを理解しあうには互いの立場で考えることが必要である。とは言え、私が實際白椿家の立場で考えてみたところで答えはやはり見つからず、『自重していればいい』なんていい加減な答えしか用意することが出来ない。一体どれだけの葛藤が彼女らにあつた

のか想像も付かない。

「だからこそ、私にはそれに対する意見を発言する資格を持てないわ」

「しかしそれでは彼女を救えない。彼女の家を説得できない。すれば、殺戮は続くよ?」

「……まず、彼女の家が何故『浄化』なんでものをしなければならないのか分からぬ。それが判明すれば少しは」

「解決の糸口が見えると?」

「……かもしれない」

灰田はふうん、と然程納得したようにも思えない声を出して、残りの飲み物を啜つた。そして、わざとらしく音を立ててコップを置く。

「独り言のように聞き流せ」

命令口調で私にそう言ひつ彼の顔は一変して真剣なものになる。それに曖昧に頷いた。

「人の世界は基本的に『悪』『善』『中立』『異端』によって構成されている。でも、『中立』以外のどれもが度合いを超えると世界にとって許容出来ないほどの『異分子』^{イレギュラー}に成り代わってしまう。異端は元々許容出来る限界の位置にあるけどね。するとその度合いを超えた人間はどうなるか、答えは簡単だ。『孤立する』」

「……孤立……」

「そう、完全な孤立だ。一見して誰かに關っているように見えるのは間違いだ、それは上辺だけか、関つた人間 자체も度を越えているかの一択しか有り得ない。そして孤立とは、みんなが言うほど寂しい、という感情に近いものではないんだ。『一人であること』は、

つまり『自分の全行動権が自信に委託されている』ことに他ならぬ。するとどうなるか……」

噛み締める言葉に私は必死に声を絞り出す。

「歯止めが、利かない?」

灰田は満足そうにそれに頷いた。

「孤立すると行動に対し歯止めが利かなくなり、自分では何でも出来るんだと、勘違いを生む」

「ま、待つて。でも、実際には孤立してる人は人に出来るだけ干渉しないような生き方とかをしてるんじゃないの? いじめられっ子とか、静かな子くらいしかいないでしょ?」

「まずその考え方を正したほうが良い。『物理的な孤立と精神的な孤立』は大きく違えるし、いじめられっ子は単なる『逃避』でしかない。人が一般的に使う孤立は逃避なんだよ。孤立はそんな生易しいものじゃない」

今度ばかりは極論だと片付けられない。彼の言葉どんどん紡がれていく。

「僕らは、そんな孤立のために生きる存在なんだ。類は友を呼ぶ、だが、その類が少なければ友は呼べない。だから集める」

「つまり、最初の話に戻れば、白樺さんの家はそういう仕事の環境で『浄化』を行っている、と?」

だが、それに灰田は数秒黙り込んで、静かに首を横に振った。

「彼らの浄化はもっと宗教的なものだった、うん、『だった』。知

つていいかい？人の悩みを背負う人間は、強くなれば、『感染する』ということをする

「感情移入ってやつね」

「その通り。白椿の家はそれで勝手に自滅したのさ。自意識過剰、被害妄想と言つべきかな、彼らは自分のことをどんでもない孤独野郎と勘違いしているのさ」

他人を評価することは、如何なる場合においても自分を見直すと、いう行動に意思とは関係なく直結する。故に、相手のダメな部分を見つけると、自分にもそれが無いかと見直してしまうことが多い。するとそのうちに『感染』していき、まさに自分が被害者ではないだろうかという錯覚に駆られる。

「元々『白の世界』は人口が圧倒的に少ない。完全善人なんてものは存在するわけが無いからね。だからこそ、彼らの仲間は基本的に少数で、ゆえにそんな被害妄想が生まれたのさ」

「待つて、それと殺戮の何の関係が……」

「 考えろよ」

何の遠慮も無くそう吐きかける。しかし、考えろと言われても殺戮と孤独がどう繋がるかなど思考のしようが無い。私が頭を抱えていると、彼は人差し指を立てて言つ。

「彼らは仲間が欲しいんだ。でも、普通のやり方じゃ出来ない」

その言葉に気付き、私はゆっくりと頭を上げる。

「まさか……『殺した人間が仲間』だとでも言つの？」

有り得ない。有り得るわけが無い。そんなおかしな性癖を持った

人間でもあるまいし、まずそんな思考に陥る時点で病んでいる。だが、話の展開から考えるに、彼ら白椿家は『殺すことによる浄化、黒を白にする』といったのをふまえれば容易に想像できる。

「前に、三人の天下人の話をしたね。そして僕はこいつ宣言した。『織田に勝利は有り得ない』と」

「……」

「当てはめろよ、白、黒、灰と、織田、豊臣、徳川。まさに人の成長と同じじゃないか。黒を知らない無垢な子供は真っ白のままだが、成長過程で突如黒くなる。そして、死に際に初めて人は白さを思い出す。『確立』『発展』『安泰』。そして織田は、ホトトギスの句で短気さを詠まっていた。白椿をそこに当てはめるならば、彼らもまた、急いで手段を選ばなかつた。ただ一つ違うのは、それが成功したか否かのところだね。ああ、あとは別に彼らが基盤つてわけじやないつてところか。僕らはそれぞれに役目があるからね、比喩としては失敗だつたかな」

自分のミスを嘲笑う。

だが、私はそこで冷静に、そんなことはどうでもいいけどと前置きして言つた。

「白椿さんを、救う方法はそれから導き出せるわけ？」

「無理だね」

「随分はつきり言つじやない。なら、どうじゅうてこいつのよ

灰田はふと、窓の外を眺めた。

「成田空港に、何の意味も無く呼び出したと思つかい」

「……何があるのよ」

「今回、舞台に立つたのは僕でも君でもない。彼らの、彼らだけの

因果だ。今日は観客として見届けてあげようじゃないか」

私も窓の外を眺める。珍しく、今日は飛行機の強烈な響きが耳に入らなかつた。

21・着信メロディ

「……あれ？」

白椿菊乃は眩しい夕暮れの光に目覚めを強制され、間抜けな声を一人あげた。オレンジ色に照らされた部屋の中には白椿以外の人はおらず、ここはどこだろうかと、白椿は辺りを見回したが場所に覚えが無い。丁寧にベッドに寝かせてあるのだから、誰かがここに運んできてくれたのだろうと思った。

無言で記憶を巡つてみると、自分が自らの敬愛する先輩の目の前で倒れたことを思い出した。

「……そっか、あたし、話しちゃったんだよね」

真実を打ち明ける覚悟を決めるのは相当に苦労を要していた。他人に話してはならないという決まりは無いにしろ、こんな荒唐無稽な話を誰が信じるのだろうか。白椿は以前に住人足らずに話したことがあったが、勿論信用などされず、漫画の読みすぎだとか、被害妄想だとか言われる覚えの無い言葉を吐きかけられていた。故に、彼女はそれから心を開き、上辺だけの生活を余儀なくされていた。

彼女の敬愛する人物は最初、やはり彼女にとつては取るに足らない存在だった。人間味というのか、白椿は孤独を生み出しつつも決して人としての生活態度を変えなかつたために礼は尽くさねばと思いつたのが、全ての始まり。まさか、その道の先に『灰田』の当主がいるとは誰に予想がついたどうか。

彼女にとつて灰田とは、『因果の先』の人物であり、決してそのままで出会うことが出来ない遠い人であった。だから、先輩を追つていつた際に出会つた瞬間には思わず足を杭で打たれたような衝

撃に駆られていたものだった。あの人ならば、灰田と繋がる彼女ならば自分を理解してくれるのではないだろうかと、その時はまだ淡い期待を寄せたものだった。

次いでそれが完全な期待となつたのが、黒住との邂逅。彼は灰田に比べれば全然出会つても不思議ではないが、それでも『傘下』のものが出来くわすというのは珍しい話であった。本来名を名乗らなければ、彼が自らこちらに接触してきたのは白椿を知っていたからに違ひ無さそうであつたが、無論彼女には覚えが無い。聞いた話によれば、黒住の家は世代交代を果たしたのは良いが、それがかなり不完全であつたために関りという関わりが宗家から消えうせていたということらしいのだが、白椿自身、黒住儀軋が不完全な『悪意』だとは思えなかつた。

何にせよ、敬愛する彼女から全ての因果が繋がつたことは否定の仕様が無い事実であり、彼女にとつての希望であつた。

白椿はベッドから重い身体を起こして床に足を付いた。フローリングの冷たさが染みる。思わず白椿は顔をしかめた。

その視線の先に一枚の紙を見つけた。どうやら先輩が残してくれた置手紙のようだつた。彼女はそれを手にとつて、整つている字を流し読みする。

「……出かけたんだ」

内容はいたつて簡潔に、流し読みするほどの量の無い文章だつた。ただ一言、『出かけてくる』『薬を帰りに買ってくるから待つていろ』というものだつた。言われた通りに待つていようと思い、白椿は先ほどまで入つていたために無駄に温まつてゐる布団に腰掛ける。そして、その横に設置してあつたテレビのスイッチをおもむろに押した。小づるさいノイズ音の後に、ニュース番組が流れる。

『昨晚の連續殺人事件の……』

「……うう」

そのワードを耳にしただけで頭痛が走る。白椿は頭を抱えて、急いでテレビのスイッチを切つた。

昨晚、先輩との会食を終えたあとに家に帰れば、それは悪夢の巣窟だった。血みどろになった戦闘着を脱ぎ捨てて、どこから密輸してきたのかも分からない拳銃に新しく弾を詰める両親。帰ってきた白椿に対して、無感情にかける声はその時彼女に耳には入っていかつた。ただ、今まで見なかつた部分を見てしまった、裏切りと後悔と憤慨の感情が渦巻いて、脳みそが潰されたように思考回路が完全にシャットアウトしていたのだ。

昔から彼女の両親が危うい仕事をしていることは彼女自身感づいていた。白椿の家の『浄化』についての話を聞いたのはつい最近で、その晩の殺戮は彼女に見せる予定でいたらしい。それが現実だつたらと思うと、息苦しくなるのを感じる。この苦しみを誰かに知つてもらおうとしたところで、先ほどの反応が返つてくるだけの話。それでも両親の命令から、他人との関係は出来るだけ上辺だけにしろといふものでろくに普通の生活を送れていなかつたというのに、この始末はどうだらうかと、自問自答して絶望に叩き落されたことが何度あつたか数え切れない。

両親は一度、心の無い目でこいつ白椿に語つたことがある。

『私たちは酷く孤独で、だから友達を作らなければならないんだが、しかし、私たちは普通の人間と同じように生活出来ないからそれが適叶わない』

そのオチはとっくについていた。ただ単に、自分で自分を檻に閉じ込めていただけ。白椿菊乃自身は自分が孤独なのは、そういうた理由からでは無いと確信があった。

先代、先々代かもしない。白椿の家の『浄化』とやらの方法が変わったのは、その文献を読んだときに彼女の感情は怒り一色になつていた。理不尽で、わがままを極めたような結論がそこには記されていた。つまりを解釈するとこうなる。

その頃の白椿当主は心を病んでいて、今までの祈祷による浄化は『悪を自らに移す穢れた行為』なのだと豪語し、さらにはその当主が病んでいく様を見守つていた親類たちがそれに納得した。その後、幾重にもなる会議の結果で出されたのは、『人を真っ白に、自分たちと同じようにすることなど不可能だ』という諦観の結末だった。

しかしながら中、一人の白椿の人間がそれは違うと大きく反論に出た。彼は靈能力があり、現当主が何かに取り付かれていることを悟っていたのだ。だが、彼がその事實を打ち明ける前に当主は一つの村を滅ぼした。理不尽すぎる殺戮に殺された靈たちは白椿の家を呪つた。その呪いを一身に受けた当主はすぐに病の床につき、数日と足らずに命を落とした。

その呪いは收まる事を知らず、靈能力を携えていた彼すらもその毒牙にかけた。すると、彼自身もその呪いの所在で精神を病み、ついには彼も村一つを滅ぼしに行くという予想だに出来ない事故が発生したのだ。

その連鎖を繰り返すうちに彼らは『殺戮こそが、人間の靈こそが我らの味方』なのだと代々に勘違いを生んだまま繼がれていき、その基盤が完成してしまったのだ。

彼らは殺戮を犯したその三日前後で当主が逝くことから、『自己殺害』、自らを生贊に捧ぐことで、人々を浄化するのだという極論に走ることとなり、現在に至る。

「殺すことが、死ぬことがあたしたたちの幸せ……」

その言葉を一体何度も反芻せられたか、考えようとする」とすら
蛇足。

彼女がその晩、絶望したのは他でも無いその任を実行してしまった両親に対してであり、そして何よりもその間違いを正せなかつた自分にあつた。一足遅かつたのだ、気付いたときには全てが終わつていた。自らも受けっていた呪いは、そう簡単には祓えなかつたのだ。彼女は必死に考えをめぐらせていた。白椿の本当の『浄化』とは何なのか、そしてそれが必要である理由とは何なのか。だが、結局はその答えは出ないまま、世代交代が始まることとなる。白椿菊乃の両親は、近日命を終える。

「……せめて、あたしが結婚してからにじりつて話」

と、その時だつた。

自分のズボンのポケットに入つていていた携帯から流行の音楽のメロディーが流れ出した。メールではなく、電話の着信だとそれで判断する。先輩からだらうかと思い手に取るが、ディスプレイに表示されている番号は知らないものだった。不審に思いながらも、それに

出る。

「……」

あえて、相手の声が聞こえるまで黙る。すると、向こうから声が飛んでくる。

「

「……え？」

『

白椿の表情が凍りつく。絶句し、その声に全神経を集中して一語を脳に浸透させていく。

聞きなれた声。誰のものなのかなど判断する時間を要さない。そこから聞こえてくる声に白椿菊乃はゆっくりと何度も頷いた。……と、何かを言った瞬間に電話が切れた。

「ちよ、ちよっとー。」

急いで叫んでみるが、残ったのは切れた電話が鳴る音だけだった。しかしそこからの白椿の行動は早かつた。置手紙に一度謝るようの一礼して、部屋を駆け足で飛び出して行つた。

行き先は、成田空港。

白椿菊乃が家を飛び出してちょうど三十分経った辺り、成田空港では相変わらず黒住が腕を組んでそこに立ちつくしていた。だが、今回は状況が違つた。

黒住儀軋の目の前には一組の男女ががたいの良い男に組み伏せられていた。両手両足を縛っているにも関わらずそこまでしなければならないのには相応の理由がある。以前、自分の師は彼らを甘く見ていたが故に命を落としたのだ。良く知るその顔はその状況でお、全く焦りを見せていない。それどころか笑みまで浮かべて、黒住を睨みつけていた。

男のほうも女のほうも真っ黒なタイツ、それも映画で登場するような戦闘員が着用しているものを身に付け、腰には日本では滅多にお目にかかるない本物の銃器が提げられていた。鉄の色をしたそれは黒住の手によつて一発だけ銃弾が込められている。

男のほうが苦い表情で口を開いた。

「ふん、先代の黒住もそつだつたが、慢心するのは良くないと思つがね。私の身のこなしの良さは君も良く知つているだろう? その気になればこの男たちを逆に組み伏せることが出来るのだぞ?」

それでも自信は保つてゐるのだろう。その言葉には嘘は含まれていないようすに黒住には聞こえるし、黒住自身が男の能力の高さを良く知つてゐるが故に否定など出来るはずが無い。

彼は決して慢心しているわけではなかつた。

一発の銃弾。これがそこにあるか否かで状況というのは豹変するものだ。銃弾の込められていない銃器など所詮は鈍器と化すのみ。だが、こうして一発でも残つていればそれを所持する側としてはチャンスを与えたと同じことである。一瞬の時間さえ奪えれば、

腰から銃器を引き抜いて黒住の心臓を貫くことなど毛頭も無いことだろう。

しかし、逆に一発しか込められないという強迫観念に似た緊張が男女を襲っているのも確かに話である。それゆえに、彼らは自信は持つても確信を持つことが出来ないでいた。どうやってもその一撃を外してしまえば、あとは数で押さえ込まれるに違いないからだ。

彼らは黒住の『構造^{システム}』をよく理解する人物であった。つまりところ、黒住には他の傘下の家と違つて組織が存在するということである。『人を黒く染める』という行為は人間の世界の中では胡坐をかいたまでも可能な行為であつて、老若男女一つの差異も無く、権力、財力共にある黒住にとつては本当に楽な仕事であつた。だから黒住は自分と同じ族を増やし続け、いつしか一つの組織として成り立つようになつてゐる。

男にはそんな黒住に敵意をむき出しにしていると同時に、羨む気持ちが少なくとも存在していた。自分たちは夫婦で、たつた一人で仕事をこなしているといふのに、彼は自宅の居間でテレビを見ているだけで全てが完了してしまうのだ。

だから男と女は、数年前に黒住を殺害した。黒住はその二人に言う。

「俺の行動の全てには、悪意が含まれている」

それに男は鼻で笑つた。

「はつ、馬鹿を言え。そつして君の師も命を落としたことを忘れたのか？ そうだろう？ 黒住儀軋君」

「その通りだ白椿。俺の師は今と全く同じ状況にて命を落とした」

「ほつ、この演出は君のせめてものがきか？ 敵を取る、なんて馬鹿らしい行為は黒住には似合わないぞ」

「敵を取る？ ふん、貴様こそ馬鹿なことを言つた。この状況は單なる再現であつて、それ以上の意味も無い。ただ、貴様らが死ぬ時期を違えただけの話だ」

「……」

男女の性は『白椿』と言う。彼らこそが白椿菊乃の両親であり、二日前の大量殺人を犯した犯罪者であった。昨晩まで証拠一つ残さない逃走劇を繰り広げていたが、黒住の『勘』によつて遭えなく包围されたのだつた。

もはや黒住が白椿に向ける感情は、良く言えば恋する乙女のようで、悪く言えばキャリアを持つ刑事のようだつた。それを逃がさんとする思いは、こうして形となつて顕現した。

長い、とても長い道のりであった。数年前に師を殺されてから黒住は白椿を探すために都内に留まらず、全国を駆け回つたが一向に見つかる気配は無く、ちょうど一年ほど経つた時に、初めて自分が『黒住』であつたことに気が付き、同時に相手が『白椿』だということを認識した。

白椿の『自己殺害』は調べれば簡単なことであつた。大量殺戮をし、その後自害する。つまり、黒住が追わなければならぬのは『殺人事件だつた』。今だ白椿が死んだという情報は彼に入つていなかつたので、つまり生きている、つまり人を殺す、つまりそれを追えば、必ず出くわすと信じていた。

「そついえば、私たちの娘が少しだけ世話になつたそつじやないか？」

相変わらずの余裕の表情で突然男がそう言った。

「何故知つてゐる。俺が彼女と対面したのは一週間も無い前のことだぞ」

「なあに、娘から直接聞いたのさ、黒住が私たちの事を追つてゐる

とね

「ほう、貴様らまだ娘と連絡を取り続けていたのか。俺はてつきり勘当したとでも思つていたが……」

「ははっ、腐つても私の可愛い娘だよ。それに、私たちが死ねば彼女に呪いが受け継がれる。放つておくわけにもいかないだろう。それは君も知つているはずだ」

「呪い、か

噛み締めるよつてその言葉を口にする。吐き氣がするよつた言葉だつた。元々黒住は靈や呪詛などといった類のものを信じる性質ではなかつたが、それでも『白椿の呪い』は郡を抜いて嫌な響きがある。

完全に、破綻しているのだ。

「灰田の家は、『自己崩壊』。貴様の家が『自己殺害』と、自らに課せられた呪いを名付けるならば、俺の黒住は『自己破壊』に他ならない」

「……ほつ」

黒住が唐突に咳いたことに興味を寄せるよつに男は相槌を入れる。

「なあ、俺たちは似ていると思わないか

ミラーサングラスの奥が妖しく動いたような気が男にはした。

「俺の仕事は完全なる悪だ。やらなければならぬと判断したら、貴様らのように殺生すらも躊躇えない。世界に蔓延る『出来すぎた善』を破壊するために、『自らも破壊しなければならない』といつ、この合致。出来すぎだとは思わないか」

白椿の『自己殺害』は、『出来すぎた悪を殺すために、自らも殺さなければならぬ』という結論が存在している。とは言え、既に破綻した白椿はもはや相手が悪なのかどうなのかという判断すら出来なくなっているが。

だがそれはおかしい。本来黒住と白椿の行為は真逆であるはずなのだ。確かに行為 자체を見れば、ただ対象が違うだけの更正ではある。だが、たとえば害虫を殺すことと人を殺すことは動詞は同じであっても対象が違うだけでこれほどまでに意味合いの差異が発生する。つまりはそういうことであった。

「もう何年も前からのことだが、何故貴様らは自分たちが破綻していることに気付かない。人を殺すことによる救済？ 奇麗事すら通用しないだろ？」

「…………」

男女は長い間黙る。彼らも人間であつて、化け物ではなのだ。自分たちがしている行為の悪性を理解しているはずなのだ。

「私たちはね」

同じ一人称で、女のほうが今まで閉ざしていた重い口を開いた。

「私たちの仕事はね、あんたみたいな時代の最中で出来るようなものじゃないのよ。宗教？ そんなもので現代の人間の心が改心されると思う？ 無理よ、絶対に無理。けれども私たちは仲間を作らなきゃいけない、仕事を完遂させなければいけない。でもどんどんどんどん下に落ちていくだけ。だから、強攻策に出なきゃいけなかつた」

それが、先代よりずっと受け継がれてきた『呪い』を受け入れる

ことだつた。無論、彼らも自分たちが誤つたことをしているということは百も承知の上で、だが、それでもそれを受け入れることこそが自らの幸せへの道だと信じて疑わなかつたのだ。

「貴方には分からないでしよう? 組織を作つて、仲間だらけの貴方には、私たちの、何をどうしたつて孤独なままでしかいられない白椿の気持ちは」

「ふん、妬みか?」

「そう取られても仕方が無いくらいに、こつちは悲惨つてことよ。誰も改心させることなんで出来ない。かと言つてね、殺したつてどうせ孤独なんだけど」

「ならば何故殺す?」

「それがしきたりだからよ。どうせどうしたつて孤独なら、最後の賭けに出てみたいじゃない。灰田みたいな特異現象が、私たちにもあるかもしれないんだから」

「……完全に履き違えているな」

「……何?」

男のほうもその言葉には怪訝な顔をした。黒住はサングラスを外し、胸ポケットに入れた。意外にも澄んだ目が、二人を捉えた。

「先の話に戻るが、貴様らの娘、白椿菊乃と対面したとき、俺は正直その苗字を疑つた」

「何故?」

男のほうがそう問う。

「何故? 今貴様は何故と聞いたか? ふざけるのも大概にしろ、自分の娘を見て、自分と同じだと思うのか?」

「…………」

「俺は貴様らを捕らえるために数々のことを学んだ。有り得ないほどの情報量と、有り得ない伝承の数々だ。まず一つ、俺たち傘下の家人間は全て、近親相姦によつて子が作られている。当然だろうな、こんな腐つた家に誰が入りたいと思う。血を濃くするという意味合い以前に、普通の人間の配偶者など出会えるはずがない。

次いで傘下の家人間は基本的に罰せられない。それは何故か、簡単なことだ。人とかかわりを一切合切持たないがために、『その存在が世界に認められていないから』だ。故に傘下の人間は孤独をその身全てに抱えている。存在が認められるのは各世界のみ、つまり貴様らの場合は、『白の世界の住民』のみとコミュニケーションが取れるわけだ。ああいや、傘下の人間同士も可能だつたか

他人と関れないこと。それが枷だつた。だが黒住にはその気持ちは分からぬ。

「ともかく、奴はどう考へても貴様らに似ていない。近親相姦によつて生まれたのならば遺伝子は完全に白椿だ。それに加えて、奴は一般人と会話をしていた」

「……なんだと？」

男は本当に驚いた表情を見せる。それは黒住にとつては驚くべき出来事ではない。実際に白椿菊乃があの先輩と呼ぶ人物と会話しているところ見た時は、黒住自身驚きを隠せなかつたのだ。孤立を喰つて生きているような白椿が他人と楽しそうに会話をしている場面など、まさか有り得よつとは思いもよらなかつたのだ。

「残念ながら冗談ではない。どこの誰か知らないが、なかなかに聰明な女だつたな」

「馬鹿な……。君の推理は最もであるとは思うが、菊乃は私たちの娘で間違ひない。白椿なのだ。なのに、何故……？」

言いつけでもあり呪いでもあった孤立は間違いなく菊乃にもあつたはずであった。家に友人を連れてきたことは勿論、浮いた話など欠片も無く、いつも暗い顔で日々を過ごしてきたはずの彼女が、誰かと関ることなど有り得ないことだった。

孤立とは、孤独とは違つ。

孤独は人の世界に良くあることだ。人との関わりが薄いだけで、基本的には友達と呼べるような人物はいるだろう。しかし孤立とは、世界と切り離されたことを言う。切り離された世界では常に一人、白椿はまさにその世界に住む人間だったのだ。

たつた、たつた一つの答えが存在すると思いません？

声がした。

黒住は声がしたほう、捕らえられている白椿の向こう側を見た。声の持ち主は、長い黒髪を風に纏引かせ、自分の見ている光景に何かを見ていた。

「黒住さんは言いました。履き違えてるって

「……」

「あたしたちはどうしたって孤独。 いいえ、孤立してたんですね。 それじゃあどうしたって友達なんか出来るわけないじゃないですか、因果ですよ因果」

「何故、貴様がここに……」

黒住は苦い顔をする。予定外だつた。彼女がここにいることは、黒住にとつては最悪のシチュエーションだつた。そんな黒住を完全に無視し、彼女は続ける。

「元からあたしたちの周りには何も無かつた。なら、どうすればあ

たしは孤独で無くなるのか。簡単じゃないですか、『同じく孤立した人を探せば良い』

白椿菊乃は、どうしてか涙を浮かべていた。

すべての人間がその存在に首をかしげ、唇を噛んでいた。白椿菊乃はその中で威風堂々と親の前まで歩み寄ってきた。そして黒住を一瞥する。その視線に威圧を感じた黒住は小さく舌打ちし、白椿夫妻を取り押さえていた男たちを撤去させ、三人から距離を取つた。ここからは自分の出番ではないと悟つた。

菊乃はそれを確認すると両親に向かつて静かに頭を下げた。

「お久しぶりです。お母さん、お父さん」

それを聞いて夫妻は面を食らつた。

「お前、その呼び名は
「黙つてください」

菊乃は凛としていた。もはやここに怖れるものなど何も無いといふように、誰の言葉行動にも微動だにしなかつた。その眼は自分の愛すべき憎き両親に常に向けて、ただつらつらと言葉を並べるように語る。

「あたしたちは、結局何がしたかったんでしょうかね。他人の命を奪つて、それで自己満足して、実はだからといって何も無いことを悟つていて、それでも止めずに人を殺して。それで、結局何を得たんでしょうかね？」

菊乃は自分のすべてに疑問を持っていた。何故自分がここにいるのか、何故自分がこのようなことをしなければならないのか、理不^ふの中に立ちつくして、何も出来ずにもがいていた自分は何だった

のか。それは、たった一つの堤防で抑えられていただけだった。

文献を読んだ。眞実が砂のように転がっていた。それでも彼女は両親を信じ続けた。それは、それでも彼らは家族であつて、自分に正しい道を示してくれるものだと信じて、運命に身を任せていたからだ。しかし、彼女にとつての堤防は昨晩の血みどろの彼らの姿で、崩れさつた理想に現実が押し込み、あつという間に彼女の心は荒んだ。

一番信頼できる、たつた一人の友人の元に駆けつけた。彼女は、とても優しく、そしていつでも眞実だけを見て伝えてくれる人だつた。菊乃はそんな彼女に泣きついで、胸のうちを語った。それが、最後だつた。

「昨日の夜、何があつたんですか？」

突き放す口調で菊乃は目の前の男女に声をかけた。もはや彼女の 中で、二人はだたの男と女でしかなかつた。

「お前なら理解してくれるだろう。白椿のしきたりだ。呪いを解くために、私たちの味方を作るために、沢山の人を浄化してきたのだ」「そうよ菊乃。昨日は貴方にも見せようと思ったのだけど、ごめんなさいね。どこかに行つてみたみたいだから……それを怒つてるなら」

「黙れって言つてんぢろが……」

瞬間だつた。菊乃の声が荒くなつた。

「御託をぐだぐだぐだ言いやがつてさあ、あたしはそんなの聞きたいつて言つてるんぢやないつて知つてんぢろ？ あたしはね、怒つてるんぢやないんですよ。泣いてるんですよ。自分の、じ、自分の両親が、帰つてきたら、血みどろですよ？」

声に嗚咽が混じり始めて止まらなくなる。けれども、決して涙は流さず、表情は怒りに震えたままだ。

「想像出来ますか、ね？　ああ、貴方たちは見てるんですね、先代の人には……うつ……。でも、でもですね、あたしは普通の女の子なんですよ？　じ、自分で言つのもなんんですけど、これでも、親のことは慕つて……っ」

黒住が後ろからもう良い、と菊乃の肩を叩く。慈愛に満ちたものだった。菊乃はギリッと音が鳴るほどに歯を食いしばり、両親に背を向けた。酷く孤独な背中だと黒住はそれを見て思う。嗚咽に震える肩は、それに泣く子どものようだった。その後も支離滅裂な言葉で誰を攻めるわけでもなく、ぽろぽろと涙を零す代わりに両親に向かつて何かをぶつけていた。不満にも聞こえるし、文句にも聞こえる。だが、黒住にはそれが泣き言にしか聞こえない。目の前にいる当の両親は、その必死の訴えを聞いてもいなかつたからだ。

歯が音を立てたのは黒住のほうだった。家族というものから長らく離れていた彼にとってもこの光景は理解しがたいものだった。子が訴え、親は自分のことで精一杯でそれを聞きもしない。酷いのは、世界のシステムだけではなかつたようだ。白椿夫妻 자체が狂つていた。

「何を……しているんだ。貴様らは」

声を怒りの中から絞り出す。その声に夫妻は顔を始めて上げた。

「貴様らの娘が、こうしてここに来て、貴様らに言いたいことがあると言つていいのだぞ？　それを何故聞かない、何故受け止めようとしない？」

「な、私たちには聞いているぞ」

「ほざくな。脱出経路を調べていたのだろ？ 眼が泳ぎまくりだ。
じつとしていれば逃がすから、今は彼女の言葉を聞け」

「へへ……。黒住の言つことなど信じれるわけが無いだろ？」

黒住は一度ため息し、言つた。

「なら今一度言おう。俺の発言に嘘はないが、主に悪意で出来ている」

「……本当だな？」

「ああ」

「……良いだろ？ どれ、菊乃、話してみなさい」

そう夫の方が菊乃に言つ。が、彼女は全く振り向くそぶりを見せずにこうなだれています。

「へへへ」

その彼女から自嘲するような声がした。事実笑つてているのだろ？ 肩がかすかに上下していた。

「分かつてましたよそんなこと。そうですか、あたしの言葉はもう、こんな黒いおじさんを介してでしか聞こえなくなっちゃったんですね。なんていうか、あんたたちがあたしの言葉を聞かなかつたことよりも黒住がそういうこと言つぼうが以外に思えてくるくらいしつくりきましたよホント。病気なんですね、この世界もあたしも、あんたたちも。どこもかしこも腐つてるんですよ。家庭なんて、とつぶに崩壊してたんですね」

分かりきつていたことだつた。たつた一つの繋がり、それは夫婦

というものだつた。つまり、親子ではなかつたということだ。白椿菊乃が感じていたかすかな最後の繋がりは、单なる勘違いだつたのだ。それがどうしてか今の彼女には酷く滑稽な過去に思え、思わず笑みを漏らしていた。結局自分は突き放され、突き放していただけで、何とも繋がつていなかつたのだと分かつてしまつた。

因果の鎖は、運命に巻きついていただけだつた。

「恥ずかしいとは思わないのか？」

黒住の口が開いた。

「貴様らの家族が崩壊しているのを娘に指摘され、腐つていると言われ、病気なのではないかと疑われ、親としての威儀は無いのか？」

白椿夫妻は顔を伏せた。多少の酌量の余地はあるだらうと、黒住も見計らつていた。

が、それも單なる希望で終わつた。

「私は、私たちは呪いから解放されなければならないの」

妻が重々しい表情で語る。

「白椿は呪いをかけられているから、一代一代をかけて段々とその呪いを浄化して、普通の人間になるのが私たちの願い。それを止められることは、娘であろうと許されるべきことではないわ」

「それが被害妄想だと……」

「黒住さん」

菊乃が黒住を遮る。その瞳には既に諦観の色だけが浮かび上がっている。

何を見ているのだろうか。菊乃の視線はどこか彼方へ、そしてつぶやいた。

「『因果応報』、じゃないでしょつかね」

轟音が空に響いていた。空気全体を震わすようにして飛ぶそれは飛行機だった。現在成田空港が全便欠航なので、恐らくは羽田に向かうものかそれ以外かだ。横で黙々と歩を進める灰田も少しだけ空を見上げていた。

私はあのあと、灰田の頃合いだという合図を聞いて彼と成田空港に向かうことになった。何があるのかは全く想像もつかないが、強いて挙げても私にとつて良いことではないだろう。予想でも勘でもなく事実だと胸を張つて言える自信が私にはある。言つまでもなく、灰田の提案だからだ。

成田空港の中は異常とも言えるほど閑散としていた。昨晩見た二コースの「ゴーストタウン」のようだ。受付もいなければ乗組員などいるわけもなく、世界宣言で空港を閉鎖してもここまで静かになるだろうかという大袈裟な疑念まで持たせてくれる。灰田と私の靴音だけが不気味に響いていた。窓の外を見れば目に眩しい暁光が照りつけ、それを遮るものは何も無かつた。また映画のフィルムにこの不可思議男と閉じ込められたようで気味が悪かつた。

「君は……」

唐突に灰田が口を開く。照りつけるオレンジ色の光を銀色の髪が吸い込んでいた。

「君は孤立というものを体験したことがあるだらうか?」

「孤立……? 微妙なところね。身の回りには沢山の人人がいたわ。かと言つて心を許せる人がいたわけじゃない」

「物質的に満たされ、精神的には満ち足りなかつたと解釈して良いのかな」

「別に精神的に余裕が無かつたわけじゃない。でも孤立なんて言わ
れるほど世界から切り離された覚えも無いだけよ」

「世界から切り離される、か。やっぱり君は他とは違うね。孤立と
孤独の定義の違いをわきまえてる。普通じゃない」「
「あんたに言われたかないわよ」

それもさうかと灰田は薄く笑つ。本当に自嘲しているようだつた。
そのうち空港を進んで滑走路に出る道を見つけ、外に出た。見渡す
限りの広大なアスファルトの砂漠に思わず息を呑んだ。空港に來た
ことは何度があるが、ここまで閑散としているとまた別世界のよう
に感じる。この世に無機物しかない虚無感が私の背中を駆けた。飛
行機は廃れたバスのように、滑走路は南アメリカ方面にありそうな
熱帯の一本道のようだ。普段見慣れた光景から人が消えるだけでこ
うにも変わるものかと私は感心した。

その永久に灰色しか無さそうな世界に色が存在したのを見つ
けた。灰田は横で腕を組んで、すでにこれ以上進む気は無いようだ
つた。

色と言つても赤や青のような彩りのあるものでは無い。黒と白、
そう表現するに相応しい人間がそこにいる。

「……………」

思わず私は呟いた。言葉を失う状況といったら今しか無いと思う
のだが、頭の中には声に出したいと思う疑問しか浮かばない。自分
でも珍しいと思つほど焦りを感じて灰田を振り返つた。

「これは、あんたが仕組んだのね？」

灰田はまるで劇の観客のような無関心さの振る舞いで淡々と答える。

「人聞きの悪いことを言わないで欲しいね。僕がやつたんじゃない。

君がやつたんだ」

「わた……し?」

灰田の言葉に私は思わず素で顔をしかめた。

「そ、君だ。確かに仕組んだのは僕だが、引き金を引いたに過ぎない。火薬と弾丸を詰めて指をかけさせたのは君。白椿風に言つたら因果かもしれないね」

「一体何を言って

「

「しらばっくれるなよ優等生」

空気が一変した。あの恐ろしい目だ。他人の奥底を断りも無くスコップで掘り出そうとするような気色の悪さ。だが本当に何のことだか私には分からず、口ごもることすら出来なかつた。

「壊したいんだろう? 白椿自身を。打開したいんだろう? 満足の行かない現状を。ならば行けばいい。あそこにいるのは白椿菊乃にとつて憎き両親だ。彼女を壊し、孤立させた張本人だ」

「黒住は、何故黒住がいるの」

「ふふ、本当に顔の広い優等生だ。だがしさか思考が鈍つてゐみたいだね。黒住は、白椿は何だい」

言われて私は黒住の言葉を思い出した。彼は確か自分のことを『刑事』だと表現した。そう、私には何らかの比喩にしか聞こえなかつたが事実上今の光景は、白椿さんの言葉、『私の両親が昨晩の連續殺人の犯人』が本當だとするならば容易に状況の説明つくではないか。刑事と犯罪者。何ら不都合の無い組み合わせだった。白椿菊乃自身もその関係で私がいないうちに呼ばれたに違ひ無かつた。彼女を救うと決めたというのになんという体たらくだと自分を貶めた

くなる。

もう一度彼らのほうを見た。四人の男女が睨み合い、一組の知らない男女が組伏せられている。そして白椿さんの背中と、何故か驚愕に打ちひしがれている黒住の表情が見える。

「黒住は、白椿の両親を殺すつもりでいるだろ?」

「なつ」

「驚くことも無いさ。彼は敬愛していた師を白椿に殺されている。簡単に復讐と取れば納得の行くことだよ」

「黒住がずっと追っていたのは白椿さんの両親だつたってわけ……。確かに酷い因果だわ」

「その因果を繋げてしまったのは他でも無い誰かさんだけね」「だからどういうことなの。遠回しにしないで言いなさいよ」

「言つてるだろ? 良く考えれば分かることさ彼女の口癖であり人生であった『因果』とは、原因と結果のみで構成されるんだ。起きるはずのなかつた現状を作つた変化、つまり原因があつた。彼女の人生の中で最も大きな変化とはなんだ? 孤立していた彼女の横に立つっていたのは誰だ?」

そこで私は一つの可能性に思い当たり、はっと息を呑んだ。

「……そんなまさか、有り得ない。上手く繋がりすぎじゃない」

「因果は基本的には閉鎖的だ。けどそれを人生と掛け合わせると話は別になる。肌を切れば血が出るのは因果。血が出れば収まるのも因果。しかし、他人と関わる因果はまるで大樹の枝分かれのような結果を出す。百も二百もある結果など誰が予想出来る。君と彼女が出会つたことは、中でも更に特異な原因だつた。なら原因が特異であれば結果も特異である。言わせれば因果さ。肌を自分で切ることは実験でしかない。が、肌が切れたのが人生における偶然の産物だとするならば、それだけで死に至ることも可能性として提示出来る

ようになる。僕に言わせれば『運命』としか言こようが無いよ

彼女が似合わないと言つた言葉を平然と使ってみせた。

「彼女は人生における結果論を全て原因によるものだと信じている。しかしそれは間違いだ。さつき出した例もそうだけど、因果関係は物質的なものしかありえない。時間的なものに因果は決して発生しない。彼女の主張はとっくに破綻している」

「定義そのものから間違つてているわけね」

「そう。人間の時間的な結果は常に偶然でしかありえない。例え昨日に約束を取り付けていても、本質的に考えれば『たまたま用事が入らなかつた』に過ぎない。そこに確定した事象は絶対に存在しないのさ」

言いたいことは十一分に理解出来ていた。元より気付いていなかつたわけではない。私が以前、白椿さんに何故そのような口癖なのかと問うたのはそういう意味合いも含めていた。彼女の言う因果とは、私の頭の中にある辞書とは差異があつた。若い人の良くある言葉の間違いだろうと見過ごとしていた。

しかし、彼女はこうも言つたのを私は覚えている。

白椿菊乃には運命という言葉は似合わないと。

灰田が言つように、時間的な経過による人生の結果とは偶然しかありませんず、偶然をロマンチックな言葉に変換するならば運命だ。彼女は運命は似合わないと言つた。つまり、『運命』という表現が本当は正しいことを知つていたに違ひなかつた。灰田のおこぼれとはいえ、私にも段々と白椿菊乃という人物が理解出来そうな気がしていました。

「なら何故彼女は因果という言葉を好んだのか」

灰田がまるで私の思考を読んだように続ける。

「もう一度言おう。彼女はそうして信じて疑わなかつた。無論、本心は僕には察せ無い。だが一つ分かることは、彼女は運命に喧嘩を売つていた」

「白椿家の呪いね。彼女から話は聞いたわ。ついでに言うと、あんたたちのわけの分からぬ家の関係もね」

すると灰田は心底嬉しそうにほう、と相槌を打つた。

「正直それを知られたところで僕には何ら問題ない。……話がずれたね。白椿菊乃は知つての通り自分の運命には半ば諦観していただろう。他人との関わりを極限まで断ち切り、自分を押し殺していた。あえて褒めるならあの元気つ子氣質が失われなかつたことかな。普通は根暗になつてもおかしくはないんだけど」

「十分根暗だつたと思うわあの子。あの年頃の少女にしては世界を達観し過ぎてるし、何より本氣で悩んでたみたいだしね」

「それを言うなら君はどうなんだい？ 達観し過ぎてるという意味合いで言えば君は究極的だ」

「私は優等生だから」

それだけ言うと灰田は一瞬微笑んだ。まさに、その答えを待つていたと言わんばかりの満足げな表情だった。

「続けるよ。ともかく、彼女は一度白椿の運命に負けていた。……けど、彼女は君と出会つて可能性を見出した。恐らくは因果なんて言葉を使い始めたのも最近だろう。そして彼女はさも当然のように無意識のうちに、『君という原因に自分の自由を結果付けた』」

「……それが、彼女の因果の全て、ってわけ？」

「そして彼女の運命の全てである。君は運命論はどう思つ？」「

「全ての事象は最初から決まっているって理論ね。ある意味では宗教の延長線上にある理論だと思うわ。……まあ、どうやっても知ることの出来ない不確定要素を結論にすることは出来ないわ。ノストラダムスの予言も外れたわけだし、正直納得するに値しないわね、勿論個人的意見だけど」

「十分だよ。なら僕の意見も言おう。僕は運命は存在すると信じている。いや、実際最近までは僕も君と同じだったんだけどね。見事に僕の目の前で予言を当てた人物がいたものだから考察し直したんだ。まあそんなことはどうでもいい。本題だけど、君の言うように不確定要素、しかも未来の出来事なんてもはや神にしか分からぬだろう。が、逆に考えてみれば『運命が存在しないと言える根拠もない』はずだ。元々運命は定義からして不安定なものだ。よつて僕は運命はイコール未来だと定義した。つまり、今ある出来事、これから起きる全ての事象は運命と呼べる」

「……それは理論から逸脱しているわ。運命っていう存在自体の有無を聞いてるんじゃない。その性質についてだわ」

「都合だよ
「……都合？」

こきなりの言葉に私はオウム返しになる。

「都合さ。人間の世界は須く都合で構成されている。都合の良し悪しによつて人は簡単に何かを曲げてくる。そんな絡まったケーブルのような世界に理論なんて入れる隙はない。つまりは運命自体の有無は人それぞれだが、運命論自体は破綻している」

私はついに頭がついてこれなくなり、手のひらを灰田に向けて待つたした。

「つまり何が言いたいわけ？」

灰田は急に真剣な顔になつて答えた。

「人の都合によつていろいろ運命は左右されるように、白椿菊乃の因果も同様に左右される。つまり、今の状況は果たして右と左、どちらに傾いていても、何が起きるかなど絶対に分からぬ。人、それを因果とは呼ばない」

「……」

「しかしここまで語つておいて何だけど、因果は存在する。九十九パーセントは完全じゃないが、不動と呼んで差し支えないだろう。これから因果を作るのは君だ」

私は遠くを見た。夕日が地平線に沈む光景の少しこちら側、四人の男女が何かいざこざしている。一人は白椿さん、一人は黒住、そして今黒住に命を握られている一組の夫婦。その光景が、一刻一刻と動き出すのを待つている。

白椿の呪いの正体は定かではない。

彼女は目の前で起きた交通事故を自分と出会つたせいでだからと言つた。その時の表情は真剣極まりないもので、普段なら漫画の読みすぎだと笑い飛ばせるものも絶句するしか私には出来なかつた。もしかしたらその時には既に私は何かを察していたのかもしれない。いや、もし気付くタイミングがあつたとするならば更に前だ。そう、初心に帰ればよくわかること。

ただ単純に、彼女らは普段ではないと。

と、私がもたもたとそのような思考を繰り広げている時だつた。突如、飛行機の轟音に引けを取らない鈍い音が空に、地に、耳に響いた。流石の灰田も首を上げて四人のいる滑走路中央付近に目を向ける。そして、その事態を見ていた私は一瞬の硬直のあと、大きく吐息を吐き出して走り始めていた。

拳銃が、発砲された。

何故、このような結末を迎えてしまったのか、私には全く解せなかつた。息を上げて駆けつけた時には既に遅く、額から黒い血を流す一人の男性がか細いうめき声を微かに、呼吸しているのと何ら変わりない大きさで上げている。その横で顔面を青くした女性が悲鳴を甲高く上げた。耳も目も塞ぎたくなるような光景だった。

「……あ」

状況を未だ掴めていない少女が思わず無意味な声を発した。私も言葉を失っている。いくらなんでも刺激が強すぎた。白椿さんと同じようにアスファルトの上に膝を崩した。いや、崩れた。当の発砲した黒住は中で一番澄ました表情をしていた。自分がした行為に一点のミスも、間違いも、後悔も無いといったように目の前の惨状をなんでもなさげに見ている。彼の瞳は何色にも染まっておらず、強いて言つなら真っ黒だった。数分してやっと落ち着いてきたのか、体の震えは収まってきた。しかし黒住に何かを言おうとすると、力チカチと歯が音を立てるだけだった。そこで初めて自分が腰を抜かしていることに気付く。

「何も今殺すことは無かったんじゃないかな？」

後ろでいつの間にか灰田が静かな顔で黒住と対立していた。しかし当の二ちらも特に感慨は無いように見える。やはりどう考へても普通ではない。私と白椿さんを置いて会話は淡々と進んでいく。

「今殺すことは無かった、か。その言いぐさで行くなら俺は今殺しても何ら問題は無かった。だが正直俺には何故この男が死んだのか

理解出来ん

「といつと?」

「拳銃は二丁。一丁は未だに俺の懷の中だ」

ほう、と灰田が興味深そうに呟つ。黒住は私たちの田の前で懷から拳銃を取り出し、『六発入った弾を全て出した』。

「この拳銃には弾は最高六発しか詰められない。言いたいことはそれだけだ」

「つまり他の誰かが撃つたと?」

「違う。もつ一丁はこの男自身の腰に下がつている。つまりは自殺だ」

段々と覚めてきた私は横で放心している白椿さんの肩を叩いて聞く。

「それは、本当?」

「……」

案の定答えは返つてこない。

だが、すぐにでも黒住に飛びかからないところを見れば予測はつく。自殺したのだろう。頭の混乱が次第に収まり、自分でも不思議なくらい冷静さを取り戻しつつあった。熱湯をドライアイスで冷ましたつてこつはならないだろつ。膝に力を入れて灰田の横まで下がつた。今までの位置にいると血なまぐさい臭いが鼻につくからだ。

「何故彼は自殺したんだい? 君が催促したんじゃないのか」「催促したという点で言えば、誰だってこんな状況死にたくなる。一部始終を見ていたのなら分かるはずだ」「残念ながらそこまでは見てないんだよね」

「……どうでも良いことだ

もはや興味も失せたのか、黒住は身を翻して空港に戻りつと歩を進めた。

「呪いよ

突然女がそう言った。黒住の足が止まる。たったその一言で、ここにいる五人全てが頭のスイッチを切り替えたように表情を変えて女を見る。私も同じだった。

女の顔はまるで甘美に震えているようだった。田の焦点が全く合っていない。ホラー映画に出てくる何かのウイルスに感染して狂った化け物に似ていると率直に思つ。事実、彼女は『呪い』というウイルスにやられているようだ。

「夫は引き金なんか引いてないわ……呪いよ、白椿の呪いが夫を殺したんだわ……ほら、見なさい。見たでしょ？　夫が血を吐く様を、白目を剥く様子を！！」

軽くヒステリックを起こし、勢によく正面にいた白椿さんに飛びかかった。

「ひつ……！」

「ねえ菊乃、今度はあなたの番よ。白椿のしきたりを守り、使命を実行し、私たちの『白の世界』を実現するのよ！」

「お、お母さ……止め」

本人は気づいていないのか、女は白椿さんの首に手をかけて大きく揺さぶっていた。私は流石にまずいと思い、即座に女を引き剥がしにかかる。が、ヒステリックを起こした人間はまさに火事場の馬

鹿力だ。全く離れる気配がない。

「ほり見たでしよう菊乃！？ 呪いはあつたのよ、私たちを殺す呪いは存在したのよ。どうしたって回避出来ない運命はあつたのよ！！」

女の馬鹿力に爪が痛んだ。今更切つてくれれば良かつたと後悔する。肘が顔面をかすめた。装飾で頬から冷たい血が流れるのを感じた。女の髪の毛から血の臭いがした。自分のものではないとすぐに理解した。白椿さんの表情が限界に近付いている。私は祈るような気持ちで後頭部を拳で強打するが、やはり倒れてはくれなかつた。コツ、と、革靴特有の音がした。

「いい加減にしろ。クズが」

拳銃の発砲音、一つ。

「良い歳して呪いだの運命だのほざいてんじやねえよ」

拳銃の発砲音、一つ。

「その被害妄想がどれだけの人間を死なせたと思つてゐる。貴様らの身勝手な行動がどれだけの人間を叩き落としたと思つてゐる」

拳銃の発砲音、一つ。

「しまいには自分の娘すら手にかけるか？ 狂つてるのは、家だけにじる！？」

拳銃の発砲音、三つ。

一つの音が鳴る度に私の前で鮮血が噴水のように上がる。最初に左腕が飛んだ。次いで右腕が飛んだ。白椿さんが咳き込む中で、女は吐血した。最後には花火のようだった。女は男と同様にアスファルトに身を打ちつけ、絶命した。返り血を浴びた私は自分が殺人犯のような錯覚を覚えながら後ろに下がる。もはや黒住に席を譲る他ない。今の彼は、私の私見であるが相當に怒っているように見えた。それが意外にも意外だったために、ある種の恐怖すら感じてしまうほどだ。これが本当の黒住なのだと、直感で理解する。

黒住は死に絶えた女と男の近くに寄る。が、何をするわけでも無く一瞥しただけで白椿さんの元によって手を差し伸べた。

「どれだけ人間が気張つて、どれだけ人間が努力をしようと、天才と神には適わないものだ。俺はこの場で宣言する。俺は、黒住の名前を捨てよう」

そこにいた全員が黒住の方を見た。灰田だけは特に意外そうな顔はしなかった。白椿さんは何を言つているのか全く分からないと言つた様子で差し伸べられた手を見ていたが、急にやわらかくなつた黒住の表情に心を許したのか、おずおずと手を握つた。そのまま立たされると、そのあとすぐに手を離した。

黒住はそれに特に感想も無いように身を翻し、灰田の前で止まつた。

「貴様の勝ちだ。俺は師のようにはなれなかつた。やはり、どう考えても『正義』と『悪意』は相反する。客観的だらうが主観的だらうが、結果論だけ語れば無理な話だつたのだ」

「なあに、僕としてはかなり近づいてたと思うよ。先代の彼女も黒住の血筋を完全に引き継いでるのに悪意なんて微塵も感じなかつたからね。嫌な意味で、はね。いやらしい意味では塊のような人だつたけど」

「ふん。弟は師に似るか」

「……最後に手を汚して、どうするつもりなんだ。君は僕らのようないわゆる『異端』じゃない。れっきとした一般人だ。罪が発覚すれば間違いなく務所行きだ。それにここじゃ発覚するのも時間の問題だろ?」

「ならば問題あるまい。俺は貴様らとは違う。黒住のために築いてきたものを最後に行使すればいいだけの話だ」

「……それはそうだったね」

「結局、人間には貴様らのように完全に『自分を壊すこと』なんてできやしないということだ」

その後の話で分かつたことであるが、黒住儀軋は白椿菊乃や灰田純一のようない正統に血を受け継いだ家のものではなく、先代の黒住の弟子だつたらしい。しかしその先代も白椿の『事故殺害』の巻き沿いをくらい死亡、跡取りがいなくなつた黒住の家を引き取つたのが彼だという。元々黒住はいわゆる『賊』であり、他一家のような天才肌が揃つたものではなかつたらしい。ゆえに、彼らの信条であつた『自己破壊』とは、自分の善意と感情を粉々にすることに他ならなかつた。人が嫌がること、人を嫌がらせること、そういう当然の感情を異端に与えるのが彼らの優しさであり、最大の自分への嘘だつた。結局、黒住儀軋の言動は嘘しかなかつた。ただ灰田が言うに、彼の褒められる点は、人間でありながらそれ以上嘘を重ねなかつたことだという。汚く知能の歪んだ人間にとつて嘘とは呼吸することと同じであつて、人の世に生まれてきて嘘を百つかないものなんて珍しいのだと。むしろ、その点を取れば彼も立派な『異端』だつたのかもしれない。

究極の善意の塊、それが黒住の悪意だった。

後日談であるが、あの殺人事件と成田空港での出来事は綺麗さっぱりと黒住の手によつて処理されたらしい。元々本物の警察とも関わりがあつた黒住に成せるワザ、地位を上り詰めた人間特有のワザだね、と灰田はおかしく笑つていた。

成田空港の一件については、数年前の復讐のようなものだつたらしい。黒住は『再現』と言つていたが、その事後を知る灰田に言わせれば全然違つたらしい。黒住の師は空港を全面閉鎖するという偽造を仕掛け、ジャンボジェット機で白椿をひき殺そうと企んでいたらしいのだ。それは失敗するだろうと私はユーモアのある黒住の師に脱帽した。

その後黒住の行方は誰にも分からなくなつた。どこか辺境の地へ旅立つたのかもしれないし、その権力を使って人間らしく遊んでいるかもしれない。何はともかく、もう私と関ることは無さそうだった。

白椿さんは酷い親だつたとはいども両親を失つた痛みは大きかつたらしく、その後数週間は家に引きこもりっぱなしになつた。元々孤立していたとはいえ、一番太かつたつながりはやはり家族だつたのだろう。それでも黒住を恨まないと誓い、自分の中だけで解決するはある意味では本当に強いと思う。元気な声で学校で挨拶を交わしたときにはうつた。灰田に言わせれば白椿の家は固定観念に取り付かれたがゆえに、意識の力が強く働いていたのだと言う。つまりは火事場の馬鹿力だ。代々から呪いの内容を受け継いできた家は、まるで一つの宗教団体のような結束力と意志力の強さをつけていた。その間違いに気付くことすら許されないほどに、だ。そう思えば白椿さんが私との出会いでそのことに気付くというのは本

本当に不思議な運命によつて左右された因果だと思つ。本当に、因果だ因果。

「いいんちょーー！」

クラスのドア側のほうから男子生徒の声がした。委員長というのは私のことだ。昼ごはんを同席していた友人たちが行つてらつしゃいと私を催促した。ドア側にいる男子生徒に用件を聞くと、廊下で誰かが私を呼んだらしい。ニヤニヤしながらそう言つ様が気持ち悪くて思わず引いた顔をしてしまつたかもしれない。

「で、誰が呼んでるつて？」

「ああ、灰田つて奴が呼んでる」

じつやら私はほつひに、彼の劇に出演要請が来たよつだつた。

「全く横暴だと思いませんか先輩！ 高校生になつてまで宿題宿題つて、あたしももう子どもじゃないんですから。あー、あの教師の髪の毛何かの因果で禿げないですかなえ、思いつきり笑つてやるのに」

あれからもう一ヶ月の時が流れようとしていた。灰田は相変わらず何かとちょっかいを出してくるものの、特別おかしな出来事があつたわけでもなく、私はこうして白椿さんと放課後の談笑を楽しむだけの坦々とした毎日を送っている。白椿さんは現在実質上一人暮らしとなつたわけだが、私が週に何度か訪問して食事などをともにしている。彼女のことであるから、犯罪に巻き込まれたとしてもどうにか出来そうはあるが、今まで関わってきたのだからついでに私もそのライフを楽しませてもらつている。黒住はあのあとから消息を絶つたと思っていたのも束の間、数日前の私が馬鹿らしく思えるほどに何事もなく姿を現した。彼曰く、一度は放浪も考えたらしが、結局ある理由があつて戻つてきたらしい。ある理由というのは何だか分からぬいが、どちらにせよ私には関係の無をそつなことだつた。

「とこりうわけでマック行きましょう先輩」「…………どういうわけで？」「いや、立ち話もなんですね」「でもあそこ、黒住が良く利用してるから危ないわよ？」「あー……やっぱソーラのファミレスに」と、言葉を濁したとき、後ろから声がした。

「なかなかに酷いな白椿。コーヒーの一一杯くらいなら奢つてやった」というのに

「うわっ！… こきなり出てこなこでトセコモー。つーかなんでこんなところにいるんですか」

「気まぐれだ。無論、この言葉に嘘はないが、主に悪意で出来ている」

「……なんか怪しそうですね」

「クイズだと思え」

「ていうか、黒住の名前を捨てたのこ、まだその口癖みたいなのは使つてるんですか」

その問いに黒住は少しだけ表情を濁した。何かものうづげ感じである。

「……癖になつた」

「は？」

思わず私も黒住を見た。

「なに、五年も六年も自分を偽つていれば、自然と身に染み付いてしまうのだ。『自己破壊』がもたらしたもののは少なく無かつたといつ」とだ

「ふうん。まああたしも『因果です』っていつ口癖直つたかと聞かれたらそれは悩みますけどね」

つい一ヶ月前までは考えられないような談笑の光景だった。まず白椿さんと黒住が進んで会話を成立させていること自体珍しい。あの日以来、白椿さんはどことなく丸くなつたところがある。といつても人間性とかそういう問題ではなく、単純に黒住という人間に對しての話であるが。

しばらくそのまま歩いていると、ちょうど大通りに入る角に差し掛かったところで白椿さんのスカートのポケットから振動音がした。話しかんでいた黒住がそれに気付いて言つ。

「おい、鳴つてるぞ」

「はいはいわあつてますよ。……もしもしー？」

一度立ち止まって電話に耳を傾け始める。内容からして何か田上の人と会話しているようだ、語尾が不自然に敬語になつていて。その光景を見て私は思わず笑みを漏らした。以前まで一人で生きていると信じていた彼女がこうして誰かと会話をしているのを見るのはまさに変わった証拠を見せ付けられているのだ。私は黒住に寄つていて話しかける。

「ねえ、彼女変わったわよね」

すると黒住も感慨深そうに答えた。

「そうだな。正直に言えば、俺は奴の親を殺したこと多少後悔している。といつのも、それで奴が塞ぎこんでしまつたら逆効果だからな」

「そうね。……ぶり返すより悪いけど、あの日のことを少しだけ聞いて良いかしら?」

「構わん」

「……成田空港での一件、まあどうやって秘密裏に処理したかは聞かないわ。そうしてもらったほうが私も有利に働くし。問題は、『白椿の呪い』についてよ

黒住もその言葉には反応を見せ、ゆっくりとじりじりに顔を向けた。真面目に話を聞いてくれるようだ。

「科学者思考……ってわけじゃないんだけど、私も呪いとか神とかはあまり信じない主義なのよ。いえ、その存在自体は多少認めても良いけれど、それが世界に影響を及ぼす存在かと問われればの話ね。それで、あの日白椿さんのお父さんは謎の死を遂げてる。まさか、あのまま呪いで片付けるつもりじゃないでしょ?」

「ふん、そんなこと考えなくとも良いだろ? 奴らの被害妄想であり、完全なる自害だ」

「いいえ違うわ。あれは自殺なんかじやなかつた」

「言い分を聞こへ」

私は頭の中の光景を整理しながら自分の推論を披露し始める。

「まず、自殺に使われたのは間違いない拳銃。それは確かよ。けれどあの場は自殺現場にしてはあまりにおかしかつた。そのためには根拠が少し足りないのだけど、一つ可能性を挙げるなら『拳銃は二丁じやなかつた』。これは、まったく自信が無いわ」

「俺の持つていたものと、夫が持つていたものと、もう一つあると?」

「そう。何故ならあの時は放心してから全く気付かなかつたけど、彼女のお父さんは拳銃なんて持つてなかつた。あつたのは血の水たまりだけよ」

「それは貴様が単純に見落としただけではないのか?」

「そうね、そうかもしれない。実際言つてしまえば、私がこう思つてゐる原因はある一つの結果が付きまとつてゐる。逆算思考ね。私は白椿さんのお父さんを殺したのは、彼の妻じやないかと思つてゐる」

黒住が黙る。

「教えて欲しいことがあるの。もしも拳銃が二丁であつたならば、

貴方はその拳銃を『どちらに持たせていたの?』

「…………」

「女性つていうのは男性と比べて中毒性のあるもの、宗教的なものに対しても多少熱狂的、いえヒステリックって言つたほうがいいのかしら。そういうものがあると思うのよ。だから貴方は元からこの結果を予想して、妻のほうに銃弾の入った拳銃を持たせていました……といふのは過剰な演出の見すぎかしらね。お母さんが娘に『固定観念』という『呪い』を植えつけるための過剰演出、そう考えればすべての事象に納得が行くわ」

少しの間沈黙が流れた。黒住はゆっくりと吐息を吐いて胸ポケットから見慣れたミラーサングラスをかけた。夕日がまぶしい時間に入っていた。

黒住は今まで溜めたものを吐き出すようにして話し始める。

「つじつま合わせ……にしては異常な根拠と信頼性のある推理だ。そして問いかねるならば、貴様の推理は大正解、ということになる。拳銃は一丁だったが、……まあ誘導尋問に乗せられたといったところか

「…………やつぱり」

「だが、一つだけ違っている点がある」

「それは…………?」

「俺がこの劇を調整したわけではないということだ。俺は一人ともを射殺するつもりだつた。だが、一人は勝手に死んだ。ただそれだけの話だ。女のほうに銃を持たせたのは男に持たせるよりも勝機が高いと見たからに過ぎない。これは言えば、単なる因果応報だっただけの話だ」

「因果、応報」

言葉にしてみれば、実に納得の行く結論だ。田には田を、歯に歯

を。人を殺せば、人に殺される。なんという綺麗な回り方をした歯車だろうと私は思った。

人生は歯車に例えられることが多い。運命の輪、輪廻転生、人の関係、因果応報、何もかもが繋がつて一つになつてているという例え。自分という世界舞台にして様々な登場人物が自己主張し、他人を認め、そうして造られる本当の自分。

(なら、私は一体どの世界の歯車に巻き込まれているの……？)

それは勿論白椿菊乃の世界であり、黒住儀軋の世界であるし、学校のクラスメイトの一人一人の世界に私は歯車の一つとして組み込まれていることだろう。だが、それだけではまとめられない何かがあることも確かだつた。

自分という歯車が必要とされている世界がどこかにある。そんな気がするのだ。それが最近までは白椿さんかと思っていたが、どうやら先日の件でそれは思い過ごしだと知つた。だとするならば……。

「そういえば」

思考を中断させるように黒住が声を上げる。

「最近誘拐事件が多くなつていて。それも全国規模という稀のパターンだ。東京都でも何件か起きているが、何よりも北海道から沖縄、それどころか話によれば中国やハワイのほうでも起きているらしい。誘拐というよりも身内では神隠し、なんていうまた根拠も無い現象が挙げられてるくらいだ。貴様らも若い女性なのだから、気をつけたほうがいい」

「全國つていうか世界規模じゃないそれ……」

「何、偶然というものは重なるものだ。ここに規則性を求めるのは砂漠の砂からものを探すのと同様、五里霧中も良いところだ」

「そりやね。全世界に渡つて誘拐事件起にして何しようつたこうのよ。革命でも起こすつもりかしら」

「さあな。まだ身代金要求などの事件にはなつていないらしいが、時間の問題だろ？」「ま、忠告感謝するわ」

「ようじ」ちらの話が終わつたところで、白椿さんも電話を切つた。途中から怒声が聞こえてきたような気がしたが、案の定重い空氣を背負つてこちらに来た。

「バイトのシフト無理矢理入れられました……。今日は先輩と沢山遊ぶ予定だったのに！」

「無理矢理つて……断れなかつたの？」

「はい……なんかバイトの子が一人くらい無断欠席してゐらしくて、人手が足りないらしいんです」

「最悪ねそれは。んまあ、承諾しちゃつたなら早く行きなさい。次その無断欠席した子に仕事押し付ければ良いわ」

「りょーかいしました。んじゃ、また明日会いましょう！」

風が通り過ぎるように素早く白椿さんは走り去つていた。相変わらずの構成材料十割が元気な子である。見ていて微笑ましい以外の何ものでもない。

さて。

「用件を言ひなさい。黒住」

既に陽は落ちている。しかし、黒住のミラー・サングラスには暁光が微かに光り、それを反射していた。彼は何を言い出すのだろうか。

「『気まぐれだ。無論、この言葉に嘘は無いが、主に悪意で出来て
いる』ね。結局、つけてたんでしょう？」

「……聰明すぎる人間は正直好かない。貴様のような人間は推理小
説には存在してはいけないと思うのだが」

「良いじゃない別に。ここはリアルよ。それに私はあんな天才探偵
じゃないんだから」

「ただの……優等生か。良いだろう、要件を伝える」

自己破壊。

自己殺害。

自己崩壊。

セルフディストラクション。

そして彼は言った。

「俺とともに、この世界を壊して欲しい」

その日から、村には平穏が訪れていた。殺人鬼はいまだに佇む灰色の扉へと吸い込まれていき、それが残つたということ以外は、手の消失も加えて全てが丸く収まつていた。

私は村の村長であるからして、そのような不安要素を残しておくはどうかとも思ったが、以前と比べれば大分ましになつたことは安堵を覚えずにはいられなかつた。事実、あの扉が現れてから何日か経つてゐるが、特に危害を加えるような產物ではないようである。

ただ一抹の不安はやはりあつた。といふのも、最近になってあの扉の向こう側に何があるのかと村の学者が気にし始めたことだつた。あの扉には禍々しい何かが存在していると占い師は言つていた。それが確かに不確かかを確かめるためにも調べる必要があるとは思つてゐるのだが、その圧倒的な威圧感からある一定の距離以上を詰めることが出来ないでいた。まるで禁断の地へ近付けさせないための魔法のようである。事実、私を除いたすべての村人はそこに近付けないでいた。

ある日のことである。その学者が一つの結論を導き出した。私はそれを聞いて激しく憤怒した覚えがある。

学者は『あの殺人鬼に似通つた人間ならば扉の向こうを確認できる』と言つた。しかしそれはつまるところ『悪事をしろ』ということに他ならない。村長としてそのような行為を許すわけは無かつたが、学者も頑なだつた。

「あれは異次元とのつながりを持つてゐる。扉には表と裏しかなく、そこに続く部屋が存在していない。つまり、あの向こうには新たな世界が広がつてゐると断定して良いだろ?」

「馬鹿な。三文小説ではあるまい、そのような幻想が現實に存在す

るわけがないだろ？」「

「だから調査をすれば、すべての結果が出ると言つてゐるではないか！！」

均衡状態のまま時間だけが過ぎて行つた。何度か学者は血で手を染めようとも試みていたが、その度に私は邪魔をした。もはや彼は放つておけるほど冷静さを持つていなかつた。

そんな日々を過ごす中、事件が起きた。私の村で神隠しが起きたのだ。さらわれたのは小さな子どもで、親は大層に悲しんでいた。学者はそれを根拠も無しにすぐ灰色の扉にこじつけ、確かめるべきだと今まで以上に奮起した。私は始めはそれを必死になつて止めていたが、事件はそれだけでは終わらず、一日に一人ずつ、この村から村人が消えていき、その様を見ているともはや灰色の扉を疑うほかはなくなつてきた。次第に私は学者の行動を許そうと思うようになり、ついに学者は村人の一人の命を奪つた。その様子といえば、まさに狂氣としか言いようの無い光景であつた。

学者は扉に近づくことが出来た。これには私も素直に驚いてしまつた。

学者をまるで迎えるように扉が開き、彼はその中に姿を消した。言つまでも無いが、それから彼は帰つてこなかつた。結果としてあの扉の中に何があるかを判断することは出来なかつた。しかし、それでも神隠しは続いた。

これでは殺人鬼がいた頃と何も変わらないじゃないかと、私は非常に焦つていた。村人たちの不安も大きくなるばかりで、安心する表情を見る日は一度と来ないのではないかと錯覚するほどに緊張に満ち溢れていた。

そして私は、その状況に我慢の限界を感じ、ついに暴挙に打つて出た。

「この扉に生贊を捧げ、神隠しを止めてもううとうに頼み込もう

この言葉に村人は絶望したことだろう。学者の一件があつてから、彼らの結束が崩されたことによってそれぞれが疑心暗鬼になりつつある最中での決断だつた。もはや最悪としか言いようが無い。

私は自分を慕う村会のものの子を一人殺し、扉へと捧げた。心が痛んだという騒ぎの話ではない。泣き叫ぶ妻を見ると、罪悪感で今すぐ死にたい気分に駆られる。それでも私は、村を救うために小さな犠牲をいとわない誓つたのだ。正直心身ともに潰れそうでいた。そう、私は決してこれを生贊のための行動だと思ってしたわけではなかつた。単に、人を殺すための口実、逃げ口でしかなかつた。すれば、あの学者のように扉の中に入り、確認できると思ったからだ。私はその日扉に近づいたが、やはり威圧感に押し出され、冷や汗と激しい後悔に襲われただけであつた。

そうして次の日も次の日も、村人を泣かせた。その泣き顔を見るたびに、心を潰した。そうしていくうちに、私は知らぬ間に自分を壊していた。

そして、願いが叶つた頃には、何も残つていなかつた。

扉の前に立つ。夢を見すぎて、一体何が夢だつたのかすら私は忘れてしまつていた。灰色の扉は私には天国に見えた。この先へと足を踏み入れれば、私は何もかもから解放されるのだと。

扉の向こう側から声がした。聞き覚えの無い男の声だつた。

「君の名前を聞かせてくれないか？」

優しい声だと思った。きっと、この奥にいる世界の創造主は想像の通り慈愛に満ちた人物なのだろうと幻想すら抱いた。私は引き込まれるようにして、その扉に自分の名前を告げた。

その世界を見た。

世界は灰色で、言つてしまえば、壊れた人間の、壊れた世界だつ

た。

『こわれたにんげんの、こわれたせかい』

私は黒住の言葉から昔読んだ本の題名を思い出していた。それは児童文学にしてはかなりグロテスクで難解な話であり、読んだ当時は出てきた女の子の怖さに泣いていただけだったような気がする。人気はやはり無かつたらしく、その頃の友人にその本のことを聞いても知らないと一点張りに帰ってきただけだった。

本の内容はうつすらだが覚えている。暗い世界に血みどろの女子、それに白と黒の手に、灰色の扉が出てきた話だった。かなり長い話で、確かにその部分はプロローグな部分だったはずだ。村の村長が扉の中に入つて、その後……どういう話だったかは覚えていない。強烈なイメージがあるのはそのプロローグ部分だけで、あとはほとんど絵本の世界だったような気がする。比喩するならば、そう、キリスト教の聖典、聖書のような……。

頭が急に痛くなつた。ベッドに顔を埋めて思考を止めた。

黒住からの頼みは非常に抽象的で、聞いている私は理解に苦しんだ。いや、もとより理解するべきものだつたのかも分からぬくらいだ。

彼の『世界を壊して欲しい』という願いの内容は実に簡単なもので、自分のする行動の邪魔にならないように白椿さんを庇護して欲しいとのことだった。一体どの辺りが彼の願いと直結しているのか分からぬが、とにかく彼女が邪魔になるらしい。正直意味が分からぬ。

今日はもう遅かつたので白椿さんに一通メールだけ入れて帰宅したが、庇護しろと言わても具体的な内容が思いつかないのが現状だった。邪魔になる、ということだから、白椿さんが何かをしてしまふのかとも思えるが、事実上彼女と人間的に繋がっているのはそ

う多くなく、黒住が対象にしそうな人は思い当たりが無い。それに加え、黒住と会ったのは本当に久しぶりだった。今更白椿さんとのつながりがあるとも正直思えない。

だとするならば、第三者の介入が最も可能性として掲示できるのだが、それでも思いつくのは偶然の産物くらいだった。

兎にも角にも、私は黒住の忠告を正面から受け入れることにして、明日から白椿さんを家に泊めることにした。

「……やつこえば」

黒住、といつひとでもう一つ思い出した。いや、本来はこちらのほうを懸念すべきだ。

連続誘拐事件

同一犯ではないだろうにしても、外国規模となつてくるともはや黒住の言つ偶然では恐らく片付けられない。犯人の動機も目的も全くの不明だが、獵奇的殺人事件があつたのちの事件だ。疑惑を抱かずにはいられない。

(でも、それにしたつて……)

偶然という要素を抜いて必然にしたつておかしい。日本全国規模で誘拐事件が起こつたのならば衝撃こそ大きいものの、まだ納得できる範囲だ。どこの大企業が謀反して兵でも上げれば無茶な想像ではあるが可能だ。しかし、これを世界全体と考えると難しい。食品会社であれ車会社であれ、全世界に店舗を広げる企業は少なくないが、やはり意図が計りかねない。

(違う……)

違和感を感じた。違う、もっと根本的な面から見直すべきだ。

確かに今回の誘拐事件は不可思議な部分が多い。それゆえに一貫性が無いと言つた黒住の言葉も肯定しがたい。

だが、それよりも重要なのは……。

気付いた。

私は思い立つと下の階のリビングに向かつた。目的は新聞紙。優等生気取りの私であるが、実は世間には疎い。ゆえに新聞やテレビを利用することは少ないために、親に場所を聞くしかない。もしかしたら新聞紙を取つていないかも知れない。自分のそういう面の無頓着さに今更呪いをかけたくなる。これで優等生を名乗っていたのだから笑える。本当に微笑してしまいそうだった。

一階に降りてリビングに駆け込む……が、そこには誰もいなかつた。時計を見る。夜中の十時を回つてゐるために流石の父親も帰宅している時間だ。そうでなくとも母親はいる。コンビニにでも出かけたのかと思ったが、そもそも夫婦そろつてコンビニに行くなどと、いう暴挙に打つて出るほどフレンドリーな家族ではない。

寝室だらうか。私は一度降りた階段を再び駆け上がる。そして両親が寝る寝室のドアを開けたが、やはり中は無人だった。整つたベッドがやけに寂しい。ランプも付いていなかつたので、就寝前といふわけではなさそうだ。

すれば、どこに行つたというのだろうか。私が風邪を引いていた時もそうだったが、大抵連絡が無い外出の時は置手紙が置かれるのが家の常識だつた。それすらも無いということは、……思いつかい。

とりあえずは通勤先で何かがあつたのだろうと結論付けておくことにした。

新聞紙はリビングの端にまとめて置いてあつた。紙の感触が妙に懐かしい。テレビ欄を裏に向けて、見出しが一番大きい順に見ていく。政治経済から下らない話まで、マスコミは何でもネタにしたが

る。これを疎ましいと思う人が多いようだが、向こうも仕事なのだと割り切るべきだと私は思う。実際にやつてきたら私も嫌がるだろうが。

ページをめくつていぐ。すべてのページを見終わった。無駄にテレビ欄まで見てしまった。しかし、それでも私の望んだ結果は得られなかつた。いや、逆に捕らえれば得られたのかもしない。

一番の問題は、そこにあつた。

黒住の言葉を思い出す。

『東京都でも何件か起きているが、何よりも北海道から沖縄、それどころか話によれば中国やハワイのほうでも起きているらしい』
注目すべき点は前者だ。日本で東京で何件か、それに加えて北から南までときた。それほど重大な事件が新聞紙に載つていなかつた。そこで思い出したことがある。白椿夫妻を殺害した成田空港での一件だが、あれもどうでもいいで片付けられるものじゃない。何故自分が疑問を抱かなかつたのかは不明だが、成田空港を閉鎖し、さらにはその内部での殺人事件。いや、もっと以前に戻るべきである。都内の白椿夫妻が起こした獵奇殺人の方がもつと規模が大きい。町一つがゴーストタウンとなつたあの事件が一ヶ月やそこらで解決した。黒住はそれは黒住が得た地位と権力の力だと言つていたが、『現実でそんなことが出来るわけが無い』。それに納得した自分こそもつとも現実から離れているのかもしねり。それもこれも、すべては灰田純一にまつわるものせいだ。

(一体私は何を考えていたの?)

深刻な自己嫌悪に陥りそうになり、思わず頭を抱えた。歯軋りの音すら聞こえてくる。それに混じつて、荒い呼吸の音も聞こえてきた。

結論は単純明快。異常だつた。

朱に交われば赤くなるということだ。異常と関ればこちらも異常

になつたか、物事に疑問を抱かなくなつた。何が優等生だ。ビニが優等生だ。何もかもが、おかしい。

それだけか？ 本当にそれだけだつたか？

一度湧き出した疑問の水は留まることを知らない。許容できる範囲をゆうに超え、頭を侵食していく。何が起きているのかまったく分からぬ。目の前の光景が回っているはず無いのに、ぐるぐると回転しているように見えた。

まるで、壊れた世界のようだつた。

「まだ氣付かない。まだ氣付かない。君にこうして出来るのは一度目だろう。一体その間にどれだけの時間があつただろうか。それでもまだ氣付かない」

こつもの通り、音は無かつた。

「一人の男は音楽家だつた。ある日彼は音楽に対して一切の興味を失つてしまつた。彼はそのことに疑問を抱いた。自分はこんななんじやなかつた、もつと出来る人間だつたはずだと。しかし、彼の疑問はおかしかつた。それは何故だらうか」

それはあまりに抽象的な例だつた。しかし、私には彼の意図するところが理解できた。

「そうだ、元々彼は音楽家じゃなかつたんだ。ただ、そういう雰囲気の中にいただけだつた。音楽を作つて、楽器を弾いて、歌まで歌つた。立派に音楽家と呼べそうだが、彼はそれでも音楽家じゃなかつたんだ。理由は一つだ。彼は音楽をやつていただけだつたからだ。ただ、そつしたいだけで、それ以上も以下も無かつた」

だが彼はそんな自分に疑問を抱いた。自分はこんな人間ではなか

つたと。しかし、その疑問こそ破綻していることに気が付けなかつた。

「彼が音楽を止めた時点で彼は音楽家でないのだから、音楽が出来なくて当然だ。そして自分が音楽が出来ないと知つた時、彼は自分がおかしくなつてゐることに気付き、苦惱する。その問い合わせおかしい」と僕は以前言つた。無論違う状況ではあつたけどね。それは何故なのか。彼が音楽家ならば、彼が音楽が出来なくなることに疑問を持つのは当然と言えよう。これは哲学思考が必要な問題じやない。もつと単純な答えが用意されているんだ」

そう知つても、疑問は止まらなかつた。何故なら彼は、音楽家ではなかつたからだ。

「スランプ。これが答えた。音楽家であろうがスポーツ選手であろうが画家であろうが、スペシャリストに誰しも訪れる壁さ。彼はそのことを理解しておきながら、自分が音楽を出来ないことに疑問を持つた。これは、異常だ」

その瞬間から、彼は音楽を止めたことになる。完全な自己否定だ。

「だから彼は音楽家ではなかつた。他の何かだつたのさ。そうして嘘の自分を壊して、彼は世界の外へと飛び出した。そこが地獄か天国かは分からぬ。だが、それが彼にとっての真の世界であることは間違ひないだろう。これを僕ら、灰色の世界の住民はこう呼ぶ。『セルフディストラクション』とね」

「……そして、それを補助するのが、灰田一家の仕事、つてわけ

「さあね、正直僕の世界は僕でも計り知れないから」「最悪ねそれは」

「そうだね」と灰田は薄く笑う。そこにはもう何もかもが消え失せ、たつた一つ残った真実だけが浮かんでいた。

「私は、その、貴方の仕事の対象だったわけ。私は学生で、何の得意不得意も無い人間なのに良く見極めたわね」

「その言い草、まるで自分が異常だということに気付いていたみたいだね」

「まさか、私はただの優等生よ」

「これでもなお、自分を優等生と呼ぶか。ま、僕も君がそんな簡単な人間じやないと分かつていたけどね」

傍から聞いたら何の会話か解せないことだろう。そんな誰にも分からぬ会話が、きっとこの先も続いていく。彼と出会い、口を開くたびに。そんな気がした。

「今一度問おう。君にとって、優等生と天才の違いとは何だ」

その問いは、いつもと同じく唐突で意味不明で、ほんの少しの違いがあった。

「そうね……」

だから、私も今ばかりは少し違った。まるで、自分が優等生で無くなつたみたいだった。

「勇者と、魔王。世界と、神。何よりも、私と、あんたのことよ」

案の定彼は笑つた。大きく、顎が外れるんじゃないかと思うほどにその整つた顔をゆがめた。嘲笑しているんじゃないとすぐに分かる。彼は、喜んでいる。

いつだつただろうか、私は彼といる時にたまに映画のフィルムに巻き込まれたような感覚がすると思ったことがある。それは、彼に感じる比喩でもあつたのだが、今分かつた。これは紛れも無く、彼の世界に巻き込まれていたのだと。

「たまご」と「わとり」という話があるだろう?」

またも唐突に話を切り出してきた。もう慣れっこである。私はやれに静かに頷いた。

「たまごが先なのか、にわとりが先なのか……。その問いは簡単だ、にわとりが先だ。何故なら神がその前に存在し、神は生物を創造したからだ。それはたまごではなかつた。

では、問題だ。『世界と神はどうちうらが先に生まれたのか』

私はその問い合わせることを延期する。

「それは、私への挑戦と受け取つて良いのね。眞実に気付いた音楽家は何に化けるか分からぬわよ、覚悟しておいたほうがいいわ」「構わないさ。君が何であれ、僕の望む結果になるだらうから」

彼の望む結果とは一体どのようなものだらうか。悲しくも微笑む彼の表情からは全く察せ無い。私はその今まで見せなかつた表情に思わずたじろいだ。これが、彼の檀上なのだ。今まで傍観することで恐怖を味わつてきたその壇の上に、私は今立つている。

その私は、疑問を口にした。

「この物語は一体どういふ話なの?」

脈絡の無い、自分で言つていてわけの分らない問いだった。し

かし、勿論彼には通じた。何故なら彼は

「世界の始まりと、終わりの話だよ」

神だから。

。

異変なんてものはもう何も怖くないと思っていた。白椿夫妻が目の前で死に、連續誘拐事件が起き、灰田純一が現れ、様々な世界が壊れていったのを目の当たりにしたのだ。これ以上、怖いものなど無いと思っていた。

灰田は消え、就寝し、思いのほか良くな眠れたその翌朝。リビングの光景に思わず悲鳴を上げたくなつた。ボロボロにされたソファー。割れた食器。床に散らばるガラス。へしゃげた机。見る影も無い観葉植物。ノイズ音を撒き散らすテレビ。倒れている両親。

家庭という世界が崩壊しているのを目の奥に焼き付けた。光景がゆがむ。涙なんかのせいじゃなかつた。単純に壊れているからだつた。

一撃だつたのだろう。両親の身体に外傷は少ないよう見えた。しかし、その割には血だらけだつた。特有の鉄分の臭いが鼻に付く。ここまで臭いものだとは思わなかつた。

頭がふらふらする。足がもつれそうになるが必死に堪えた。ここで倒れてしまつてはダメだ、最悪でも、あの男を。

破壊された部屋の中心で男は拳銃を手の中で遊んでいた。そいえば微かに煙の臭いがする。彼は煙草を吸わないだろうから、きっとあの鉛からこの臭いはするのだろう。まだ血の臭いのほうがましだつた。

「……ぞけないでよ」

搾りだすような声だつた。自分でも信じられないくらいの憤りを感じていた。何を、どういうふうに日常を過ごせばここまで理不尽な光景に出くわせるだらうか。

しかしそこで私は自分自身の思考の奥深さに気が付いて舌打ちし

た。もう、ショックよりも憤慨のほうが勝っている。そんな自分が一番おろかなんじゃないかとも思う。一度深呼吸をする。こんな状況で落ち着けというほうが無理だが、目の前の男はそれを催促しているように思えた。

「……これは、流石の私も貴方に向けて包丁を向けかねないわよ」

「黒住」

信じて良いのか悪いのか、納得して良いのか悪いのか分からないうちには確かに彼の姿があった。見間違えようも無い。ミラー サングラスは光らなかつた。彼がここにいて、彼が拳銃を手に持つていて、部屋は破壊されていて、家庭が壊れていて、このどこに接点が無いと言えるだろうか。私には無い。あつたとしても、認めない。冷静さなどいつの昔に忘れてしまったように、黒住にたたみかける。

「灰田が昨日現れて、あつと私の世界は変わってしまったんだとは思つたわ。日常なんか、もうどうにも無いんじゃないかつて。思えば、白椿さんと一緒にいることすら日常とは違うんだから。でも、でもね、流石にこれは無いんじゃない？」

「……貴様は、悲しんでいるのか？」

「……なんですか？」

怒りはある。衝撃もある。だが。

「貴様の家庭という世界が崩壊したことに腹を立ててるのは確かだろう。だが、そこに両親の死という悲しみはあるのか？」

「そんなの……当たり前でしょ」

苦し紛れにも聞こえただろう。だが、私自身どう答えて良いか分

からなかつた。悲しいのか、悲しくないのか分からなかつた。でも、多分悲しいと思つた。それはどういう意味での悲しいなのか、やはり分からなかつたが。

黒住は見れば異常な冷静さをかもしだしている。どこか遠くを見ているような視線に、拳銃を持った手は人形のように動かない。自分の犯した行為がまるでその腕の最後の仕事のように、終わつた無機物のような雰囲気が出ていた。それでも彼が拳銃を床に落とさないのは何故だろうか。彼は首だけこちらに向けて言つた。

「幻想だ……」

死んでいるのではないだろうかと疑えるほど、氣力の抜けた声だつた。

「人を殺し、人が殺され、人が死んで……そんな世界に、悲しみが無いのは幻想だ。それは、ただ悲しみたくない人間が作り出した幻想世界だ」

「……」

「俺は優等生でも天才でも神でもないから分かる。本当の人間というものは、いかに自分を殺せたとしても、結局は悲しみ、後悔し、間違いを肯定し、成長していくはずだ。だがどうだ、世界は狂つた。壊れた人間しか住めない、壊れた世界になつてしまつた」

私は終始無言だった。彼の言葉に我を挟んではいけないと思つたのだ。

「壊れてない人間はこの世界に住めば、壊れてしまう。だから殺した

「どういうことよ」

「世界から追放したんだ。でなければ、世界は『異端』に満ちる」

意味が分からぬ。ファンタジーの世界ならば理解も可能だつたろうが、ここは現実だ。彼の言葉も現状も何も理解できない。それでも、冷静でいられる自分は間違ひなく彼の言ひ『生き残れる異端』だからなのだろう。

思考の川は、意外にもゆるやかに流れている。

「だから、私の両親を殺した、ってこと?」

「そうだ」

「殺さなければ、異端になつてしまふから?」

「そうだ」

……馬鹿くさくなつてきた。早々に警察に連絡した方が絶対に早いだろう。私はため息すらつく余裕無く、電話に向かつた。それを特に黒住は咎めはしなかつた。自分の権力でも信じているのだろうか、その態度にも無性に腹が立つた。

家の電話の子機を手に取る。110を押して、電話の呼び出し音が鳴り始める。

……出ない。110番がどこに繋がつてゐるのか知らないが、呼び出しに出ないとはなんという体たらくだ。何度もその後もかけてみたがコード音は一向に止まなかつた。

思わず後ろの黒住を見た。この男が成田空港の一件の秘密裏に出来たのは権力の力だと言つていたが、ならば警察を丸め込むことも可能なのだろう。あの余裕はそこから来ているに違ひないとthought。奥歯を噛み締めながら、してやられた、と心の中で呟く。子機を置いて、リビングを出た。

ならば、隣の家に行つて大人を呼んでもらう。証人にもなるし、これならば確実だ。靴を履いて、玄関のドアを開けた。瞬間だつた。

「…………あ」

か細い声を思わず上げてしまった。見た目、なんでもない光景。広がっているはずの日常。それはそこについた。なのに、強烈な虚無感に襲われる。

空が広かつた。鳥は飛んでいなかつた。道路は舗装されていた。車は走つてなかつた。軒並みが連なつていた。人は中にいないうだつた。

私は駆け足になり、隣の家のインター ホンを押した。しかし、予想通りというべきか、何度も押しても反応は無かつた。その隣の家、その隣の家と次々に近所を回つていつたが、やはりどの家も扉が開かれるることは無かつた。

まさか、と思う。私は無理矢理門を飛び越えて他人の家の庭に侵入した。ここまで来てしまつてもう自分を止められない。近くにあつた物干しをお振りかざして、ガラス窓を叩き割つた。ガラスが飛んだ。言つまでも無いが、命は無かつた。家中に土足のまま入つた。じゅうたんの感覚が新しい、掃除機をかけたあとのようなだ。しかし、掃除機はコンセントに刺さつたまま、その使い手はどこにもいなかつた。キッチン、リビング、玄関、トイレ、どこにもいなかつた。階段を駆け上がる。焦りのせいか、一度落ちた。二階にも誰もいなかつた。土足で入つたためについた泥が落ちていても、もはや罪悪感は無かつた。

疲れ果てて庭に出る。割れたガラスの破片がやけに虚しく感じる。

「知つているか」

田の前から低い声がした。顔を上げる気力も無かつた。

「世界はいくつもある。銀河、という意味合いではない。次元の問題でもない。『世界』という意味でだ。神は何人もいて、争いあつ

ている。だから小さな世界はそれより大きな世界に喰われる。そして、世界は変わっていく

だからなんだというのだ、それで、私に何をしろといつのだ。

「俺たちのいた世界は、喰われたんだ。だからそこに適さない『常人』は消えた。この世界の創造主が望む人間だけが残った」

「……でも、私の親は貴方に殺された。これはどう説明するの」

自分でも驚くほど無機質な音だった。

「因果だ」

は？

「因果を作る必要があった。誰かがこの世界で死を体験することによって、どこかを破綻させなければならなかつた」

「……何よそれ。さつきと言つてること違つじやない」

「嘘をついた」

「……そう」

意外だったが、彼も思つところがあるのだろう。

「宣言しておぐ。この世界が壊れたとき、貴様の両親は必ず戻つてくれる。この発言に、『嘘は無い』」

悪意が、無かつた。もう諦めたほうがいいのだろうか。この世界はとつくておかしくて、私たちはとつくて壊れていて、そう認めるのがいいのだろうか。

「私の親は……死んだんじゃないの？」

「違う。追放しただけだ。言つただろう。悪意とは常に他の悪意に向けられるべきなのだ。貴様は悪じやない。悪いのは、世界を喰らつた神だ」

「分からぬ、分からぬのよ。ここが現実で、それを信じて良いのかダメなのか、何も分からぬのよ」

「ならそれでもいい。夢でも構わない。だが、破壊しなければ夢から覚めることは出来ないんだ」

「……誘拐事件は、これが結末？」

「恐らくはな。一晩にしてすべて消え去るとは俺も思わなかつた。失態だ、許せ」

「どうすればいいのだろうか……。

親を殺したこの男の言葉を信じて、わけのわからない話を信じて、ついていくのか？

本当に両親は死んでないのか？ あれだけの血を流しておいて、

『追放』なんて一文字で納得して良いのか？

私は優等生だ。こんな、馬鹿みたいな話に付き合つてゐる暇なんて……。

「白椿を助けに行かなければならぬ」

「……え？」

「やつは恐らく神の目に邪魔に写るだろうから、消される可能性がある。今や、ようじこを得た彼女は、神にとつては、な

「……」

もう、いいや。

「どうでもいい。優等生だとかなんとかいついていた時期もあつたが、所詮そんなのは嘘だ。私は私以外に有り得ないのだから、私でいればいい。

「……行きましょう」

最初、私はなんだつたのだつたか。

昔、私は何かが出来た。だが、隣にいた子がそれを私より上手く完成させた。だから私はそれを超えようと頑張つたが、やはり一步足りなかつた。そうして私は次のものに興味を持ち始め、それでも上手く出来た。だが、また違う隣の子が私より上手く完成させた。私はまた頑張つたが、やはり超えることは出来なかつた。

だつたら私はすべてのもので一番になるうと勤めた。それでも構わない。一億もいる人間の中で、私は常に一番ならば不満は無い。そうして学校では、常に五番以下を取り続けた。運動も、勉強も、趣味も。私に出来ないことは何も無かつた。本当に、何も無かつたのだ。

それを世間ではどういうのか知らないで、私は優等生を気取つた。ずっと、そうだと思つていた。模範となり、他人を下に置ける人間だと思つていた。

しかし、その技術を真似できても、『私を真似ることは不可能』だということに私は気付かずに進んでいた。どれだけ遠くに進んだらうか。知らないうちに、闇の底にいた。

そんな幻想を、抱かされそうになつた時期があつた。

だが、私はそれでも優等生だつた。ここだ、ここなのだろう。灰田純一が私に眼を付け、私がこの世界にいられる理由というのは。自分が異端か異端じやないかと聞かれれば、勿論異端だと答えるだろう。天才と世間から呼ばれる分類は例外なく異端なのだ。他と違つて桁違いの能力を持つ人間は異端に違ひないのだから。

ならば、私は何だつたのか。言われるまでも無い。

『優等生の天才だつた』。

だから私は黒住と歩こう。この世界を壊した馬鹿を殴りに行こう。
そして、私が救おうじゃないか。それが、模範となる答えなのだから。

「先に宣言しておくわ。天才はね、どんなに努力しても、優等生には適わないのよ」

もうどうでもいい。誰かが死ぬなら死ねば良い。誰かが助かるなら助かれば良い。その間、私は私でいいだけの話なのだから。
それが、『優等生の天才』という異端の考えだ。

人はいない。けれど風は吹いているようで、髪の毛が右へと大きく揺れた。荒野に吹き荒れる風はこんな感じなのだろうか。排気ガスを吸つていらない早朝の空気が昼過ぎになつても続いていたのは良いのやら悪いのやら。気分は最悪だが、世界はある意味最高に綺麗だった。

やつてきたのは私が通う都立高校の校門前。門は閉じており、言わずもがなインターホンを押しても誰も出るはずがない。異端者と呼ばれる分類はこれほどまでに少なかつたのかと拍子抜けも出来そうだった。それくらい世界からは人が消えていた。

黒住は横で黙つてじっと学校を見つめていた。彼の話ではここに白椿さんと『神』がいるらしい。舞台の選択としては成功だらうと思つ。きっと、終わつた場所から始めるのだろう。

まず黒住が校門を飛び越えた。私も持ち前の運動神経あとに続いた。つい一ヶ月前までは律儀にインターホンを押して謝つて入つたというのに皮肉な話だつた。

飛び越えると校庭だ。ここから校舎までは約一百メートルはある。地味に時間がかかる距離だ。普段は部活動で賑わつているのだが、無論今は閑散としている。

校舎に足を踏み入れた。今までの土の感触とは違う冷たいものだつた。誰もいない校舎に一人分の足音だけがまるで雨音のように響く。

三階に上がつた時、妙な威圧感を感じた。いや、きっと高圧的なものではなく、虚無感から湧き上がる近寄りがたい雰囲気を指す威圧感だ。自分が今までいた世界とは違うという絶対的確信を持つた。

「灰色の、世界ね」

思わず私はそうつぶやいていた。

世界にとつての色とはなんだろうかと考える。彩色豊かな自然の生み出す天然物か、初めて世界が創られてから今まで不滅かつ永久の姿を保つ海や空や大地か。いや、極端に言つてしまえば人間の作り出したものだって世界にとつて立派な色となるだろ。

しかし、その全てがあるこの世界には色が無い。唯一灰色を除いて。単純に漫画の世界の解釈でいけば、白が光や善良を表し、黒は闇や悪を表す。間違つてはいないだろ。ならば灰色はと考えた時、人々は虚無と答えるだろ。まさにそんな感じだ。つまり世界に灰色しか無いこの世界はまさに虚無そのもの、優しく表現しても今まで体験した中で最も寂しい世界だつた。

世界にとつての色とは、人々だ。賑わう人々だ。喜んで落ち込んで怒つて悲しんで、時には人を助け、時には人を殺したりする。そんな人の彩色で世界は色付くのだろ。人のいない世界は、こんなにも寂しい。

「さて、ここからは別行動にしよう」

黒住が立ち止まつて言つ。私はその意図を掴みかねて何故と問うた。彼と別行動を取ることは正直心情思わしくない。今からあの腐れ野郎と対面すると思うだけで、主に三つくらいの意味で震えが来るので。黒住がいるだけでも大分支えになつていたのだ。

「目的を忘れたか？　今は神の暴挙を止めるより白椿の救出が先だ」

「そういえば貴方、何故ここに白椿さんがいると分かつたの？」
「聞くまでもないだろ。ここに神がいるからだ」

「そういうふうやつは、何故ここに白椿さんいる？」

「なら何故ここに神がいると分かったの？」

「俺が俺だからだ」

なんと不思議に説得力のある言葉。黒住が言つのだから恐りしく白椿さんはここにいるのだろう。いや、間違いなくいる。

「分かつたわ。二手に別れて探せつてことね。連絡は取れるの？」

「取れる。まさかジヤミングを仕掛けるほど壊れてないだろ？」

「要塞戦じやあるまいしね」

「俺は北側校舎を探す。貴様は南を」

「了解したわ」

冷たい、本当に冷たい校舎だと菊乃は思つた。こんな世界のどこに救いがあつて、どこに望みがあつて、どこに温かさがあつて、どこに、彼の結末はあるのだろうか。きっと間違つていた。望んでいたものときつと違つっていた。

四階建て校舎の一階。そこに灰田純一はいた。購買部の前で、パンを片手に廊下の壁に背をかけていた。酷い有様だった。死人のような目で身体を押さえつけていた。しかしそれでも笑みは彼の顔に浮かび、時折くすくすと笑い声までも聞こえる。

途中、灰田は菊乃に気付いて顔を上げた。菊乃は灰田が招待した人物ではなかつた。彼は落胆したように視線を床に戻す。その行為

が無性に菊乃にとつて苛立たしかつた。

「一体、何をしたんですか」

「…………

邪魔者を見る目だつた。用は無い、立ち去れと目が語つてゐる。だが、菊乃は下がらない。

「分かつてますよ。あなたの望みも、この世界の仕組みも。気持ちは全然分かるつていうか、前まではあたしの望みもあなたと変わらなかつた。だから分かります。でも、もう良いんじやないです。あたしたちはかつて無いほどに結束できた。先輩を、先輩を中心として、何かが繋がれた。普遍を手に入れた。それで、何が不満だつたんですか？」

「……分かる？　ははっ、ふざけた言葉だね。何が不満か、そんなものを聞いてどうするんだい？　それが分からぬ時点で、君は僕を、僕らを理解していいない」

「理解させる気はあるんですか」

「無いね。そんな努力水の泡にしかならないし」

「じゃあ多分あたしは間違つてるんでしょうな。でも、これだけは分かりますよ。この方法は度を越えてる。今すぐ止めてください」

それを灰田は鼻で笑つた。心底馬鹿にしたような笑顔で言つ。

「何を、どう止めろと？　これは僕の望みではあるが、僕の意志ではないのさ。世界が、そうなつてしまつただけの話」

「世界は、あなたじやないんですか」

「……残念ながらね」

ふう、とため息を吐いて灰田は立ち上がつた。大分長い時間座つ

ていたのか、かすかに膝が揺れているような気が菊乃にはした。灰田は背伸びをすると、視線を細めて廊下の向こう側を指差した。菊乃はそちらを一瞥したが、特別何も無い。

「君がここにいる必要は無いだろう。さっさと去るが良いさ。そこを真っ直ぐ行った突き当たりの階段を上って三階、正面に図書室がある。君の仕事は、きっとここにある」

「……仕事？」

「……」

灰田はもう何も答えない。脱力したように再び廊下の壁に寄りかかって座った。本当に死人のようだと菊乃は思つ。

もう一度灰田が指差したほうを向いた。虚空の彼方へと消え去りそうな遠い廊下。

(図書室……ですか)

何があるのかは分からぬ。だが、彼女は進むことにした。

31・白椿菊乃（前書き）

大いにお待たせしました。最終章です。

菊乃は自分の目をまず疑い、すぐに納得に至った。図書室はしんとして静まり返つており、人がいないのはおろかあるべき本までが見当たらなかつた。本の匂いはまだ微かにするから、きっと世界が本だけを消してしまつたのだろうと菊乃は思つた。もうそんなことに驚くことすら出来ない。

菊乃の朝は早朝六時から始まる。両親を失つた彼女にとつては朝の時間はとても閑散としたもので、早く人肌に出会いたいと思うばかりに、少し距離のある学校にいつもより早めに家を出る。

そこからの時間は彼女にとつて1日で、いや一生と表現しても差し支え無いようなものになる。今まで存在にすら気付かれ無かつた彼女に声をかけてくる散歩中の老人に犬を連れた人々、何分か移動もすれば子どもたちとも挨拶を交わす日々。こんなことが幸せと感じるのは世間では小さくとも彼女にとつては大きな変化だった。

しかし、その日は外も家も大して変わらなかつた。自分一人が歩く音だけが聞こえて他には何もない。異常だつた。学校に到着してそれは確信に変わる。生徒どころか職員までいない。車は一台も駐車しておらず、言つまでもなく自転車も無い。菊乃は険しい顔で校内へと足を踏み入れたのだった。

そして今、まさに異常が普遍に変わろうとしている光景を目撃したのだ。今更本があるとか無いとか言えるほど日常を過ぐしてはいなかつた。

図書室の中を菊乃是散策し始める。灰田の言葉の意味は掴みかねるが、そのまま捉えればここには何かがあるはずなのだ。むしろ、『何もないことが何か』なのかもしれないとも菊乃は思つ。彼女自身身震いを起こすほど凍り付いた世界である。

景觀は本が無いために壮大したもので、たつた一冊残つた本を見つけるのには苦労しなかつた。まるで奇妙な演出家の施した罠に

も見えるくらい顕著な光景である。

やけに古く、落としでもしたらちぎれてしまいそうな本を慎重に手に取り題名を見た。そこには黒ずんだ文字で『こわれたにんげんのこわれたせかい』と記されている。聞いたことの無い題名だった。しかし、灰田が用意したと解釈すればやけに納得の行く題名でもある。菊乃のはカバーを開いて一ページ目を読む。

「彼女には夢があつた。けれどもその夢は彼女の住む世界では叶わない夢だから、彼女は世界を飛び出すための扉を求めた……」

不思議な始まり方をする内容だと菊乃は思った。

だが、プロローグらしきものが始まると内容は冒頭とは一変、何やらグロテスクな表現をする異世界の小説だった。

その話は長くは無かつたが、これ一つで十二分に物語が完結していた。第一章を開けば、唐突に物語はリアルに走っていた。街の風景が描写されている部分を読めば菊乃にも容易にそれが今の世界のものだと想像出来た。まさに都会そのものだ。ただ一つ違い、まさに一致していたのは、『人間』という生物が世界から欠落している点である。

木々は緑を生い茂り、空には鳥類の鳴き声、しかしそれでも地上の様子はビルの並木道のようで、発展した今の日本を感じさせる。ページを進めれば世界情勢が記されていて、読めばまさにこの地球そのものの歴史だった。

これはまるで創世記のようだと菊乃は思つ。

「けど、やつぱり人がいない……」

景観の変化、建物や文化、食の歴史、現在の環境問題、その他聞き覚えのある言葉が並べられているがその中心になった人物名はおろか、まるで『世界が自分で進化した』かのような文章で物語の設

定について書かれている。加えてプロローグとビのよつな繋がりがあるのか全くと言って良いほど理解が出来ない。

パラパラと適当にページを飛ばしてみる。何百ページ目かに人が現れた。人形を二つ、男と女の人形を抱えた女の子だった。初めて人が現れたというのに、彼女については物語はほとんど触れない。説明された文は、毎日それしかない人形でおままごとのような遊びを繰り返しているだけ、とのことだった。そのうち女の子は段々と大きくなつていき、人形も段々と使わなくなつていった。しかし、彼女にはそれ以外の方法で遊ぶものが無かつたために、結局は週に一度ほどおままごとをして遊んでいた。

まるで彼女自身が人形に見えないこともなく、菊乃は思わず身震いする。著者の心情が計り知れない。狂者の書く文はここまで狂っているのかと冷や汗すら伝る。古びたページに置いた自分の手が微かに震えているのを知つた。

物語はそれまで狂つているにも関わらず普遍的に進んでいる。読んでいてそれが当然なのではないだらうかと思えるほど日常という空気に染み着いた異常。相も変わらず登場人物は一人のまだった。女の子は世界に一人。だが神様は彼女ではなく創世者であり、世界は世界として個々を持つ。そんな寂しい世界で彼女はひたすらにまごとをして遊んでいたのだ。ページがいくら進もうとその状態は変わらず、次々に変化していく世界とは無理に合わせたパズルのピースのような浮き具合が女の子から感じる。

……というのも、第三部辺りに入つてから視点が変わった。普通の一般人だ。世界の風景は今の時代と全く変わらず、背広姿のサラリーマンや店先で客呼びをする店主、小学生の登校風景からなにまで急激な変化を遂げて世界は今になつた。

第三部はどうやら世界の今を表した物語らしい。しかし、菊乃はそんなことよりも気になることがあつた。今まで主人公であつた女の子が本当に出てこない。またページを幾らか飛ばしてみるが、どうやら第三部では登場しないようだつた。記載されている事の大半

を菊乃は知識として知っていたため、分厚い本の半分程度まで飛ばして読んだ。

すると、唐突に女の子は登場した。既に身体も成長し、立派な女学生となつたようだつた。しかし、やはり彼女はままごとをしていた。

(これ……もしかして)

皮肉な話に思い当たつた。菊乃にとってそれは幾分の余地なく迷惑な話で、だからこそこれを用意した人物を考えた時、妙に納得が行つてしまつたのかも知れなかつた。

「新しい人形が欲しくてたまらなかつた……。出来ればおまま」との相手も欲しかつた。けど、けれども彼女はそれを望んでもどうしようもないつて知つていたから、世界に一人だつた……」

「 そう、それが白椿菊乃という人間に与えられた運命」

突然声がして菊乃はそこから飛び退いた。

「だ、誰？」

警戒心を剥き出しにする。こんな場所に現れるのはよほど狂つた人間だけだ。しかし、その姿を認めた直後、菊乃は理解した。このようなパターンも有り得るのだと。

「久しぶり……と言つべきなのかな。菊乃」

「覚えてるわよね、勿論」

「……」

菊乃の両親が、そこにいた。最後に見た血まみれの姿ではなく、

衣服も調つた、まるで始めから何もなくそこについて当たり前の存在のようになんでいた。別段不思議とも思わないのは、勿論彼女自身がここにいる理由に繋がるのだろう。同一の存在と扱われていることが菊乃には気分の悪いものだった。

小さく嘆息しながら囁ひ。

「死人すら招き入れられるんですね、ここは」

意外ではない。ゾンビのような風貌を予想もしたが、両親がいざれば関つてくるだらうことを菊乃は予想していた。恐らくそれが、最後だということも。

「私たちがここにいる理由、菊乃には分かるか？」

唐突に父親のほうがそう切り出した。その表情は柔らかくない。子どもを叱る親のようだと菊乃は思い、そういうえばこの人は紛れもない親だつたと自分で苦笑した。

「さしづめ……しきたりのことですかね？」

「その通りだ」

やはり、と思わず視線を下に逸らした。昔から菊乃の両親が彼女に対して言うことは決まって白椿のしきたりのことだつた。熱狂的な信者ともなれば、その元で育てられた菊乃も影響を受けざるを得なかつたが、もう今となつては彼女の気持ちの蚊帳の外にある話である。だが、反して菊乃には自分の立場がもう既に縁を切れないレベルのものだと分かつていた。だからこそ、両親という『しきたり』に対して遠慮はなくなつていた。

「元々あたしは白椿のしきたりなんぞに興味も関心も無かつたんで

すよ。ま、言つまでも無いでしょうけど。ただ運命だから、あなた達の腹の中から生まれてきた因果だから従うしかないと思ってだけです。けど、あたしはもう違う人間だ。今更どうのいうの言われたって考えは微塵も変わりませんから

「なら、菊乃の言つ先輩がいなくなつたりどりするのだ？」

「……え？」

予想だにしなかつた問いかげかけられ、菊乃の頭は軽いパンチクを起こした。父親の言葉は構わず続く。

「お前は私たちの言つとも聞かずに勝手に自立し、白椿の運命から逃れたと思っているだろうが、それは違う。呪いは確かに存在し、そしてそれはお前を必ず蝕んで行くことだろ？ すれば、最初にお前を襲うのは、『よりどりの消失』だ。そうなつたとき、お前は一体どうするのだ？」

「よつどりの……消失」

頭の中でその言葉を反芻する。脳髄に響き渡る苦い感覚に思わず顔をしかめる。考えたことも無かつたのだ。自分が先輩と呼ぶ彼女のおかげですべての因果の鎖から断ち切られたと乱舞するほど喜んだものだが、結局菊乃はその『鍼』はり無しでは安心して眠ることも出来ないのだ。

なら、無くなつたらどうだ。その光景を想像すると、菊乃は背中に嫌な空気が走つていくを感じた。

「忘れたのか。私たちは常に孤立し、孤独している。人形が一つや二つ増えたところで何も変わらないのだよ」

「ち、違う。先輩は人形なんかじゃない。あたしを真っ向から見てくれる、きちんとした人だ！」

「自惚れるな菊乃。一度や二度助けてもらつたからと言つて、向こ

うの気持ちなど分かるわけが無いだろう。私も人間と関わったことが無いわけではないが、その度に裏切られてきたのだ。だからこそ、この運命に従つことに決めた。ずっと先の未来が、幸せであるためにな」

菊乃是大きく頭蓋を揺さぶる。そんな言葉など聞きたくは無かつた。どの口が幸せなどという美に満ちた言葉を吐けるのか診てやりたいくらいだつた。洗脳だ、これは洗脳だつた。幾度と無く繰り返されてきた観念を植え付けるための儀式。久しぶりに聞いたその言葉が、頭では必死に否定していても、心が甘美に受け取る。

「私たちには幸せが訪れない。温かみが無い。ならば、せめて未来へと繋げていくのが、業というものではないか？」

白椿家曰く、呪いは代を継ぐたびに薄くなつていいくらしい。今までの白椿家はすべてその業に従い、自分と周りを巻き込んで大殺戮劇を行つてきたのだ。男と女の子を産み、近親相姦させ、生き延びてきたのだ。それでも家を潰さないだけの努力をするのは、一体どこの根性のせいなのだろうか。

菊乃是終わりにしようと思つてゐる。自分の幸せが無いのは嫌だ。他人を不幸にするのも嫌だ。だから彼女は必死に抗つて、光を手に入れた。大体最初からこのしきたりは一から十まで破綻しているのだ。自分たちの未来を変えるために周りを不幸にして死ぬ。意味が分からぬ。

それに、その巻き沿いを食らうのは一般人だけではないのだ。一番破綻しているのは、自分の子さえも不幸にするということ。

「あなたたちが幸せにしたいのは、何代後の白椿なんですか……。少なくともあなたたちの未来であつたはずのあたしは超絶的に不幸でしたよ。もう、認識するのも嫌になるくらいに。それで、まだ続

けようとしているのですか。この茶番にすらなりきれない腐った循環

を

「お前……っ」

父親の眉間にしわが寄る。憤怒しているようだ。

「あたしは自分の子どもなんて幸せにする気は微塵も無い。あなたたちと同じですよ。他人のために、次なんて見えないもののために自分を不幸にするつもりなんて無い」

「だからお前は分かつていいと言っているんだ。そんなことをしても呪いはお前を不幸にする。だからこそ、幸せになれなかつた私たちの分を未来に託して……」

「あたし 子なんて残せませんよ？」

その言葉に両親は凍りついた。一方の菊乃は艶美な微笑を浮かべている。勝った、とでも言わんばかりの自信に満ちた目だった。

今回と前回の大きな違いを菊乃はすべてと出会う前から知つていた。そう、今回は近親相姦の相手がいない。無言で母親のほうを菊乃は睨みつける。

「呪いは失敗したんじゃないですかね？ 白椿家は滅びちゃいますよ？」

「……ふ、ふふはっ」

父親が突然笑い出した。だが、その目だけはかすかに狂氣の色に染まっている。その横で母親のほうは無機質に菊乃を見つめていた。あまりにも氣味が悪く、菊乃は一步後ずさむ。が、そこは壁だった。そういうえば手に取った本は図書室の一番奥にあったのだ。

「私はここに、『しきたりを守らせるために』来たのだと言つただ

既に父親は笑っていない。どこか悲しんでいるようにも見えるが、錯覚だらう。彼は間違いなく喜んでいる。そう菊乃が直感できるほど、彼女の目の前の一人は無機質だった。

「私が、子を作れば良いのだ」

「……あつ」

叫んでいる暇も無い。父親は菊乃に突撃し、壁にその身体を押し付けた。

父親のオヤジ特有の吐息が顔に吹きかかる。そのぞっとする臭いに菊乃は激しく暴れ出した。しかし父親の力は強く振り払え無い。

「いやつ……止めてえ！！」

「暴れるな！ 子が出来ればお前の嫌いな孤独は無くなるんだぞ、常に誰かと過ごすことが出来るんだぞ」

「そんなの違う！ あたしには先輩がいるし、バイトの人たちがいるし、学校のみんなだって、黒住だっている！」

その悲痛かつ力に満ち溢れた叫びに父親の動きが止まつた。信じられないものを見るかのような目で菊乃を睨みつける。しかし菊乃のも襲われているにも関わらず、力強い瞳で睨み返した。

「……だから、もうあなたたちはいらない。私はもう、寂しくないの」

因果の鎖から放たれた菊乃は未だに縛られる彼らよりも間違いなく強かつた。父親が苦虫を潰したような表情になる。菊乃の言葉が

よっぽど衝撃的だったのか、視線を忙しなく動かし口も何かが出そうなところで行き来している。だが、何を決意したのか苦悶の声を上げて菊乃の衣服に再びつかみかかった。

「そうだ……お前の意見など今更だ。黙つて子は親に従えば……っ！」

「いやっ！　あたしはもう異端なんかに見られたく無い！　お願いでだから、もうあたしに関わってこないで！」

「ならここで身ごもれ菊乃お！」

瞬間だった。

菊乃の鼓膜に父親の声以外の音が響く。一瞬それがなんなのか分からなかつたが、目の前で騒ぎ立てていた父親すら首を曲げて動きを止めていた。だが菊乃彼女自身も抜け出すタイミングを失つて音のしたほうに間抜けな顔で視線を送っていた。父親の口元がわなわなと震えているのが視界に映つていて。菊乃はその先を見た。

「その、なんだ。情事はそこの死体とあの世で楽しんでくるといい

「……黒、住」

父親は菊乃が口にしようとした驚きの言葉を震える声で呟くように言った。視線は黒住のほうを見てはいなかつた。黒住の足元、そこには菊乃も父親も見慣れているはずの女の姿が無残な光景で映し出されている。思わず二人とも息を呑んだ。血まみれな女性の身体は不気味に妖艶で、黒住はそれをゴミでも扱つよう蹴り飛ばした。

「貴様……なんのつもりだ」

父親がうめくような声で黒住に言った。流石の彼も悪い汗を流さずにはいられなかつた。目の前の惨状はあまりに現実味が無い。

菊乃はそれを呆けた顔でしばらく見つめていたが、ふと気付くとゆっくりと身を横に倒した。彼女も一度目といえど、縁を切りた両親といえど、流石に堪えたようだった。

その中で黒住だけが一人冷たい目をどこにでもなく送り続ける。

「俺がなんのつもりでこのようなことをしたか、だと？ 脳みそが過疎状態なのは分かっていたが、よもやここまでとは思わなかつたぞ白椿」

黒住は本気で絶望しているのか嘆息を漏らしていた。やれやれといった様子で話す。

「俺にとって白椿は敵かたきであり敵てきだ。それ以外に理由が必要とでも？」
「貴様の理由は果たされただろう。我々は今やこの世界ではまだしも本来では肉体のない魂。それすらも貴様は消し去ろうというのか」「むしろそういう理由を俺は問いたいな。積年の悪意がそもそも簡単に無くなると思ったのか？」

「くつ……」

苦悶の表情を浮かべて言葉に詰まる父親に黒住は拳銃の銃口を向ける。

父親はしばらくそれを歯を食いしばって睨みつけていたが、ふいに諦めたように肩の力を落とした。瞳には死の色が移っている。完全に諦観したようだつた。腹の奥から出すよつな重い声で、黒住に對してつぶやくように言った。

「黒住の行動は理解できない……私たちは同じ場所で生まれ、同じ場所で育つていったはずなのだ。それなのに、何故貴様らはそうして私たちの邪魔をするんだ。本来であれば、黒住も同様のことをし

なればならないはずなのに……」「

黒住はそれを鼻で笑った。

「そうだな、そちらの価値観で言えば、狂っているのは俺たちのほうなのだろう。だが忘れるな、俺の師がどうだったかは知らないが、俺は元より黒住ではない」

「……そうか。貴様は養子だつたな。良く普通の人間でありながら、ここまで私たちと関わってくれたものだ。今更ながら感心するよ」

その言葉には黒住は苦い表情をした。首を左右に一度振り、何か名残惜しそうな仕草で拳銃をもう一度構えなおす。

「言つたな……俺は師の意思を継いだまでだ。白椿などとは本当は関りたくは無かつた。これは嘘だ。俺が俺自身についた最初で最後の嘘だ。最初で最後の……自分に対する悪意だ」

「そうかい」

もう父親の瞳には生気が感じられないと言つた黒住は、ゆっくりと引き金をしほる。これで最後だ、これで最後だと心の中で反芻する。自分が大嫌いな嘘をつき続けるのもこれで終わりにしよう、やう最後に呟いていた。

「人殺しをして悲しまない人なんていない。人を殺されて悲しまない人なんていらない。そんな世界に、次は生まれてくるといい。貴様の娘も一緒にな」

「ははっ、そんなことにはならんよ。娘だけなら、可能かもしれないがな。その時は君に任せることにするよ、私たちはもう疲れた」「ふん。難題だが、善処しよう。無論これに、嘘は無い」

パンツ。

軽快で、重い音が鳴つた。

黒住の田の前には何も無くなつた。血みどろの女も、最後に言葉を託した男も、口うるさい少女も、ただ虚しさだけが図書室に残り、吹いてもないのに風が通り抜けていくようだつた。掴んでいた拳銃が床に落ちる。黒住はそれを目にも留めない。

思えばこの重みを手放したのはいつ以来だろうかと黒住は記憶を巡る。師である人物の意志を継ぐと決めてからこの方、手放したことは無かつたかもしない。人殺しをするたびに重くなつていく一発一発を詰めていき、いつしか重みを感じないまでに重くなつていったそれは、思いのほか床の上では音を立てなかつた。そんなものだつたのか、と黒住は毒づいた。

身を翻して図書室を出る。と、長い廊下の先に見覚えのある人物が立つっていた。

「貴方も……ここの人でしたか。黒住……」「久しぶりすぎて忘れていたと思つていたよ、儀軋」

ほろつと零すような笑顔を見せたその人は、黒住の師、黒住此処だつた。最後に成田空港で見た、あの日のままだつた。お世辞にも若いとはいえない皺くちゃの肌にまともに整えもしないボサボサの髪、黒ぶちの伊達眼鏡。そしてやけに豪華に着飾られた不釣合いな服が印象的だ。見かけは気にするが、手入れするのが面倒くさいといつた様子の身なりだ。老婆のようなしゃがれた声が彼女の口から發せられた。

「白椿を……解放してくれたんだろ？　良くやつてくれたよ、儀軋。正直あたしは無理だと思ってたんだ。あんたはあたしたちみたいに異端じやないからね」

「俺は、自分に嘘をつきました。一番嫌いな嘘を」

「良いんじゃないのか？ 嘘をつかない人間はこの世にいない。あなたは真っ当な人間だつたつて証明された、ただそれだけのことじゃない」

「しかし俺は……黒住であること一度止めた」

ふう、と此処は距離を取つていた廊下を黒住に向けて歩いてくる。そして目の前数センチまで来たところで立ち止まる。身長の差か、黒住は自動的に彼女を見下ろすような形になる。それがなんとも申し訳なくて、黒住は思わずひざまずいた。

此処はその位置に黒住が来たことに思わず笑みを零し、優しく黒住の頭の上に手を置いた。

「あたしがあんたにして欲しかったのは黒住になることじゃない。それはもう諦めたつて前に言つただろう？ あたしがして欲しかつたのはただ一つ、間違つた世界に生まれたあたしたちの存在を白椿にも知つてもらうこと。そしてこの世界から連れ出してやること。そうだろ？？」

「はい……」

「あんたは良く頑張つた。どれだけ手を汚してきたかはあたしには想像出来ない。でも分かる。あんたは頑張つた」

数多の人を殺してきた。それが男であれ女であれ、老人であれ子どもであれ、人間であれ異端であれ。それは全て此処の後を継ぐための行為だつた。彼女もまた数多の人の命を奪つてきた紛れも無い悪であったのだ。

嘘という足を一步一步進め、真つ黒な階段を一段一段上がつていき、その頂上に見えたのはこの世界だつた。そこで彼は、足を止めた。

「もうお帰り、儀軋。あなたの生活してた世界にさ

なんと魅力的な言葉だろう。黒住は思わず顔を上げる。その先には優しそうに微笑みかける此處の顔があり、すがりつきたい気持ちに駆られた。だが、黒住はあえてその気持ちを突き放し、立ち上がつた。

「俺は、異端という階段の頂点を目指して、貴方という頂点を目指して今まで歩いてきた。しかし、もう限界を感じた。俺が立ち止まつたのはまだ踊り場だつたんだ」

「儀軋……」

「しかしその先に行く奴がいた。それもまるで苦労してないような、今までエスカレーターに乗つてやつてきました。貴方は徒労でしたね、とでも言いたげな顔で俺を見下して、だ」

此處は黙つて黒住の言葉を待つてゐる。弟子の成長を心から喜んでいるように。

「悔しいと思う。が、俺はこの先に進めないし進みたいとも思わない。だから、俺はこの踊り場でそいつの土産話を待つことにする」

「それは何故?」

「行く末を見たいからさ。創世者である、灰田が求めた結末のな

「欲張りだね、行かないくせして結果を求めるのかい」

「レールを敷いたのは俺だ。その上を走るのは列車。人間は走れん

「そうかい……」

彼は一体なにを求めたのだろうか。壊れた人間の壊れた世界を創世した彼はどんな想いだったのだろうか。それを黒住は知りたかった。レールを敷く人間にもたどり着けず、レールの上を走る列車に

もたどり着けない。『レールを敷きながら走る列車』のみに許される先を、彼は知つてみたかった。

沈んだ廊下に一人の沈黙だけが蔓延る。その空氣に耐えられなくなつて、黒住は何か話題は無いものかと頭を模索し、一つの質問を思いついて口に出した。

「貴女は、どこに行くんですか？ 奴らと同じ場所ですか？」

白椿は消えた。どこに消えたのかは分からぬ。人間の世界とう現世とはかけ離れた世界に生まれた彼らの行く先もまた、黒住の知りえないところだつた。此処は自嘲するような笑みを浮かべて答えた。

「あたしは地獄に墮ちる予定だよ」

「……地獄、か」

不思議と不可解なつつかえは残らなかつた。むしろ妥当だうと黒住は思う。

「あたしが殺し尽くしてきた人たち全員に土下座しに行くのさ。天国に行つちまつた奴には悪いけどね、どう考へてもそつちには行けそうに無い。大体、『悪』を象徴する存在として生まれてきて天国に連れてつてもらえるつてのもおかしい話さ」

「同意します。だが、『生まれることの無かつたはずの人間』を排除し、世界の均衡を保とうとした結末がこれというのも不遇な話だ。結果的に人を殺したことには変わりは無いんだが」

「そうさ。経過がどうあれ、破壊したものが何であれ、黒住はそういう立場だ。あたしたちは諸刃の斧、不要な木を切れば切るほど刃こぼれしていく。結果的な自己破壊。下らない、あてつけみたいな言葉さ」

白椿と何ら変わらない。そう此処は重苦しい表情で最後に付け加えた。ふう、と一度ため息を漏らし、言葉を続ける。

「連日の連續誘拐事件、犯人あんたなんだろ？？」

黒住の瞳に一瞬同様の色が写ったが、すぐに諦観する。気が付かないわけが無いのだ、黒住の目指す師である彼女に。

「派手にやつたねえ。あたしもジャンボジェット機に弾かれて無理心中とか考えた口の人間だからあんまり人のこと言えたもんじゃないけど、ものの数日で世界中の異端を片っ端から抹消していくとは思いつきもしないし、無謀つてもんだよ」

「灰田には妥協はしない。奴にどんな考えがあり、どんな望みがあるのかは知らない。だが奴が許されざる行動を取っているのは確かだ。それを許す理由が無い」

「それで異端を消した。で、罪悪感は？」

「無い。無論、これに嘘は無い」

はっきりとした口調だった。

此処はその言葉に腹を抱えて笑い出し、涙目に言い放つた。

「そりゃ、それじゃあ、あんたも地獄行きだね」

黒住も似合わない笑顔で答えた。

「喜んで」

人を殺しても悲しまない世界。それが黒住は大嫌いで仕方が無かつた。自分がそんな世界に足を踏み入れたことだけは、この黒住と

いう姓名を受け継いで唯一後悔したことだつた。自己破壊については異論など何も無かつたが、その先にある結果が殺人という狂氣的なものであり、言つまでも無いが常人である黒住にとつてそれが後味のいいものであつたはずが無かつたのだ。

人を殺したことには罪悪感が無いと嘘をつき、人が死んだことに悲しみを覚えないと嘘を付き、そうしていくうちに黒住の身体は自分に対する惡意へと染まつていき、嘘が本当になつた。よつて彼は、嘘をつかなくなつた。

大人になり、権力を手に入れ、黒住の目的は目前となつた。そしてそこまで来たところで、初めて黒住は気付いたのだ。自分が立つてゐる世界がいかに狂つていていたか。

「地獄なんて生易しい。今まで俺がいた世界に比べればむしろ優遇されてるといつものだ。もう、殺さなくて済むのだからな」

「ははっ、殺すのと殺されるの、どちらが辛い？ つつってね。馬鹿げてるよ、本当に」

此処は何かを懷かしむような穏かな視線をどこともなく向けて、微笑していた。

うん、と背伸びを一つ、老人の身体には立ち話は堪えたのだろう、氣だるそうに肩を回しながら身を翻して黒住から少しだけ距離を取る。

「さて、あたしはもう行こうかね。現世の未練は全部あんたが背負つてくれるみたいだし、年よりは若いもんに任せてさつさと逝っちゃうとしようか」

「そうですか……。師よ、最後に問ひて良いだらうか

「背中を止めることは無い。黒住は送り出す気持ちを込めてそれを言つ。

「俺は、貴女の背中に、追いつけただろうか」

目指したものは遙か遠く、加えて次元も違った。それでも黒住は目指さねばならんと自分を戒めて追つてきた。時には胃液を吐いた。時には血を啜つた。そして汚れていく中で、一歩近づいた気になつた。しかし思い返すとまだまだ足りないことに気が付いて、もつと手を伸ばした。手を伸ばすたびに、普遍から遠ざかっていき、自分が見失つた。そうするたびに、師に近づいていった。

けれども師はいなかつた。死んでいたからだ。目指す目標の形を失くした黒住は、自分の中での最高の悪を定めて走つた。それが師に近づく道かどうかなど全く分からぬまま、血の雨の中を突き込んだ。

問いを投げかけた。自分はこれでいいのだろうか、無駄な殺生を繰り返しているだけで、何の結果も得られていないのではないだろうか。黒住の惡意に近づかず、犯罪者への道を辿っているのではないか。しかし思いを振り切つて、自分に嘘をついた。

安心感を得られたのはつい最近の出来事だった。白椿を追つていった先で見つけた一人の女学生。一見して普通の学生で、黒住は単純に『異常だ』と感じ取つた。その学生が口にした言葉を思い出す。

『 貴方は、正義を振りかざす惡意なのね』

それはまるで、師の言葉のようだつた。そして次の二言で自分を定められたのだ。

『貴方みたいな人間ということね』

それはつまり、白椿と、灰田と似ているということだ。追つてきた道は間違いではなかつた。今思えば、黒住はあの女学生に感謝し

てもしきれないほどの言葉を貰つたのだ。恐らく皮肉だつたのだろう、女学生は黒住を毛嫌いしているように思えたからだ。しかしその一言で、黒住は自己破壊を完遂したと自信をもつて言えるようになり、師に近づいたと胸を張れるようになったのだ。

そして今、たどり着いた道の上に師の背中があつた。

「ごめんなさい」

此處は謝つた。しかし黒住は黙つているだけで、口を挟む気など毛頭も無かつた。師の言葉を待つ。

「あたしは寂しかつただけなんだ。白椿が、孤独で苦しんでいて、あたしが孤独なわけがないだろ？ 黒住には仲間が沢山いるなんていうのは嘘さ。本当は孤独で、孤独で仕方が無いんだ。人を殺すなんて有り得ない芸当をしているのに誰も攻めないし、何も起きない。いつそ警察に捕まつて牢屋にでもぶち込まれた方がましなくらい虚しかつたんだ、誰とも関れないってのはさ」

声にどもりが生じてきた。肩が黒住からでも分かるくらい上下している。

「仲間が欲しかつた。誰かあたしが死んでも覚えてくれている人が欲しかつた。だからあんたを見つけたとき、こいつをあたしと同じ人間にしてやろうつて思つたんだ。老人にありがちな悩みだろ？ 笑つてやつてくれ……。今更だとは思うけど、あたしはあんたに對してやつちゃいけないことをしちまつたんだ」

此處は必死で謝罪していた。自分の欲望を抑え切れなかつたことと、黒住を『普通』から遠ざけてしまつたことへの罪悪感から、止め处ない涙を流していた。

「あんたがそうやつて苦しんでいたとき、あたしは後ろで笑つてたんだよ。あんたに面倒なもん押し付けて死んで、満足してたんだよ……」

押し付けたものは重く、大きい。此処が今で考えれば、有り得ないほどのものを押し付けてしまったと後悔している。その様子が、黒住にはぼやけて写つていた。

「らしくもない。

黒住は思わずそう呟いていた。

「らしくもない。貴女らしくもない。貴女は黒住だ、常に悪意を向け、悪いことをしてればいい。俺に自分の重圧を押し付け、のうのうと暮らしているが良い。それが貴女だらう」

「それでも、あたしは謝らなきやならないんだよ……関つちやいけなかつたんだよ、あたしたちは」

「　　言つな――」

此処がビクツと身体を震わせるほどに大きく黒住が叫んだ。拳を握り締め、歯を食いしばり、言葉を繋ぐ。

氣持ちは痛いほどに理解できた。一体何度黒住自身が挫折しそうになつたかなど数え切れないほどの領域にあるほど、孤独の痛さを理解できた。だからこそ、彼はその発言が許せない。

「俺は貴女に確かに救われた。命だけではない、生き甲斐も貰い、道しるべを貰い、生きていく理由を貰つた。それを全て間違いだと言つのか。ふざけるな、俺は、確かに貴女の後を追つて良かつたと思っている。これで良かつたのだと、心の底から思つている――貴女に利用されていようがなんだろうが関係ない、俺はそうして、抛り所を得られたのだから……」

孤独だったのは此処だけではない。黒住もまた、孤独だった。

しかしそんな中に現れた女性が黒住此処であり、彼にとつて最初で最後であるう敬愛する人になった。その背中を追つて、何の後悔があろうというのか。その人物に重荷を背負わされて、何の不満があるうといふのか。

「貴女の望みは俺が叶えよう。俺が死ぬまで、俺は貴女のことは忘れない。決して、忘れない。……だから、今度こそ安心して行って下さい、黒住」

黒住は耐え切れなくなつて俯いた。懐からサングラスを出して、日も出ていないのにかけた。何かが、溢れないように。

「 そうかい」

そして、此処は決意したように言つ。背中は今だ黒住に向けたままで。

「じゃあ、あたしは先に地獄でパラダイスを満喫してくるとしようかね。弟子にそれだけ想われてるつて知つて、あんたのお願いを聞かないわけにもいかないだろ?」

「いつか必ず、後を追います……」

その弟子の言葉に満足し、此処はついに歩き出した。

一歩歩く音を聞くたびに、黒住は一つの思い出を思い出す。

黒住此処に拾われたこと。

黒住此処に育てられたこと。

黒住此処の姓名を襲名したこと。

黒住此処の後を追つていた時のこと。

そしてそのすべてが、今解放される。

優しい、とても優しい声だった。その発言は一体誰に向けた悪意だつたのだろうか。此処自身なのだろうか、それとも黒住にだろうか。それとも、悪意自体なかつたのだろうか。

生き甲斐を与えてくれた人物の最後の言葉。しかと、心に刻み付ける。

「お疲れ様。あんたはあたしの後をしつかりと付いてきてくれた。安心していいぞ、あんたは、あたしの最高の家族だ」

そうして、笑顔だけ残して、黒住此処はこの世から消え去った。その後を追うように、黒住は、一人涙を流した。

雨が降り出していた。家から出てきた時の天気などどうに忘れてしまったが、この虚空に取り残されたような廊下に雑音ながらも音楽を加えてくれるのは今の私には良いセラピーに感じられる。その騒音音樂の中を私は全力で走っていた。

そういうえば灰田純一と初めて会話を交わしたのもこんな雨の日だった。白椿さんと出会つたのも雨の日だ。嫌らしい運命を感じてしまう。嫌な風邪を引き始めたのも食欲不振になつたのも、物事に興味を感じれなくなつたのもあの日からだ。今考えれば妥当としか思えないと、あの日当時の私は今このよつたな状況で廊下を走っているとは思いも寄らなかつただろう。

一つ一つ教室を回るが、どこにも灰田純一はいない。本当に黒住の言つよつにここにいるのか疑問に思えてしまう。南校舎は大体回り、可能性が一番高いと踏んでいた屋上にも誰もいなかつた。それどころか雨で服をぬらしてしまい、良い骨折り損だつた。

とすれば、消去法からいって北校舎のほうなのだろうと予想する。私は南と北の校舎を繋ぐ渡り廊下を渡り、黒住がいるであろう南校舎へと移動した。南校舎には既に十足で踏み入つたとされる足跡が沢山残されていた。黒住が走つた後なのだろう。合流するのが最もな策かとも思えたが、あえて私は足跡の方向とは逆に走つていく。階段に足跡は付いていない。渡り廊下付近で別れたのだから、こちら側には行つてないのだろう。だとすれば、今までの時間をどこで潰していたのかが気になる。もしかしたら白椿さんを既に発見したのかもしれないと思つた。

一階から一階に一段飛ばしで降りていぐ。多少の焦りは私にもある。運動の後の発汗とは違う汗をかいているのは自分でも分かる。心臓の鼓動の大きさも同様だ。

何よりも、灰田と邂逅してしまつことへの緊張が一番大きい。

神との邂逅と表現すればその恐ろしさは直に伝わるだろうか。手に汗握るどころの騒ぎではない。握り締めたら汗の雫が零れ落ちそうなほどに湿っていた。

校舎の一階に来た。窓から校庭が見渡せる。すっかり雲は灰色に染まり、雨が激しく窓を鳴らしている。その横を私は駆け抜け、正面にある購買部を目指した。

終焉は開闢、開闢は終焉、終わりは始まりで、始まりは終わり。理論でもなんでもなく、良く聞く言葉だ。輪廻転生から春の入学シーズンまで、幅広く当てはまる言葉。少しキザなような気もするが、ごもつともだ、と私は今呟きたくなった。

灰田純一はやはり、そこにいた。こういう粹なことをする人間であるからまさかとは思っていたが、予想通り私たちが始まった場所で待っていた。

しかしそこにいる灰田はまるで灰田ではないように思えるほどに衰弱している。元々おかしい人間ではあったが、まだハツラツとした青年らしき容姿は持ち合わせていたはずだ。だが、今はやつれて、傍から見れば死人のようにも見える。廊下の壁に背もたれて、ぐつたりと首をうなだれている。視界が定まっているのか、意識が無いのか、魂の無い人形かのことぐびくりともしない。

私はわざと大きく音が立つように歩いて灰田に近寄った。雨音で搔き消されたかもしれない。もつと、もつと大きな音が欲しい。あいつに面食らわせてやる。

そう思って、おもむろにうるさく鳴る窓ガラスを横殴りに拳で打つた。同時に銀色の欠片が飛び散る音が鳴り響く。殴った手が熱い。欠片で切つたようだが、今更どうでも良い話だつた。

灰田はその音に気付いたというよりも、入り込んだ雨音に気付いたとでも言つようになつくりとこちらを向いた。相変わらず生氣はないが、ひょうきんな笑顔だけは残滓のようにかすかな割合で浮かんでいた。

「穩かじやないね。校内の窓ガラスを割るほど、青春に漫つてみたかったのかい？」

「冗談を叩ける口はまだ健在のようだった。雨でわざわざ濡れる位置に立つたまま、私は同じように不敵な笑みで返した。

「そうね、ギリギリそんな気分でもあるわ。今なら何でも許されそ
うだもの。貴方の頭上の窓ガラス、割つてあげようかしら」
「構わないさ。物理法則上、僕にそんな危害は無いしね」

「雨でずぶ濡れになるわよ？ 今の私みたいに」

「それは滑稽だ。校内で何故か雨に打たれる一人。下らなすぎてむ

しろ笑える図だよ。素晴らしい、素晴らしいすぎる提案だ」

「そう……それじゃあお望み通り……っ！」

思いつきり灰田の頭上位置にある窓ガラスを素手で叩き割る。顔
をしかめたくなるほどの痛みが走つたが、軽快に吹き飛んだ破片が
むしろ爽快な気分にさせてくれる。灰田の言つとおり、廊下にガラ
ス破片はあまり飛び散らなかつた。その変わり、私の血が辺りに水
玉模様を作る。

「ついでに私の血液もプレゼントよ」

皮肉っぽくそう言い、傷ついた手をふりと提げた。正直動かせ
るほど痛覚を失つていない。何気に泣きそうな自分に嫌悪感を覚え
る。

「久しぶりに人間の血を見た気がするよ。本当に痛そうだね

その発言に私は首をかしげた。

「久しぶり？ つい一ヶ月前、白椿さんの両親のどす黒い血を目の当たりにしたばかりじゃない。他愛の無い出来事だって忘れたの？」
「まさか。彼らの死は僕にとって忘れられないものさ。どうでもいいことではあるのだけれどね。……だが、君ももう知つての通り、彼らは人間ではないのさ」

「人間では、無い？」

どういうことなのだろうか。白椿の家も黒住の家も、無論田の前にいる灰田もみな普通ではない異端ではある。しかし、人間ではないといふのは解釈すれば『地球外生命体』ということなのだろうか。

「ふふふ、君の考へてることが手の平の上の出来事のようだ。僕らはエーリアンではないよ、この星の生物だ。だが、世界が違う。人間として分類される生物なのか、それが怪しい」

「……何？ わけがわからないんだけれど」

「アニメの世界を想像でもしてみてくれ。魔法を使える世界では『人間の形をしていても、魔法を中心とした世界のために、人間の枠に収まつていない』わけじゃないか。それと同じさ。僕らは僕らの世界にいるがために、……そうだね、白椿の血は君たちで言うケチヤップみたいなものなんだよ」

「ケチヤップって……血糊を使ったとでも言いたいの？」

それに灰田は首を横に振らずに、視線だけこちらに向けてついでいたらしいう雨から逃げるよう立ち上がった。

「血糊……良い表現だね。人形の中から血糊か。リアルだなあ……」

馬鹿にしたような口調で恍惚に漫る。見ていて気持ちが悪い。私は会話を逸らすように話を変える。

「結局、白椿さんは、どうだつてこりのよ……」

問うのは恐い。だが、もう今更と言えるところまで来ているのだ。大体の予想も付いている。世界が変わったといふのは、そういうことなのだろう。

私たちの世界にはとうに消え去った『仕来り』という独特の宗教的制度。それに苦しむ白椿さんを今まで見てきたが、私には正直漠然とした危機感しか感じられなかつた。そうしなければならないと。いう強迫観念は現代にはほとんどなくなつて、子育てにおける親のしつけというのも問題になつてきた昨今、私にはその感覚が無いに近い。これが世界の違いといふことなのだろう。物事を自分の定規で測ることが出来ない。これほどに辛く、そして無関係なことも他には無かつただろう。

「白椿は、人形だよ。そういう意味で言えば黒住も」

灰田が真正面から私と向き合つ形になる。雨で濡れた銀色の髪がやけに艶かしい。その歓喜と絶望を掛け合わせたような絶妙な表情がそれを顕著に表していた。とてもなくそれが、嫌悪感を催す。

「そして それを作つたのが、僕だ」

「……」

ふん、と私はそれを鼻で笑つた。

「神氣取りね。胸糞悪いナルシストなんかよりもつと悪質に気持ち悪いわ。今の一言に三度『悪』って入つてたくらいに最悪にね」「酷い言われようだなあ。僕は真実を語つていいだけだ。僕は彼らを作つて、世界を構成したんだ。悪と善と、それと人間をね」

嘘だと思う。この世界には人間なんていない。すべからく悪か善に偏った異端。もしくはそれ以外の『何か』しかいない。恐らく酸性の欠片も無いだろう兩粒だって、そうして考えれば同じくして異端だろう。そういう世界に彼は生きていて、過ごしてきたのだ。

何一つ私たちの世界と同じ部分なんて無い。殻だけが似ていて、中身はとんだパラレルワールドなのだ。灰田の努力は認める。彼がどれだけの苦労と苦恼を超えてこの世界を構成してきたのかは私の知りえる部分ではないだろうし、別段知つたところでそれもまたどうでもいい。重要なのは『そんな世界を作ってしまったこと』だ。

私が今立っているこの地面が空想のものなのか現実のもののか判断する材料はどこにもない。もしかしたら地球は壊滅的なまでに温暖化が進んでいるかもしないし、形だけ現代で氷河期に入れる前なのかもしれない。何にせよ、今までの場所と違う場所、違う世界を作ってしまったことが罪であり、罰せられるべきなのだ。

「頬つ面をしばいてやりたいわ」

ため息と同時に思わず考えていたことが口に出てしまった。灰田はそれに素で怪訝な表情をしている。

「僕のかい？ 何故？ この世界は君も望んでいた世界のはず。同属のみが集まる世界。何ものも自分と異なる生物はない。すべからく異端だ。不満があるというのかい？」

「……待って、頭が痛くなってきた。貴方、私がこんな世界を望んでいると思って作ったわけ？」

「そうさ。実際は君のため、というのにはかなりの齟齬があるけれど、結果的にはそうだろう」

「有り得ない。。。貴方、何を勘違いしてこんな狂った世界を創造したの？」

すると灰田は突然自慢げに表情を綻ばせた。それは今までの灰田のものではない。まるで初めて作ったものを褒められた子どものような無垢なものだ。

「この世界は『世界初』だ。誰も疎外されない世界。今までどんな神も作つてこれなかつたろう完ぺきな世界だ。人類は争わず、喧騒の声は存在せず、すべての人間が自分の何もかもをさらけ出して生きていける世界。多少急ぎ足だつたから綻びはあるだらうけれど、そんなものはあとで修繕すれば良い。そうだろ?」

わけのわからない問いを私に投げかけてくる。私は嘆息をつきつつ言つ。

「そんな叶いもしない理想の前に、その人間とやらはどこにいるの? ここに来るまでの間、残念だけど誰一人とも出会わなかつたわよ」

それを聞いて灰田の態度が一変する。掲げていた手をゾンビのように垂らす。今まで有り得ないくらいの感情の応酬だ。こんな人間だったのかと思わず身を引いてしまうほどだつた。

「黒住だ……奴が僕の世界の完成の少し前に、異端を片つ端から潰していった。理想郷の破壊者だ。白椿まで崩壊させやがつて……何が自己破壊だ。あんなものは僕の望んだものじゃない……」

黒住の名前を耳にして思い出す。

連續誘拐事件。神隠しとも言えるあの事件の犯人は黒住だったのか。世界規模で誘拐が起きているにも関わらず、その関連性を追及するどころか新聞で記事にもならなかつた特異な事件はやはり異端の

仕業だつた。元々いなかつたものを排除した、その程度のこととして黒住の中では処理されたのだろう。

だがそこで灰田を見る。彼の落胆の様子は思ひのほか大きそうだ。私たちの世界に自分とつりあえる人間がいると知つて、それらを迎える準備をしていたのだろう。焼いていた焼肉を横から取られるようなものなのだろうか。無残にもタレのみが残つてしまつた世界では、あまりに味が無い。

「こんな、こんな世界が貴方の望みなの？ 異端ばかりの味気ない世界が、貴方の望みなの？ ここに他の人がいたつて同じよ。知つてる？ 『理想郷ほどつまらない世界は無い』わ」

灰田が瞠目する。私が何を言つてているのか理解が出来ないようだ。私はそこで一冊の本の名前を挙げた。

「こわれたにんげんのこわれたせかい。私の記憶の中にいつの間にかしまつてあつた物語の名前よ。おままで」とだけをして、ずっと遊んでばかりの女の子の話。彼女が求めた理想郷。それがまさにここなんじやないの？」

孤独に生きる少女は求めながらも諦観し、未来を見据えてなどいなかつた。見つけるのはいつだって動かないおもちゃのみ。しかし、大人になるにつれその孤独も比例し、夢だと知りつつも再び求めるようになった。その理想郷。白樺家とまつたく同じ考えの下に編み出された世界は、『自分と同じ人間だけの世界』だつたのではないだろうか。

同族意識と言つてしまえば簡単だ。類は友を呼ぶのは現象ではなく意識だ。だから女の子は仲間だけを迎える世界を作つた。そういう力を持っていたから。

……というエンディングが、最も灰田にとって良いものなのだ。

この作品の著者である神の理想なのだ。
私は畳み掛けるように続ける。

「下らないわね。千差万別多種多様十人十色。差別もあれば偏見もあるように、相容れない人間なんてそこら中『ごまん』といるわ。寂しい？」
「ふん、雑魚のエゴな言い訳なんて聞き飽きたわ」

「……エゴか。君の言い分も分からぬではないけれど、そういう風に生まれてきた人間にに対する慈愛が欠けているね」
「……じ、慈愛？」

思わず吹き出しそうになるのを堪える。

「力を使い果たしたのか雨に濡れて風邪でも引いたのか知らないけれど、貴方、頭おかしくなつてない？ そんな子どもみたいな人間じゃなかつたでしょ」
貴方

「完成間近の工作を壊された気分なのさ。こればかりはどうでもいいで片付けられることじゃない」

「ふうん。ま、私には『どうでもいいこと』だけれどね」

すると灰田が心底憤慨したかのように額に青筋を立て、私の胸倉を掴み上げて、吐き散らす。

「何が、不満だ」

負けず劣らず睨み返し、心底つぶざりだといつよいつよいつへ。

「何もかもが、不満よ。狂った人間も狂った世界も、狂つて思われることも。そんな、貴方も勿論ね」「自覚が無いのか？ 君は大いに狂っている。僕らと、何ら変わりがないほどにな」

そんなことは分かつている。自分が如何に奇異で特異なものなのか、それは自分自身が一番良く分かつてることだ。だが、認めることは出来ない。私が灰田と同等の人物なのだと納得することなど出来るわけがない。

「私とあんたは違つ。もう誇大表現すれば銀河系レベルで違つわ」「それはこの世界に対する皮肉っぽいダジャレかい？」

「そうとも言うわね。けれど、あんただって気付いてるでしょう？だからあんな問い合わせ私に何度も投げかけてきた。そう認識させるためと、『そう認識させないために』」

胸倉を掴まれていて手を叩く。話すのには邪魔で邪魔で仕方が無い。灰田はその手を呆氣なく離し、私は数秒ぶりの地面の感触にありつく。

「まつたく。女性の胸倉掴むなんて失礼極まりないわね」

「ゴミくずなんてついてもいないので、払う仕草をしてそう言った。しかし、灰田からは返答は返つてこない。私は心配になつて声をかけた。

「どうしたの……？」

「僕は、人選を誤ったようだ。どうやら僕の世界では計れない人物を引き入れてしまつたらしい。まさか、そこまで聰明だとは思わなかつた」

乾いた音が漏れている。灰田は私を憎らしいものでも見るかのように睨んできた。不快だ。なんて不快な視線なのだろうか。物欲しそうな目をする餓鬼と同じだ。もはや『天才』と呼ぶに相応しい人

物はこの世界から消え去った。

「君は、本当の意味で優等生だつたんだね」

そう、私は眞の意味で優等生だ。だからここにいる。

「今なら、今ならあんたの問い合わせに真剣に答えることが出来るわ。聞
きたい?」

「聞こうじゃないか」

灰田が私に終始投げかけてきた問い。

一度目は天才とは何かを問うた。次いで優等生とは何かを問うた。
それはまさに灰田と私を比べる真理の問い合わせであり、私はそれに対し
ていつだつてオブラーートに包んできた。辞書で引かれる言葉を述べ
ることが優等生の役目ではない。それは国語の学士が述べることだ。
今なら良いだろう。天才と優等生の違いはこういうことだ。

私は大きく腕を振りかぶり、灰田の頬に向かって思いつきりそれを
放つた。一瞬、廊下に物凄い音量の乾燥した音が鳴り響く。手が
じんじんと熱を持つてくる。この痛みが優等生の仕事であり、その
痛みが天才が受けるべきものだ。

灰田は自分が何をされたのかいまいち理解出来なかつたようで、
頬を押さえることもなく無為に空中を見つめて呆けている。無理も
ない、あれだけの強さで叩かれたことなど無かつただろう。

「私たちが同じ異端で、それがそれぞれ『天才の異端』と『優等生
の異端』だとするわ。……まあ、この時点で大きな差があるのは明
白だろうけど、あえて分かり易く行動させてもらつなら今みたいな
感じかしらね」

「僕が叩かれて、君が叩く、かい?」

「そういうこと」

「……不服だけど、理解が出来ない。今ばかりは君の思考が読めないね」

当然だろ？。この程度で理解できたならば、灰田はこんなにも狂わなかつたはずだ。

「外に出ましょ？。お互に、頭を冷やした方が良いわ」

踵を返し歩き始める。足音から灰田があとをついてきているのが分かる。

雨に濡れた服がべつたり肌にくつつき、気温も低いことから身体を冷やしている。しかし、身震いすることすら忘れてしまつほどどの使命感が私を突き動かす。自然と歩幅は大きくなる。

昇降口を出て、強い雨音の世界に入った。濡れることも厭わず私は直進する。前髪から零が滴り落ちた。今はその感触がやけに気持ちが良い。

ふと二階校舎を見上げると黒住がこちらを見下ろしていた。何故だか非常にやつれた顔をしているように見える。しかし、私に気付いたのか窓ガラスを開けて自分の懷から何かを探つて、それを私に投げた。校庭の土が盛り上がるほどの衝撃でそれが落ちた。灰田はまだ来ていない。私はそれを拾つて、黒住に視線を送つた。

しかし黒住はそれには何も返さず、黙つて窓ガラスを閉めてしまつた。

後は任せた。そう取つて良いだろ？。

「そんなこと、頼まれなくてもやつてやるつもつよ……」

空を見上げた。相変わらず、晴れる予定はないようだった。手の平の中で、冷たい鉄の重みだけが私に決断を迫っていた。

おままごとしか出来ないのは、友達がいないから。

それ以外の遊びを知らないのは、ずっと一人のままだから。

物語には続きがあった。女の子はただ一人世界に取り残され、寂しく遊んでいたのだが、そのうちその孤独に耐えられなくなつていった。少し別の世界を覗けば、そこには溢れんばかりの人人がいるとうのに、自分はただ一人。一体何の恨みがあつて自分をこのような世界に閉じ込めたのかと、毎日枕を濡らしながら神を呪つたくらいに。女の子は世界の理不尽さに気付き始めていた。

だから、女の子は他の人を招待しようと思った。私自身、その考え自体は否定できない。だが、女の子はホームパーティーの準備をしただけで、招待状など一通も出さなかつた。それでは勿論人など集まるわけがない。人と触れ合わない女の子の知能はもはや幼児以下だ。

しかし、そんな日々も長くは続かず、女の子は不特定多数の人には招待状を送りつけた。送った人物がどのような人物かも知らずに、とにかく沢山の人々に来てもらおうと思つたのだ。だが、身元も分からぬ招待状には人々は目もくれず、ゴミ箱の中に全て消え去つていつた。

女の子は諦めない。ぞつとするような努力の量をこなし、本を読み、人の世界を知つた。そうして彼女は『自分に合いそうな人物だけ』を招待することに決めた。そうすれば無下に断ることもないだろうと予想したのだ。

集まつたのは、女の子と同じ、『おままごとしか遊びを知らない人たち』だった。招待状には「一緒におままごとをしましよう」とだけ書いた。それだけの文で人が集まるとは思えないが、物語ではかなりの人数が集まつたようだつた。

「でも馬鹿だと思わない？ 結局その面子でおままで」として遊んだ。何のために人を呼んだのか、全部忘れてしまつてゐるよ、そこの子は」

心底馬鹿にしたような口調で後ろを歩く灰田に言ひ。依然として灰田は死んだ魚のような目をしてくる。先ほど宿つた子どものような瞳の輝きも瞬く間にことか。名残惜しくも無いが、囚人を引導しているようでは氣分は良くない。

勝手に言つと良い、と灰田が口から言葉を零した。もうダメなのだろうか。力なくぶら下がる裝飾の腕は何も掴もうとなぞしていい。雨と一緒に排水溝に流れ落ちてしまいそうだった。

「立場逆転……どこの騒ぎじゃないわよ、もう。どうしたの？ 確かにあんたの世界は不安定な形で、それもあんたの望まない形で出来上がつてしまつたけど、それでもそんなに落胆することは無いんじゃない？」

「むしろ僕としては、その世界に巻き込まれた君がそれだけ冷静でいられることのが驚きだよ。さすが選ばれた異端ということかな」「別に私は巻き込まれたとか思つちゃいないわ。どうせ夢でしょ、とかそんな風にしか思つてないもの」

「樂観的なのか聰明なのか……」

「優等生だもの。常に冷静にならなきゃやつてられないわ」

実際は口だけだ。これは夢でもなんでもないだつ。先ほど窓ガラスを素手で割つたときの痛みは夢にしては痛すぎる。忘れていたが、手の甲からは血が滴り落ちてゐるようだ。雨の上に落ちて路上にふやけた模様を作り出していた。

雨が冷たい。これ以上歩いても何にもならないと判断し、長い校庭の半ば辺りまで来たところで私は立ち止まる。ちょいぱにこなら

ば、校舎の中から傍観している黒住にも良く見えるだらう。

「……さてと、天才と優等生の話だったかしら。あんた、何か言いたいことはある？」

私はそう灰田に催促した。灰田の考えていることなど手に取るよう分かるが、あえて一応聴いておくことにする。

「僕は……」この世界を作ったことを後悔はしていない。完成形とは程遠くとも、それはまた集めなおせれば良い話だ。けれど、君が僕らと違つたということがあまりにも衝撃が大きかつた。僕が落ち込んでいる理由はただ一つ、それだけだ」「ふうん。何、私に惚れでもしたの？」

そう微笑を浮かして冗談めかして言ってみる。

「そこまで固執していた、という意味合いで言えば間違つてはいいだろ？ね。僕とともにに会話できたのは君が始めてだ。他の人は全て一言一言交わして異端へ還つて行つた。僕との会話で自分の何もかもを失い、破壊され、自分が異端だと認識することが出来た。しかし、君はいつまでたつても『自分を見失ははしなかつた』」

それが灰田純一の『白椿崩壊』の手口。白椿が殺し、黒住が破壊するという能動的なものに対する唯一相手に対して受動、いや自動的なものとして相手を壊したセルフディストラクション。

唯一、彼らの中で『待つていること』を選んだ人間の手口だつた。

「多くの異端を扉の中へと招き入れたつもりだつたんだ。でも、ふと辺りを見回すと誰もいない。最初はどうしてか分からなかつたが、きっと自分と同じものではないのだと思つた。だから、君を見つけ

たときは飛び跳ねて喜んだものだよ。それでこんな結末とは……残念すぎる

語る表情は懐かしいものを見る田のよう。もしくは、自分の死を悟つて走馬灯に身を任せて何かを待つ者のよう。憂鬱、というもののだろうか。

「私は……私は残念だけれどもそういう風に思われても迷惑にしか思わないわ。大体私の平穏な日常をぶち壊してくれたのはあんただしね。むしろ腹立たしいわ」

「そうかい……。でも、君と僕の、何が違うんだ？」

灰田はそう問うた。その問いは間違いじやない。正しく、清い質問だ。単純な疑問。彼の得意な理論なんて何も存在しない。

天才と、優等生の違いとは何だったのだろうか。何故、私は灰田とここまで関りあいを持つてきて、今更あんたとは違う、などと口に出来たのだろうか。

事実、私はつい一ヶ月前までは灰田の自己崩壊の餌食となっていた。

森野医院での一件。虫嫌いな私は虫を踏み潰してしまった。記憶に薄いが、熱中症で倒れたわけではなかつたことは確かなのだ。勿論虫嫌いな私がそんな気味の悪いことを成し遂げられるわけが無い。言えば、あの時は『壊されていた』のだろう。わけのわからないことも口走つていたかもしれない。

灰田は会つたびに私に問い合わせを投げかけ、ある種の比喩で何かを伝えようとし、全てはぐらかしてきた。

織田、豊臣、徳川の図。白椿、黒住、灰田の図。誰が強かつたとか、誰が弱かつたとか、そういう問題ではなかつたのだ。彼は单纯

に、『自分が待ちに徹していた人間』だということを伝えたかったのだろう。いや、加えて他の二人の立場をも説明していた。

また、彼は問うた。

世界と神はどちらが先に生まれたのだろうかと。今考えれば、あれは灰田自身の立場と、その存在について誰かに聞いたかったのだろうと私は思う。そして、これこそが全てだった。

神が先か、世界が先か。そんなことは全世界の生物という生物の最もあとに生まれたとされる人間には創造も付かないことだ。だから私のあの時の問いの答えは『分からない』が正解だった。事実それは灰田にも分からぬことだろう。

だが、それでも言えることがあるのだ。

神がこの世界に生を受けたわけ。何故、神が生まれたのか。

世界が、寂しいから、神が生まれた。

そしてその神が、寂しいから、生物が生まれた。

灰田純一はその生まれた神の一人だった。彼の望んだ世界は、自分が寂しくない世界にも関らず、生み出すことを最初から考えず、誰かを他の世界から招くことだったのだ。

物語の女の子のように、自分とともに無意味なおままごとをしてくれる無機質な友達ばかりを望んでいたのだ。

天才是世界を作ることが出来た。だが、天才がゆえに、世界を作ることしか灰田純一には与えられなかつたのだ。数式を編み出す、解く事において天才がいたとしても、その人物が日本の古語や石版に記された謎の言語の解明の天才には成れないよう、世界を作り出すことという偉業を成し遂げることが出来た灰田には、他人と関りあうことへの才能が一切無かつたのだ。

だから、「こわれたにんげんの、こわれたせかい」だったのだ。

そして、対する私は、そんな天才からはかけ離れた世界にいた。

どこの誰が生み出した世界かは知らない。だが、平穏で、日常で、何も無くて、全てが揃っていた世界だった。

喜びも悲しみも、死も生も、普遍も狂氣も存在した。

そしてそんな中で私は異端だった。何がどう異端なのか分からないほどに異端だった。

私には喜ぶことも悲しむことも出来た。死ぬことも生きることも左右するほどの力があった。日常を過ごすことも狂氣の世界に住み込むことも自由だった。ただ一つ、世界など作れなどしないということを除いて、何もかもが出来た。

レールの上を走ることが出来たし、レールを作ることも出来た。ゆえに道は多数あり、そうして枝分かれした道を作ったからこそ、私には『寂しい』という感情は一切芽生えなかつた。

私は、世界を作ることが出来ない代わりに、『扉』を作ることが出来たのだ。他人との架け橋、塞ぎこんだ世界の解放。そうして、私は優等生を名乗つていた。

「あんたが世界で、私が扉。そこまで差は開いていたのよ」

いまや世界は黙りこくれていた。灰色の雨を降らすのみで、それ以外が死んでいた。灰田は濡れた髪を払おうともせず、そうか、と小さく呟いてうつむいたままだつた。

「一つ言わせてもらえば、あんたは神になんか向いてないわ。さつさと止めて人間にでもなっちゃいなさい」

「は？」

いつか私が灰田の言葉に大口を開けたように、灰田もそうして珍しいものでも見るかのような目で私を見た。

「だからあんたには神なんて向いてないの。全知全能であらせられ

る神が、寂しいとかそんな下らない理由で、世界一つ作ってんじゃ
ないわよってこと

「馬鹿にしているのか君は？」

「馬鹿にしている？ そうじゃなくて馬鹿でしょ、あんた。天才と
馬鹿は紙一重……変態だったかしら。まあ、どうせよ同じね。
おままで遊んでる青年なんて変態そのものじゃない」

「君つて人は……一体何をしにきたんだ」

怒りをあらわにして灰田が吐く。何をしこきたと言われても、灰
田に呼ばれたからとしか返しようが無い。

……というのは嘘だ。言い訳だ。ここまで来たら、意思に従うし
かない。

私は黒住から譲り受けた鉄塊を胸の高さまで上げて、弾が装填さ
れているかを確認する。残弾は一発のみだった。安全装置を下げ、
その女子の腕には負担が大きい重さを灰田のほうに向けた。

「……僕を、殺しに来た、ということかい？」

怖れている様子は微塵も無かった。覚悟を決めた、ということだ
らう。

「殺しても良い、とは思ってるわ。私が元の世界に帰れるならね」「
保障は無いよ。少なくとも、この世界からは出られるだろうけど。
異次元の話なんて所詮人の形をしている僕には予想も付かないこと
さ」

「ま、だらうと思つたわ。だから、ここであなたに選択肢を広げる
ことにした」

雨脚が弱くなつた。ポツポツと、誰かの涙のように私の頬に雨粒
が落ちる。灰色の空は段々と青色を取り戻しつつある。日差しはま

だでない。

「『』で死ぬか、扉をぐぐるか。』の『』择よ」

引き金を絞る。逃げはしないだろ？が、私は灰田に選択を迫るためには、そうせざるを得ない。

「扉をぐぐるとこつのは、どうこう未来の話だい」

ふん、と私は鼻を鳴らす。口元を吊り上げて、精一杯いやらしく答える。

「あんたみたいな寂しい子のために、私が特別に招待状を送つてやるって言つてるのよ。普遍的で、残酷で、とても楽しい世界へのね。勿論条件があつて、あんたはきっと神を止めなきゃいけないわ。人間の世界に神なんて場違いな生物いらぬもの」

灰田は黙る。頭の中の細胞という細胞をフル活動させてさぞ苦し惱んでいることだろう。そのままがやけに面白くて、私は不意に笑みを漏らしてしまった。

それに釣られたのか、灰田も似合わない笑みを浮かべて言つた。

「どうすれば、神を止められるんだらうか……？」

「それはあんたの仕事でしょう？『セルフディストラクション』さん？」

「そうか……そうだね。これは僕の仕事だ。君に頼むべき」とじやなかつたね

「ええ。でも、馬鹿なあんたのために、私も少しだけ手伝つてやることにしたわ。一応あんたに了承を取つておきたいのだけれど、良い？」

灰田は静かに頷いた。私もそれに返すように頷く。

空から日差しが覗いた。雨に濡れた路地が光を反射して輝く。とても眩しい。私は思わず目を背けて、手で影を作った。灰田の姿が見える。だらしのない、びしょびしょに濡れた服で立っている。その背後には扉があった。

握つたものに力を込める。

「私があんたの世界に生まれて、黒住や、白椿さん、それにあんたみたいな変な名前をつけられるのだとしたら、こう呼ばれていたかもしだれないわね」

灰色の空を切裂くよつて、銃弾が飛び出す。

「『セルフディストラクション世界破壊』とかね」

世界に亀裂が入る。灰色の空はどんどん青空へと変わっていく。ここまで長かった。孤独に飢え死ぬ神との世界へ架け橋をかけることが、これほどまでに難しいことだとは思わなかつた。それをなしたのも、私が優等生だからだらう。私の後ろに、一つ、世界が出来上がる。

まとめて全員に招待状を送つてやる。狂つた世界も狂つた人間も、白椿家も黒住家も。そうしてまた一つ、私たちの世界は面白くなつていくのかもしれない。

灰田がこちらに歩み寄つてくる。相変わらずの綺麗な顔に、紅葉模様が一つ。滑稽な光景だつた。

「君に、聞きたいことがあつたんだ」

「何？　スリーサイズなんて教えてやんないわよ」

「安心してくれ。そんなもの後から何度も調べてやるわ」「変態ね……。で、何？」

彼は手を差し出した。私は、それを握った。それで世界は繋がつた。

「君の名前を、聞かせてくれないか？」

夏の日差しが降り注ぐ。降り注ぐ、という意味合いで言えば、夏の日差しよりも蝉の声のほうが大きいと私は思う。虫嫌いな私については、稀に部屋に飛び込んでくるのは「遠慮願いたい」ところである。

道路の中から吹き上げるよにして陽炎がやらやらと町をゆがめている。夏季長期休暇に入り、町並みには人が溢れていた。親子連れから制服姿まで多種多様。強いて言つなら背広姿の男性女性には敬意を支払わざるを得ない。お勤めご苦労様です、と知らずに咳いていた。

「先輩聞いてますかー？　陽炎なんて見つめてたって何も見つかりませんよ？」

横から少女の声が割り込んできた。少女の名前は白椿菊乃。可愛らしいポニー・テールが特徴であったが、夏場は暑いとのことで今はショートになつている。

私たちは今マクドナルドで昼食を取つていた。相変わらず白椿さんのトレイの上には身の毛もよだつ量のジャンクフードが顔を並べている。よくこれだけ食べて太らないものだと感心する。いや、運動をしているわけではなく、単純に体质の問題なのだろうが。それならばそれで羨ましいというものだ。

「それ、毎度思うけれども少しは自重出来ないのかしら。見ていて気持ち悪くなりそうなんだけど」

「あ、あれですか。このなんとも言えない香りがダメなんですか。分かります、あたしもピクルスとか見るだけで吐き気しますもん。漬物だかなんだか知りませんが、ジャンクフードなんですからジャ

ンクで良いじゃないですかをあたしは業者に文句いいたいですね。

レタスとかは大歓迎なんですけど

「单なる我慢じゃないそれ……」

「いいーえ！ これは日本の国民調査によつて出された統計ですよ先輩。『ピクルスは必要か否か！？』 という質問に対し、80%の人が『知らない』と答えています。美味しいものには人気は出ない。因果ですね因果」

「絶対嘘でしょう。少なくとも私はピクルスいる派よ。理由は無いけど」

「先輩……」愁傷様です。あと「ちやうわまです」

「早い……」

何度見ても慣れない。胃袋が宇宙といつよりも、口内が宇宙だろう。どれだけ詰め込めばそんなことになるのか全く理解が出来ない。近日体験した異次元旅行よりもこちらのほうが大いに謎過ぎるよう思える。

「……で、何の話だつたかしら」

下らないことに頭を使つっていても仕方が無い。白椿さんに視線を戻す。

「ああそうでした。なんですね、黒住が一週間無人島生活を体験させてくれるらしいですよ！ 離れの孤島……バカンスですよバカンス。素晴らしいじゃないですか」

「それはバカンスじやなくてサバイバルつていつのよ白椿さん。あ

とそれ、貴女の親に外出許可取つてるの？」

「勿論ですよ。へつへつへ、うちのお母さんもお父さんも、あたしの言つ」とには逆らえませんからね。可愛い娘の頼みですし

「そつ……なんか、色々大変ね……」

白椿さんの家は全てが元通り、になれば良かつたのだが、白椿家のしきたりを全て失つてしまつた両親は今までの奇行を悔い、過剰とも思えるほどに白椿さんを大切にするようになつてゐた。溺愛とはまた違うのだろう。繫がれた犬と表現するのが正しいのだろうか。一時期はその錯乱した記憶のみが残つてしまい、警察に出頭しに行こうとしたことがあつた。そうすれば白椿さんはまた一人に戻つてしまふ。私はそれを全力で止めに入つたのだ。世間で罪にならないのが奈落の底の奇跡か。あの日殺害された多くの人たちも、まるで夢を見ていたかのように平然と日常を送つてゐる。

「黒住の野郎、無駄に資金とか権力だけはありますからね。利用しない手は無いですよ」

「般若がいるわ……」

いつひつひ、と下品に白椿さんは笑つ。手元にあつたジュースを取つて、一口飲む。どうやらむせたようだ。

「（うつほ）ほ……。んまあしかし、つい数ヶ月前までの出来事が嘘みたいですね。先輩の前で号泣したのが今更恥ずかしく思えてきました

「そうね。本当に夢のようだつたわ」

つい、数ヶ月前。

私は目の前の白椿さんと出会い、他に黒住と、そして灰田と出合つた。あの頃はまだ互いを互いで試しあうギクシャクした仲だつたが、今では家族のようだ。彼らにとつては繫がりを持てたことが何よりも嬉しいのだろう。黒住は黒住で自分の使命から解放されたとか何とかで、すぐどこかへ旅立つてしまつた。何経由かは知らないうが、白椿家とはちよくちよく連絡を取つてゐるらしいが。

灰田純一は今もどこにいるかわからない。どこかで作業着を着ているかもしないし、黒塗りの車を乗り回しているかもしないし、橋の下で震えているかもしない。彼とはあの世界で手を繋いだ後、一度も会っていない。彼が拒んでいるのか、単純に見つけられないのか。せめて生死の安否くらいは確認したいと思つていてる。

ホント、どこに行つたのやら……。

空は余計なくらい晴れ渡つていて。あの日から一度も灰色の空を見ていません。梅雨の時期も過ぎたところに、どうしたことだらうか。

「灰田純一……」

白椿さんが唐突にその名を口にした。呆けていた私はどこかに灰田の姿が見えたのかと思い、急いで辺りを見回した。しかし、あの目立つ銀色の髪の毛は見当たらない。

「あ、いえいえ、違うんです。ちょっと想い出しただけで」

「そう……。一体どこにいるのかしらね、あいつ」

「……先輩。人と、繋がれるつていうのはとても素晴らしいことですよね」

「急に何？ そりや良いことでしよう。それとも性的な意味で？」

「そんなセクハラ発言求めてませんよあたしはー。その、なんていふか……こつまでも、一緒にいられるつていうことですよ」

赤面する」とも無かつたので、きっと良い意味で言つたのだろう。

「あー、あたしもそつこつ人欲しいなー」

なんだか棒読みで白椿さんが物欲しそうに言つた。ちらりちらりとこちらを盗み見ているのは気のせいではないだろう。

「私がなつてあげてもいいわよ？」

「え？ マジっすか！？」

「勿論冗談よ」

「うわつ、今の結構ショック受けましたよあたし。一瞬涙腺緩みましたもん」

「白椿さんにも良い人見つかるわよ。……と、私も人のこと言つてられないんだけどね……」

「あーあ、あたしたちの中ですつこう幸せモンは一人だけですか。

悔しいですねー」

「一人？ 誰？」

「んにゃ、なんでもありませんよ。それはそつと、無人島の件ですけど……」

あの日、降っていた雨が、誰かさんの涙だとすれば、いつして雨が降らないのも良いかな、と私は思った。

きつとまた、誰かが雨を降らす。その日まで、どうかこの平穏が続きますように。

Hプローグ（後書き）

どうも初めまして、『じぶた』してました。蜻蛉です。
放置から役一ヶ月……？経つて、やっと完結させることが出来ました。そのあとがきとして、不肖蜻蛉がお送りいたします。
この『セルフディストラクション』という作品、実は3万文字程度、話数にして8話辺りで終わる予定の作品でした。したら何がかったのか、こんなことに……。

プロットもテーマも構成も何も決まってない状態での執筆開始。正直完結までの道のりは程遠く、かなりの苦難がありました。

まあしかし、結果としてあいつたエンディングにたどり着いた限りです。いやはや、綺麗な綺麗じやないのか、それは私には分かりません。

なんだか大分力オスな物語なので、多少おかしいなーとか思う部分があるかもしれません。そこはなんというか、寛大な心で私に知らせてくれるとありがたいと。

では、この半年あたり、お疲れ様でした俺。そしてこの作品にお付き合い頂き、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1562c/>

セルフ・ディストラクション

2010年10月11日02時03分発行